岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第588集

平成22年度発掘調査報告書

立花南遺跡　上日影遺跡

熊の沢Ⅱ遺跡　高殿Ⅱ遺跡

ほか調査概報(26遺跡27調査)

2011

(財)岩手県文化振興事業団

平成 22 年度発掘調査報告書

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、平成22年度に当センターが発掘調査をした遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊するものです。全県下で30遺跡31件、約11万㎡が調査され、旧石器時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました委託者をはじめ、地元の各市町村教育委員会及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成23年３月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　池　田　克　典

目　　次

平成22年度の調査結果について …… 1

Ⅰ 発掘調査報告

（1）立花南遺跡（北上市）…… 5
（2）熊の沢Ⅱ遺跡（遠野市）…… 35
（3）上日影遺跡（遠野市）…… 37
（4）高殿Ⅱ遺跡（奥州市）…… 39

Ⅱ 発掘調査概報

（5）芋田沢田Ⅳ遺跡第2次調査（盛岡市）…… 59
（6）芋田沢田Ⅵ遺跡（盛岡市）…… 60
（7）向Ⅲ遺跡第2次調査（遠野市）…… 61
（8）尾肝要Ⅰ遺跡（田野畑村）…… 62
（9）姫松Ⅰ・Ⅱ遺跡（田野畑村）…… 63
（10）大平野Ⅱ遺跡（奥州市）…… 64
（11）小屋野遺跡第2次調査（盛岡市）…… 65
（12）高畑遺跡（矢巾町）…… 66
（13）石崎貝塚（基幹農道整備事業関連）（一関市）…… 67
（14）石崎貝塚（経営体育成基盤事業関連）（一関市）…… 68
（15）国分遺跡（奥州市）…… 69
（16）川端遺跡（奥州市）…… 70
（17）堤遺跡（奥州市）…… 71
（18）八反町遺跡（奥州市）…… 72
（19）中畑城遺跡（奥州市）…… 73
（20）堰田遺跡（奥州市）…… 74
（21）机地遺跡（奥州市）…… 75
（22）安久沢東遺跡（奥州市）…… 76
（23）田高Ⅱ遺跡（奥州市）…… 77
（24）山脈地遺跡（住田町）…… 78
（25）野古Ａ遺跡第30次調査（盛岡市）…… 79
（26）飯岡才川遺跡第17次調査（盛岡市）…… 80
（27）細谷地遺跡第26次調査（盛岡市）…… 81
（28）矢盛遺跡第27次調査（盛岡市）…… 82
（29）中平遺跡（野田村）…… 83
（30）佐原Ⅱ遺跡（宮古市）…… 84

平成22年度の発掘調査成果について

平成22年度の発掘調査事業は23遺跡24件86,685㎡で開始したが、年度途中での中止や追加を含めて最終的には30遺跡31件107,197㎡の調査に着手した。本調査以外では、農業基盤整備事業等に関する試掘確認調査を実施している。

後期旧石器時代では奥州市中畑城跡(19)を調査した。石刃や剥片など10点ほどの後期旧石器時代後半の遺物が出土している。調査は次年度に継続する予定で、全容解明はそれ以降となる。

縄文時代では盛岡市芋田沢田Ⅳ遺跡(５)・小屋野遺跡(11)、奥州市大平野Ⅱ遺跡(10)・田高Ⅱ遺跡(23)、遠野市向Ⅲ遺跡(７)、一関市石崎貝塚(13・14)、住田町山脈地遺跡(24)などを調査した。

芋田沢田Ⅳ遺跡は昨年に継続し、配石遺構の下位などを調査した。中期末～後期初頭の住居の他に、早期から前期初頭の竪穴住居跡が30棟以上からなる集落であることが判明した。同時期の集落としては最大規模となり、次年度に継続する調査が注目される。小屋野遺跡は後期中葉の竪穴住居跡７棟と晩期の竪穴住居跡１棟、土坑45基等が検出され、梁川流域の縄文時代集落の資料が追加された。大平野Ⅱ遺跡は中期の竪穴住居跡1棟と土坑15基などが検出された。田高Ⅱ遺跡は、竪穴住居跡1棟と陥し穴状遺構・遺物包含層などが検出され、前期を主とする土器が大コンテナで16箱ほど出土している。向Ⅲ遺跡は陥し穴状遺構17基が見つかっている。石崎貝塚は貝層が区画整理等で破損を受けていたが、土坑11基と遺物包含層が検出されている。山脈地遺跡は晩期の竪穴住居跡１棟、長径14mを超える前期の大型竪穴住居跡２棟等の遺構と早期の貝殻文土器など大コンテナで80箱余りの遺物が検出されている。

弥生時代では、宮古市佐原Ⅱ遺跡(30)がある。焼土と土器片等の出土である。

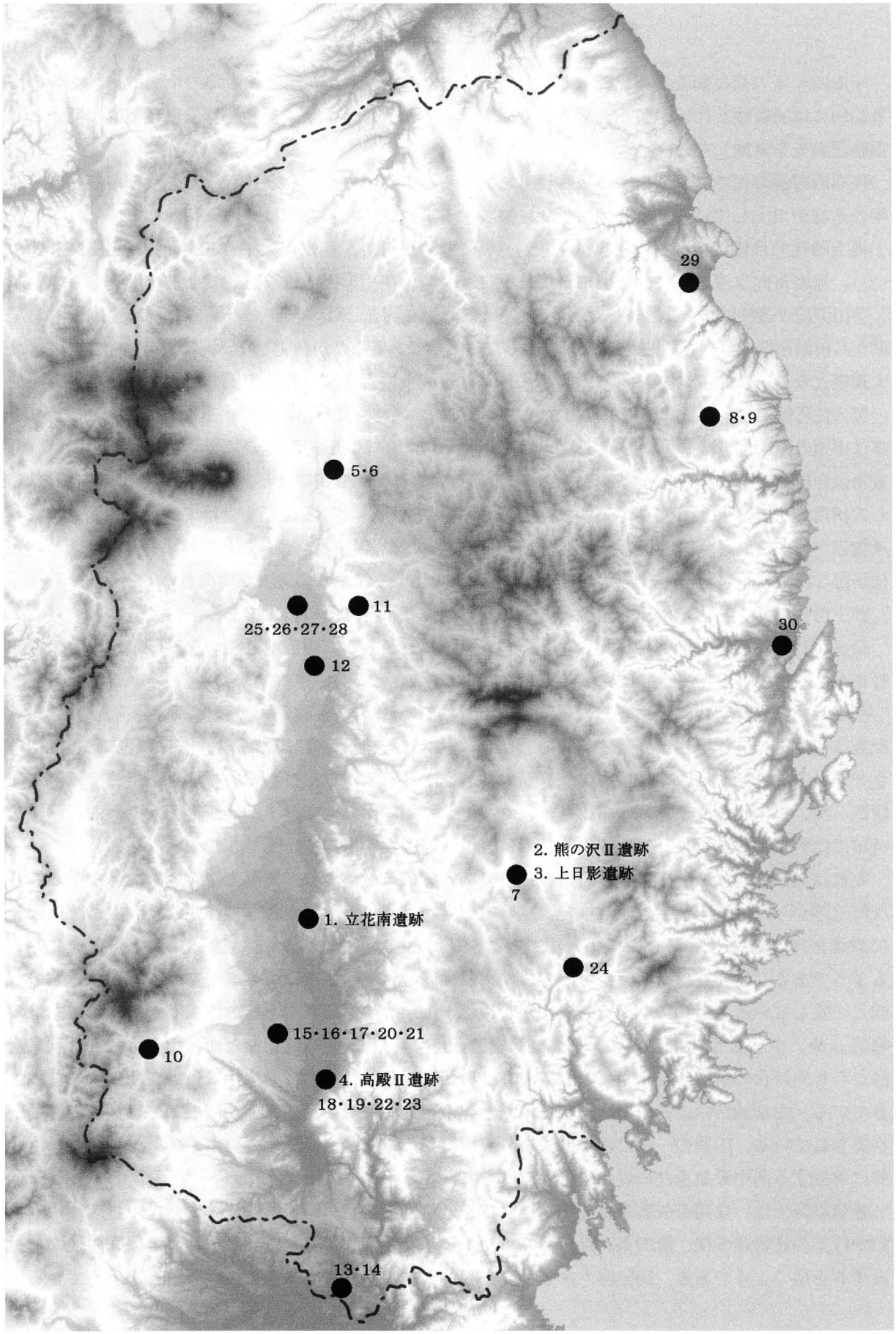
奈良時代は、盛岡市細谷地遺跡(27)・野古A遺跡(25)がある。細谷地遺跡からは竪穴住居跡１棟、野古A遺跡からは竪穴住居跡18棟が検出されている。

平安時代は縄文時代同様に多くの遺跡で検出されている。盛岡市細谷地遺跡(27)・野古A遺跡(25)・飯岡才川遺跡(26)、奥州市堤遺跡(17)・ 机地遺跡(21)、遠野市向Ⅲ遺跡(７)、矢巾町高畑遺跡(12)などがある。堤遺跡は竪穴住居跡２棟、竪穴状遺構１棟などが検出されている。机地遺跡では竪穴住居跡５棟、竪穴状遺構１棟等が検出され、カマド跡や炉内から大量の土師器が出土している。細谷地遺跡では竪穴住居跡14棟、飯岡才川遺跡では３棟、野古A遺跡でも３棟検出されている。

中世は奥州市八反町遺跡(18)・中畑城跡(19)・安久沢東遺跡(22)・田高Ⅱ遺跡(23)などがある。八反町遺跡からは12世紀後半の掘立柱建物跡５棟や井戸２基・道路跡などが検出された。道路跡は両側に側溝を持つ幅4mほどのもので、東西方向に延びており、西側で奥大道、東側は北上川に通じているようである。建物跡は二面庇のもののほか、四面庇の仏堂のようなもの等があり、軸線は道路の方向と一致している。遺物は中世陶磁器・かわらけ・下駄等の木製品である。田高Ⅱ遺跡では、中世の堀跡３条、中～近世の溝跡29条、掘立柱建物跡18棟を含む630余の柱穴などが検出され、安久沢東遺跡からも同時代の遺構・遺物が出土しており、奥州藤原氏時代の庶民の生活場所等が明らかになってきている。中畑城跡は、安永風土記に樫山館と記載されている中世城館で、内堀の他に複数の外堀が検出されている。内堀の一部には土橋もあり、漆器等の木製品も出土している。細谷地遺跡では、北側に隣接する向中野館遺跡の堀の一部が確認された。

近世以降では、盛岡市矢盛遺跡で建物跡３棟や近世陶磁器、奥州市国分遺跡からは中世末以降近世にかけての建物跡５棟、溝20条、井戸６基、土坑13基などが検出された。建物跡は２面庇の建物と付属する小屋のようである。陶磁器や木製品・鉄製品の他に炭化種実や昆虫の羽なども出土している。

（調査第一課長　佐々木清文）


29
8・9
5・6
11
25・26・27・28
30
12
2. 熊の沢Ⅱ遺跡
3. 上日影遺跡
7
1. 立花南遺跡
24
15・16・17・20・21
10
4. 高殿Ⅱ遺跡
18・19・22・23
13・14

Ⅰ　発掘調査報告

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42 × 32 × 30cm

中コンテナ：42 × 32 × 20cm

小コンテナ：42 × 32 × 10cm

（1）立花南（たちばなみなみ）遺跡

所　在　地：北上市立花地区第10地割ほか
委　託　者：国土交通省東北整備局岩手河川国道事務所
事　業　名：北上川中流域治水対策事業（立花地区）
発掘調査期間：平成22年８月２日～11月２日
遺跡コード・略号：TM-10・ＭＥ 66-2128
調査対象面積：4,900㎡
調査終了面積：4,900㎡
調査担当者：星　雅之・菅野　梢

1　調査に至る経過

立花南遺跡は、「北上川中流部治水対策事業（立花地区）」の築堤盛土工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

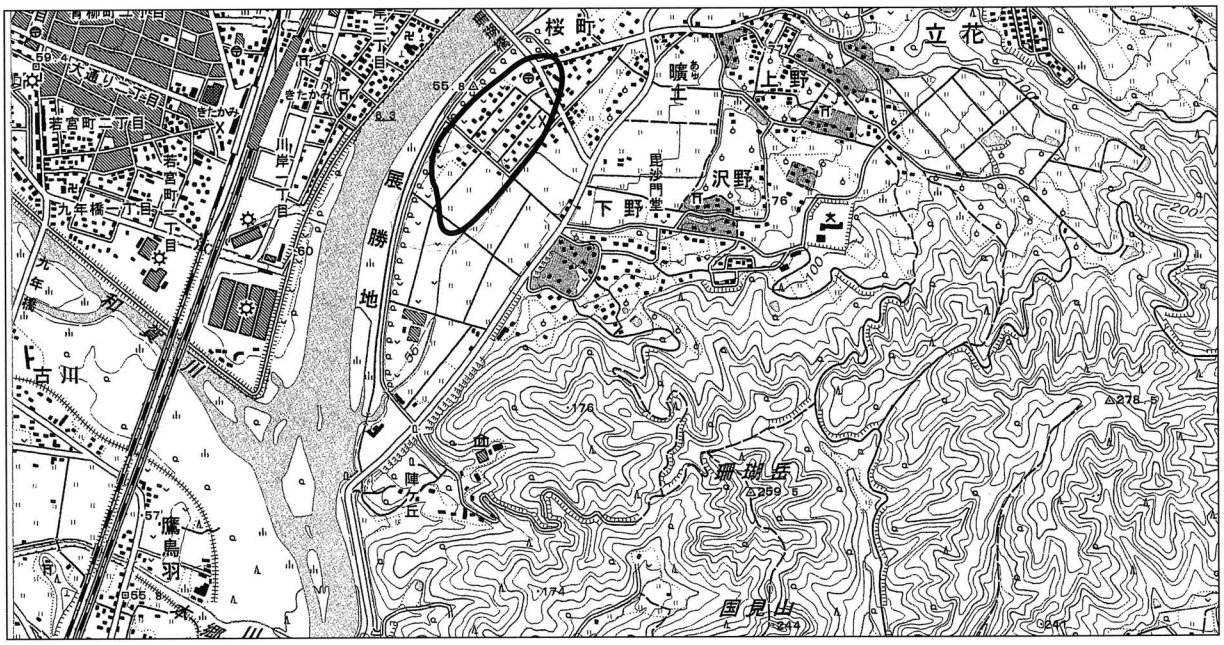
北上川は、岩手県岩手郡岩手町御堂にその源を発し、幾多の大小支川を合わせて岩手県を南に縦断し、岩手・宮城県境の狭搾部を経て宮城県石巻市で太平洋に注ぐ、幹線流路延長249kmの一級河川である。事業対象地域である「立花地区」は、北上川上流左岸76km付近に位置し、平成14年７月洪水及び平成19年９月洪水により、僅か５年間で２度も甚大な浸水被害が発生している。背後地には住家等の資産が集中していることから早期の治水対策が必要となっているため、事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手河川国道事務所から平成21年８月27日付国東整岩工一第63号「埋蔵文化財発掘の通知及び試掘依頼【北上川中流部治水対策事業（立花地区）立花南遺跡】」により岩手県教育員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成21年９月７日に試掘調査を実施し、工事に着手するには立花南遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成21年９月16日付教生第795号「北上川中流部治水対策事業における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当事務所へ回答してきた。

その結果を踏まえて当事務所は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成22年７月29日付けで財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）



2　遺跡の位置と立地

立花南遺跡は、ＪＲ北上駅から東へ約１km、北上市立花地区第10地割ほかに位置する。遺跡は北上川東岸の自然堤防及び氾濫原に立地し、標高は53～57m、調査区の現況は水田、畑地、造成地、原野などである。この遺跡は、過去に北上市埋蔵文化財センターにより発掘調査や試掘調査が実施され、古代の竪穴住居跡や土師器、須恵器及び縄文中期・晩期の土器が出土している。また、北約500mには平成21年度に当埋蔵文化財センターにより発掘調査された立花館遺跡が所在する。

3　遺跡の基本層序

基本層序は、試掘トレンチや調査成果から次のように捉えた。土質の表記は、主体を前頭に、客体を後に付している（※例として粘土が主体で砂が客体の場合は粘土質砂質土）。

Ⅰ　層・・・表土・現代の水田土・整地盛土層　層厚 80～150cm　※平均的には100cm前後の厚さでみられる。

Ⅱ　層・・・古代の遺物包含層で４つに分層される。

Ⅱａ層・・黒褐色シルト質粘土　層厚０～30cm　磨滅した土師器小片含む、古代以降の堆積層である可能性もある。

Ⅱｂ層・・暗褐色粘土質砂質土　層厚０～30cm　磨滅した土師器小片を含む。

Ⅱｃ層・・褐色砂質土　層厚30～100cm　土師器片含む。

Ⅱｄ層・・暗褐色粘土質土　層厚20～50cm　土師器片と弥生土器含む。調査Ａ区と調査Ｂ区においては、本層の中位くらいに十和田ａテフラブロックの混入がみられる。

Ⅲ　層・・・褐色砂質土　層厚20～80cm　古代遺構の地山、縄文晩期・弥生土器出土。

Ⅳ　層・・・黒褐色粘土質土　層厚０～ 30cm　縄文時代晩期頃の文化層と判断される。晩期の土器少量出土。

Ⅴ　層・・・黄褐色粘土（地山）

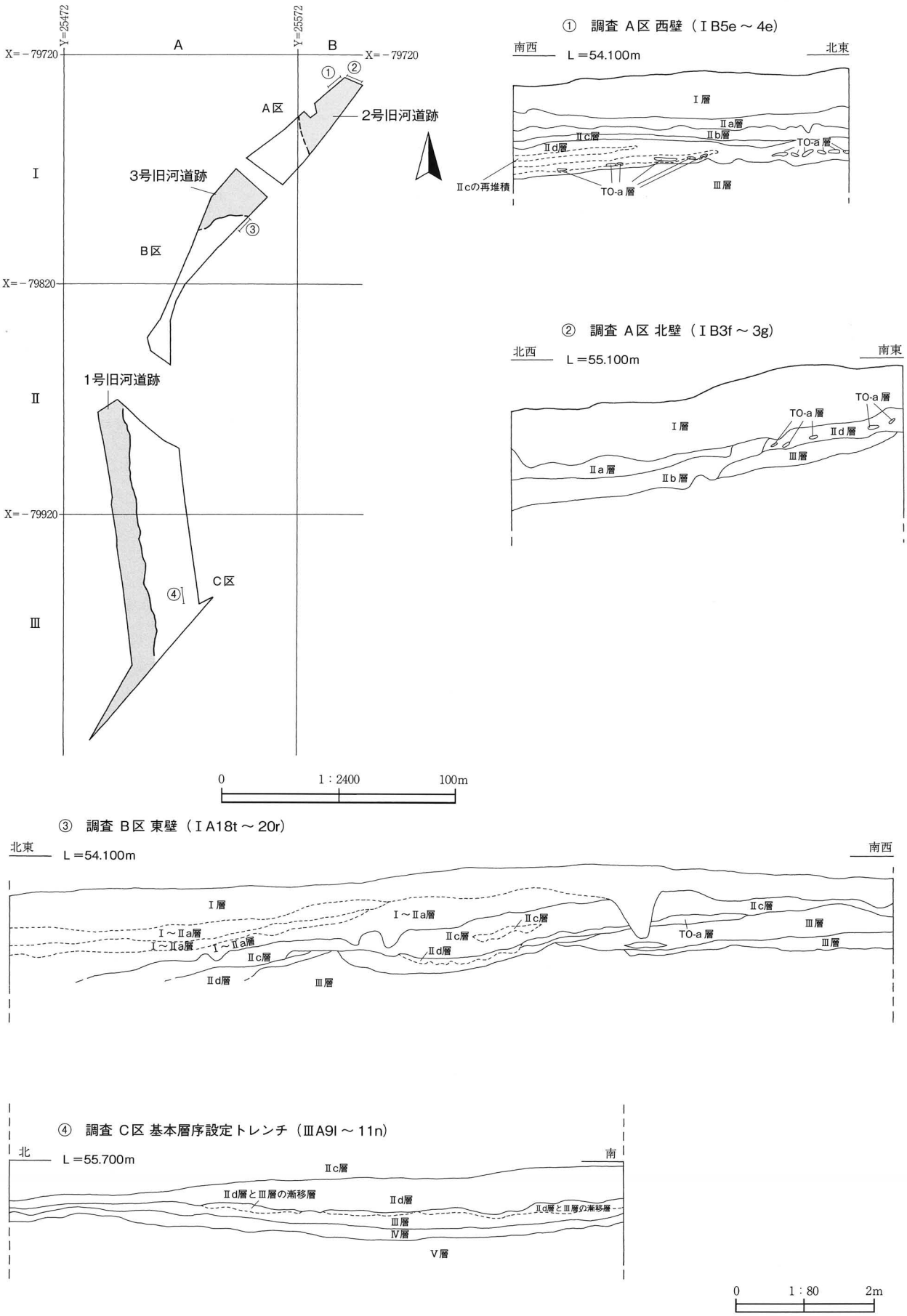
4　調 査 の 概 要

（1）調　査　方　法

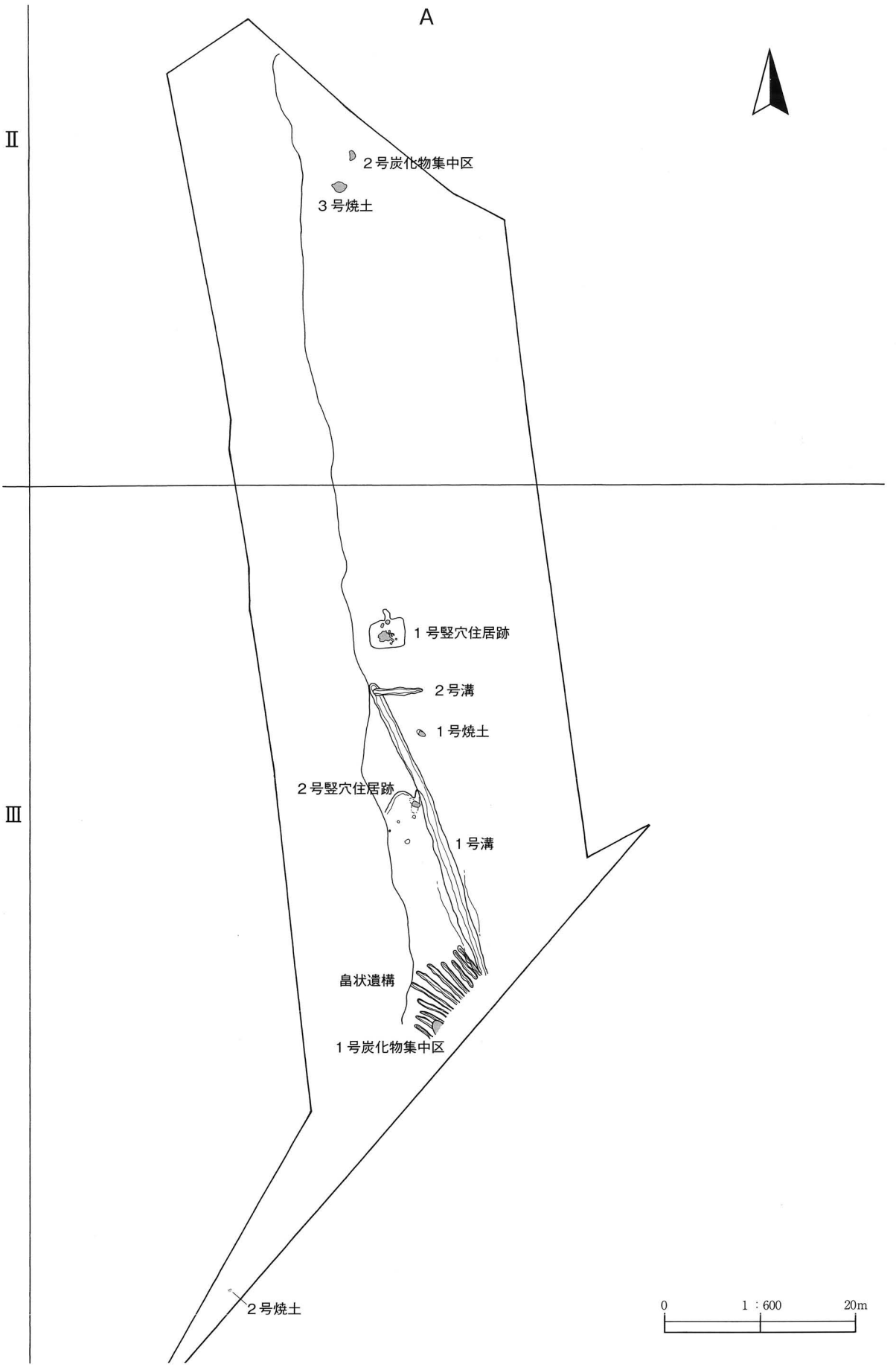
調査開始と同時に調査区内に試掘トレンチを設定し、人力で掘削して土層の堆積状況及び遺構検出面の確認に努めた。ただし、掘削深度が全般に深いため、作業の安全を優先して人力による掘削は現況表土から1.5m以内とし、それ以上深く掘削する場合はバックホーで行った。

試掘の後、重機（バックホー）を用いて表土（主に水田耕作土や盛土）を除去した。今回の調査では、現況表土から遺構確認面までの深度が1.5 m以上となることから（地点によっては２mを超える場合もあった）、調査の安全のため調査境に１～ 1.5 mの幅で未掘削部分を残すか、若しくは法面の傾斜角度を60度前後として掘削した。表土除去後、人力で鋤簾、移植ヘラを用いて遺構の検出を行った。

区割設定は、世界測地系（平面直角座標第Ｘ系）を座標変換した調査座標を用いて、調査区全体を網羅するよう設定した。調査座標原点は、Ｘ＝－ 79720.000、Ｙ＝ 25472.000 を採用し、一辺 100 m の大グリッドを設定し、さらにこれを一辺４mの小グリッドに区割した。グリッドの名称について、



第２図　グリット図・基本層序


A
Ⅱ
Ⅲ
2号炭化物集中区
3号焼土
1号竪穴住居跡
2号溝
1号焼土
2号竪穴住居跡
1号溝
畠状遺構
1号炭化物集中区
2号焼土
0
1：600
20m

第3図　遺構配置図

大グリッドは原点より北から南に向かってローマ数字のⅠ→Ⅱ→Ⅲ・・と、西から東に向かってアルファベットのA→B→C・・と付した（第２図を参照）。小グリッドは、北から南へ算用数字の１～25、西から東へアルファベットのａ～ｙを付し、上記した大グリッドと組み合わせて「ＩＡ１ａ」･「ⅢＡ１ａ」のように表した。

現場実測図は、平面図は電子平板を用い、断面図は原則的に1/20で従来の手実測で作成した。写真撮影は、6×7cm判のモノクロームとデジタルカメラの２台で行った。原則として報告書掲載用の写真はデジタルカメラで撮影したものを使用した。航空写真撮影は、セスナ機により行い、6×7cm判のモノクロとカラーの２種類を撮影した。

（2）図　版　類

図版作成に係る内容を若干説明する。

＜遺構図版＞：遺構図版は、1/40、1/60、1/80、1/160など、遺構の性格に応じた縮尺を採用した。また、平面図より断面図の縮尺を大きくして明示したものもある。

＜遺物図版＞：遺物図版は、土器は1/3を原則として大きいものを1/4、鉄製品は1/2、石器は1/2若しくは1/3で掲載した。土器の中で内面黒色処理が施されるもの（１・２・７・８・18・21・22）と赤色顔料が塗布されるもの（16・17）、及び石器類で磨痕が観察されるものは、スクリーントーンで明示した。

＜遺構写真図版＞：遺構写真図版の掲載順は、本文や遺構図版と同様である。

＜遺物写真図版＞：遺物写真図版は、遺物図版と同じ縮尺を基本とする。なお、19・24～26の赤彩土器及び焼成粘土塊は写真のみ掲載した。

＜遺物観察表＞土器、石器、石製品などの法量値は、欠損する場合は残存部の数値を＜　＞で示し、推定値は（　）で示した。

（3）検　出　遺　構

調査区が細長いことから、便宜的に北から調査Ａ区・Ｂ区・Ｃ区の３つに分け呼称し、記述に用いている。現況地形は、調査Ａ・Ｂ区が標高53～55m（旧地形は北上川河床との比高1.5m以内）、調査Ｃ区が標高55～57m（※旧地形は河床との比高2.5m以上）である。

また、今回の調査における遺構検出面は、試掘トレンチや調査区境などの土層観察結果から、概ね３面が想定された。１面がⅡｂ～Ⅱｄ層、２面がⅢ層、３面がⅣ～Ⅴ層である。調査の結果、遺構は１面と２面から検出され、３面からは未検出であった。

弥生：焼土遺構１基、炭化物集中区１箇所（※検出面は何れもⅢ層）

古代：竪穴住居跡２棟、畠状遺構（畝間状遺構）１箇所、溝跡２条、焼土遺構２基（内１基は焼成土坑の類）、炭化物集中区１箇所、旧河道跡３条（何れも北上川の旧流路と推定される）

１号竪穴住居跡（第４図、写真図版３）

＜位置・検出状況＞調査Ｃ区のⅢＡ４ｉグリッドに位置する。検出状況は、Ⅱｄ層下位～Ⅲ層上面付近において、炭化物を少量含むⅡ層系土の広がりとして把握した。検出プランは非常に不明瞭で、特に、南壁は認知できなかった。

＜平面形・規模・長軸方向＞南壁が把握できず、平面形は推定で明示した。規模は、壁が検出できた東西方向では3.9～4.2m、深さ20～28cmである。長軸方向は、ほぼ南－北である。

＜埋土＞概ね黄褐～褐色の粘土質砂質土の単層で、自然堆積層と推定される。竪穴中央の床面直上付近に焼土塊・炭化物・炭化材などが多量に認められる。
＜床面・壁＞床面はⅢ層黄褐色砂質粘土で、貼床は認められない。壁はほぼ直立気味に立ち上がる。
＜カマド＞北壁に構築されている。煙出・煙道部・燃焼部が検出された。煙出しには意図的に投棄されたと推定される礫が集中的にみられる。煙道部の長さは約1.3mで、刳り抜き式であったと推定されるが明確ではない。燃焼部は50cmの円形気味に広がる。
＜柱穴＞検出されない。
＜遺物＞（第10・12図１～６・48、写真図版４・６）出土遺物は土器類が1423.9g、鉄製品１点（刀子）、焼成粘土塊34.2gが出土した。
＜時期＞出土土器から８世紀後半～９世紀前半と推定される。なお、焼失家屋の可能性が高い。

２号竪穴住居跡（第５図、写真図版３）
＜位置・検出状況＞調査Ｃ区のⅢＡ９ｊグリッド付近に位置する。検出状況はⅡｄ層下位～Ⅲ層上面であるが、生涯学習文化課による試掘調査回答で土器集中区とされていた地点を掘り広げた結果、カマド煙道部を検出したことから認知した。平面プランはとても不明瞭であった。
＜重複関係＞１号溝跡・１号旧河道跡に切られる。
＜平面形・規模・長軸方向＞南西壁・北東壁の一部を検出したが、南壁を検出できず、全体の平面形は不明にある。深さは約10cmである。
＜埋土＞黄褐色粘土質砂質土を主体とする。自然堆積と推定した。なお、第５図断面図の２層は貼り床、３層は整地層、４・５層は基本層序のⅢ～Ⅳ層で本遺構の地山と捉えられる。
＜床面・壁＞床面の特定が難しく、土層の断面観察からは当初４層付近が床面と捉え精査を進めた。最終的にはカマド燃焼部付近の標高を目安に判断した結果、２層が貼り床と判明した。なお、壁溝を覆う３層は整地層と捉えられることから、本住居は建て替えが行われている可能性が考えられる（※床の嵩上げか）。壁は外傾して立ち上がる。
＜カマド＞北東壁に構築されている。煙道部・燃焼部が検出された。煙道部は一部１号溝跡に破壊されている。残存値で約1.3m、掘り込み式であったと推定されるが明確ではない。燃焼部は85×52cmに広がる。
＜柱穴＞検出されない。
＜遺物＞（第10・12図７～17・44・49、写真図版４・６）出土遺物は、土器類6631.0g、石器１点（磨石）、鉄製品１点（刀子）、焼成粘土塊21.2gが出土した。
＜時期＞出土土器から８世紀後半～９世紀前半と推定される。

畠状遺構（第６図、写真図版４）
＜位置・検出状況＞調査Ｃ区ⅢＡ13k～13mグリッドに位置する。Ⅱｄ層中でジョレン掛け作業中に、わずかな差異で周囲と土色の違う畝間状のプランを数条検出した。補足として、検出時は昨日からの雨が上がった時分で、周囲より若干乾き具合の悪い土質であったことも、検出に繋がる起因であったと思われる。
＜重複関係＞１号溝跡・１号旧河道跡に切られ、合わせて１号炭化物集中区に覆われる。
＜平面形・規模＞長さ2.0～5.4m、幅25～45cmの溝条プラン11条が、溝間50～80cm（平均的には55cm前後）の間隔で平行して並ぶ。深さは15～20cmで、11条ほぼ均一にある。

＜埋土＞暗褐色粘土質土による単層である。各所に１～３％の炭化物が混入する。
＜出土遺物＞（第11・12図21・49、写真図版５・６）（写真図版45）出土遺物は土器類294.5gが出土した。土器類は８世紀後半～９世紀前半の土師器片が中心である。
＜時期＞出土遺物から８世紀後半～９世紀前半と推定されるが、明確ではない。

１号溝跡（第７図、写真図版４）
＜位置・検出状況＞調査Ｃ区のⅢＡ６ｉ～ⅢＡ14ｍグリッド付近に位置する。Ⅱｂ層中で黒褐色シルト質粘土による溝状のプランとして検出した。
＜重複関係＞２号竪穴住居跡・畠状遺構を切り、２号溝跡に切られる。なお、１号旧河道跡との新旧関係は明瞭には掴めなかったが、あるいは同時期存在の可能性もある。
＜平面形・規模・主軸方向＞調査区外南側に続くことから全長は不明にある。検出部での長さは33.5mである。溝幅が110～220cm、深さは最深で65cmを測る。主軸方向は北西－南東方向に延びる。なお、北側はⅢＡ６ｉグリッド付近で途切れる。
＜埋土＞黒褐色粘土質シルトと褐色粘土質砂土に大別される。自然堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面は、全体的には平坦を基調とするが、やや凹凸がある。水が流れていたと仮定すると、溝底の標高からは南東→北西に緩く下る。壁はやや外傾しながら立ち上がる。
＜遺物＞（第11・12図18・19・40、写真図版５・６）出土遺物は土器類1978.6gである。磨滅した土師器を中心に、弥生土器や縄文晩期の小片が混じる。
＜時期＞出土土器は流れ込みと判断されることから、遺構の時期を推定する資料とは捉え難い。遺構の検出面がⅡｂ層中であることから、相対的に十和田ａテフラ降下期より新しいと捉えられる。

２号溝跡（第７図、写真図版４）
＜位置・検出状況＞調査Ｃ区のⅢＡ６ｊ～６ｋグリッドに位置する。Ⅱｄ層中で溝状プランとして検出した。
＜重複関係＞１号溝跡を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞長さは5.3mで、両端が途切れる（※検出できなかった可能性あり）。溝幅50cm前後、深さ20cm前後を測る。主軸方向は東－西方向である。
＜埋土＞暗オリーブ褐色砂質粘土による単層で、酸化鉄の集積が顕著にみられる。自然堆積と判断される。
＜底面・壁＞底面は凹凸がある。壁は外傾に立ち上がる。
＜遺物＞土器37.2gが出土した。磨滅した土師器の小破片である。
＜時期＞１号溝跡より新しい。埋土の様相からは、古代と推定しておきたい。

１号焼土遺構（第８図、写真図版４）
＜位置・検出状況＞調査Ｃ区のⅢＡ７ｋグリッドに位置する。Ⅱｄ層中で焼土粒と炭化物が顕著に認められたことから、焼土遺構として認知することとした。
＜平面形・規模＞平面形は楕円形で、北西から南東に広がる。焼土粒の広がる範囲は70×50cm、焼土粒の混じる土層の厚さは５～10cmである。
＜焼土の様相＞検出面付近は、１層褐色シルト質砂質土に炭化物･焼土ブロックが少量混じる様相で、その下位にみられる２層暗褐色粘土層中に多量の焼土ブロック（約15％）と炭化物が混入する。焼土

の色調は明赤褐色で、焼成状態は良好である。
＜地下構造＞焼土を含む土層の下部から土坑の掘り込みが検出された。長辺100cm、短辺64cm、深さ22cmである。
＜出土遺物＞（第11図21、写真図版５・６）出土遺物は土器類150.2g、鉄製品１点、焼成粘土塊9.8gが出土した。土器類は、８世紀後半～９世紀前半である。
＜時期＞出土遺物から８世紀後半～９世紀前半と考えられ、合わせて焼成土坑的な性格の遺構と判断される。

２号焼土遺構（第８図）
＜位置・検出状況＞調査Ｃ区のⅢＡ22ｆグリッドに位置する。旧河道跡の埋土中（第９図下の断面図７～８層）で焼土を検出した。
＜重複関係＞１号旧河道跡より新しい。
＜平面形・規模＞平面形は方形気味で、焼土の広がる範囲は16cm四方、焼土粒の混じる土層の厚さは２～５cm前後である。
＜焼土の様相＞褐色砂土が焼土化している。焼土の色調は暗赤褐色で、現地性焼土で焼成状態はやや不良である。
＜出土遺物＞無し。
＜時期＞１号旧河道跡の埋没途中で形成された焼土遺構と捉えられる。相対的に十和田ａテフラ降下期より新しい。

３号焼土遺構（第８図）
＜位置・検出状況＞調査Ｃ区のⅡＡ17ｈグリッドに位置する。Ⅲ層中で焼土が顕著に認められたことから、焼土遺構として認知することとした。
＜重複関係＞無し。
＜平面形・規模＞平面形は不整形で、焼土の広がる範囲は132×124cm、焼土粒の混じる土層の厚さは８～12cm前後である。
＜焼土の様相＞褐色粘土の一部が焼土化した様相である。焼土の色調は極暗褐色、現地性焼土で焼成状態はやや不良である。
＜出土遺物＞無し。
＜時期＞周辺のグリッドで弥生前期の土器がまとまって出土していることから、弥生時代前期と推定される。

１号炭化物集中区（第６図）
＜位置・検出状況＞調査Ｃ区のⅢＡ15ｋグリッドに位置する。Ⅱｄ層中で多量の炭化物が集中して分布する状況を確認した。
＜重複関係＞本遺構が畠状遺構を覆う。ただし、同時期の可能性もある。
＜平面形・規模＞南側は調査区外に続くため、平面形や規模は不明にある。炭化物の混じる土層の厚さは10cm未満である。また、焼土粒などは認められない（含まれない）。現地性と判断される。
＜出土遺物＞無し。
＜時期＞検出層位から古代に形成されたことは分かるが、詳細な時期は不明である。遺構同士の重複

関係から畠状遺構よりやや新しいか若しくは同時期に形成されたと考えられる。

２号炭化物集中区（第８図）
＜位置・検出状況＞ⅡＡ17ｉグリッドに位置する。Ⅲ層中で多量の炭化物が集中して検出されたことから、炭化物集中区として認知することとした。
＜平面形・規模＞平面形は不整形で、85×65cmの範囲に広がる。炭化物の混じる土層の厚さは14cm前後である。これらの炭化物は投げ捨てられたものではなく、現地性と判断される。
＜出土遺物＞無し。
＜時期＞周辺のグリッドで弥生前期の土器がまとまって出土していることから、弥生時代前期と推定される。

１～３号旧河道跡（第９図、写真図版４）
＜位置･検出状況＞今回の調査では大きくは３地点で旧河道跡の輪郭（※旧北上川の岸と推定される）の一端を認知し、１～３号旧河道跡と命名した。

１号旧河道跡は調査Ｃ区において東壁を約60ｍに亘り検出した。検出面は、Ⅲ層で現況表土から２ｍ以上下位である。ただし、調査区境で土層観察を行った結果、本来の検出面は上位のⅡｂ層と判断される。

２号旧河道跡はＡ区の中央～北部にかけて、現況表土から２ｍ以上掘り下げた段階で十和田ａテフラが面的に分布する状況を確認した。調査区境などにトレンチを設定し、十和田ａテフラの下位の土層を掘り下げたところ、Ⅲ層相当の土層より酸化鉄を多く含む土層を確認し、更に調査Ａ区中央付近のトレンチでは河底付近であることが想定される礫層が表れた。この礫層が表れた付近は、十和田ａテフラの分布が調査区西側や南側には延びず、調査区境東側に向かう様子であったことから、旧河道の肩部と想定し、第２図や第９図では推定線で示した。なお、土層の堆積様相は、第２図右上に掲載した調査Ａ区調査区境の土層断面①・②を参照戴きたい。

３号旧河道跡はＢ区北部において左壁を検出した。この河道は明らかに十和田ａテフラを含むⅡｄ層相当を切る。位置は第９図を参照いただきたい。なお、３号旧河道跡の左肩は第２図や第９図に示したが、これより南側は２号旧河道跡と同時期の河道跡に伴う堆積層の可能性もある。ただし、この地点より南側については、遺構・遺物が認められなかったことから、生涯学習文化課の指示を受け、さらに下位までの掘削を行わなかったことから、詳細はわからない。
＜重複関係＞１号旧河道跡は、２号竪穴住居跡・畠状遺構を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞大部分が調査区外に続くことや、生涯学習文化課の調査指導に従い調査区内の旧河道跡全ての掘削は行わなかったことから、平面形や規模などの一切は分からない。また、深さについても、調査の安全性を優先して最深部までは掘削していない。参考までに、１号旧河道跡はⅡＡ19ｆ、ⅢＡ１ｇ・15ｈグリッドにバックホーで深掘りを実施したが、検出面から2.5ｍ以上（※現況表土からは４ｍ以上）下がることが確実である。また、２号旧河道跡は、一部分十和田ａテフラを含む土層下位の礫層まで掘り下げたが（現況表土から約2.5ｍ）、遺構が未検出で遺物も少量であり湧水が激しかったことから、掘削を途中で中断した。３号旧河道跡は、調査Ｂ区の東側調査区境の一部で河底と判断される地層を確認したが、西側や南西側はさらに深く、掘削を断念した。
＜埋土＞暗褐～褐色の砂質粘土、粘土、砂、粘土質泥土などが堆積する。基本的には砂と粘土の互層が顕著にみられる。第２・９図の土層断面図や写真図版２・４などを参照いただきたい。

＜遺物＞（第12図29・43・50、写真図版５・６）１号旧河道跡は土器類1103.7g・鉄製品１点・石器１点（４の環状石斧）・焼成粘土塊 1.2g が、２号旧河道跡は土器類454.1g が、３号旧河道跡は土器類20.5g が出土した。１号旧河道跡は磨滅した土師器片を中心に、弥生や縄文晩期が少量混じる。28の土器は大洞Ｃ２式の胴部下半～底部までが残存する資料で鉢形土器（※壺の可能性もあり）と推定した。２・３号旧河道跡は磨滅の著しい土師器片が出土した。

＜時期＞出土土器は流れ込みと判断されることから、遺構の時期を推定する資料とは捉え難い。Ｃ区で検出した１号旧河道跡は、２号竪穴住居跡や畠状遺構より新しい。また、基本層序Ⅱｃ層を裁ることを確認できた。Ａ区で検出した２号旧河道跡は十和田ａテフラを含むⅡｄ層より古いことは確実である。Ｂ区で検出した３号旧河道跡は、Ⅱｃ層を裁る（新しい）ことから、相対的に十和田ａテフラより新しい時期である。従って、今回の調査で判明した北上川の旧流路に伴うと推定される旧河道跡は、十和田ａテフラを鍵層とすると、新旧２時期が検出されたと捉えられる（第９図を参照）。合わせて、１号旧河道跡と３号旧河道跡は同時期の流路の可能性も考えられよう。また、Ｂ区の調査境東側の土層観察からは、２号旧河道跡の堆積層と同様に十和田ａテフラがレンズ状に堆積する土層が観られることから、３号旧河道跡より南側には古い時期である２号旧河道跡と同時期の流路跡が存在する可能性が高い。

（４）出　土　遺　物

今回の調査では、大コンテナ（42cm×32cm×30cm）で約3.5箱分の遺物が出土した。土器類は縄文土器、弥生土器、古代合わせて約3.0箱分、焼成粘土塊130.2g、鉄製品４点、石器25点、チップ・フレーク161.4gである。

古代の土器（１～27）：土師器は、竪穴住居跡及び調査Ｃ区Ⅱｄ層を中心にⅡｂ層～Ⅱｃ層、旧河道跡埋土から出土している。非ロクロ成形によるものが大部分を占める。器種は坏、高台坏、甕がある。

坏をみると、内面黒色処理が施され、①胴部の段がやや不明瞭で丸底のものと、②胴部の段がほとんどなくなり底がほぼ平底のものがある。大きく８世紀後半～９世紀前半の時期幅で捉えた場合、前者が古い段階、後者が新しい段階と考えられている（北上市教育員会：2005）。今回の調査では全体的には②の新しいと推定される段階が多い。

甕は長胴甕と球胴甕がある。長胴甕は、口縁部付近の器形の様子や外面の調整などからは、規格性の高いものと判断される。大きさは、口径14～20cm（推定値含む）、底径８～8.5cm、器高は11の略完形個体から32.1cmを測る。傾向として、１号竪穴住居跡出土はやや小形のものが、２号竪穴住居跡から大形のものが出土している。球胴甕は赤色の顔料が施された赤彩土器が顕著にみられるが、赤彩が施されるものは外面の胴部にはミガキが施される（16・17など）のに対して、赤彩の施されないものはヘラナデによる調整が施される（掲載した中では15が該当）。規模は口径の推定値が得られる16は約 35cm、底径は17から８cm、器高を把握できる資料はない。赤彩土器は、比較的多くの破片数を得られている。その中で、16・17及び写真掲載のみ行った19・24～26を選択した。口縁部資料である19・24～26は縦に線状の赤彩文様が施される。16・17 を見る限り、胴部は全面に亘り赤彩が施される。なお、今回の調査で赤彩が認められる器種は球胴甕のみである。

須恵器は総数５点と非常に少なく、また20を除き何れも３cm前後の小破片であった（※不掲載４点も坏と推定される）。

縄文時代晩期の土器（28）：調査Ｃ区１号旧河道跡の埋土から土師器などに混在して出土している。本来の出土層位と考えられるⅣ層からは微量であった。掲載した28の大洞Ｃ２式の鉢形土器１点以外

は全て小破片である。大洞Ｃ２式以外に大洞Ａ式が認められる。

弥生時代の土器（29～39）：調査Ｃ区から出土しており、特に調査Ｃ区北東端付近より纏まりをもった状態で出土している。層位的には、Ⅲ層を中心にⅡｄ層とⅢ層の漸移層、Ⅲ層の再堆積層（※ⅡＡ15ｈ～16ｉグリッドの調査区東境付近）からの出土が多い。29～39の11点を掲載した。地文は、LRとRLの２種類が認められる。原体を施文する回転方向は、傾向として浅鉢は横回転を、深鉢は縦回転が多い様相である。33や34は、比較的太めの深い沈線が引かれる。沈線の断面形は逆台形状を呈する。36～38は同一個体で、胴部はRL・LRの横位回転による羽状縄文がみられる。時期は、弥生時代前期の土器群で、北上市金附遺跡第Ⅲ群１～２類相当と観てとれることから、広義の青木畑式と考えられる。

焼成粘土塊（写真図版６に集合写真で掲載）:130.2gが出土した。焼成粘土塊は写真掲載のみ行った。土器焼成時の失敗品などの可能性が考えられようか。１・２号竪穴住居跡や１号焼土遺構などから出土している。

石器類（40～47）：石器類は25点出土した。剥片石器は石鏃１点、石匙１点（未成品か）、スクレイパー２点、礫石器は磨製石斧１点、環状石斧１点（未成品）、磨石６点、器種不明10点が、石製品は石刀３点である。その内、８点を掲載した。１号旧河道跡出土の43は環状石斧の未成品と判断され、表裏全面に観られる磨り痕を剥離が切っている。従って、礫を研磨した後、外形の整形途中で製作放棄された資料と考えられる。類例は北上市金附遺跡に多い。

鉄製品（48～51）：４点出土した。器種の内訳は、刀子２点、釘？２点である。48は木質部が残存する。掲載した４点は、整理期間の関係もあり保存処理前の段階で実測・遺物写真撮影を行っていること補足しておく。

５．総　　括

縄文時代：縄文時代晩期中葉の土器は、調査Ｃ区の旧河道跡の埋土を中心に少量出土した。

弥生時代：弥生時代前期の土器や石器は、調査Ｃ区北東端付近（ⅡＡ15ｈ～16ｉグリッド）を中心に、１号旧河道跡の範囲外東側に位置する微高地全般から出土した。竪穴住居跡などは検出されなかったが、調査Ｃ区の北東外側の畑地部分などには該期の集落跡の存在が予見される。また、環状石斧の未成品が出土したことも特記事項として挙げておきたい。

古代：調査Ｃ区より、竪穴住居跡、畠状遺構、焼土、溝跡の検出があった。竪穴住居跡、畠状遺構、１号焼土遺構は、出土している土師器の年代から８世紀後半～９世紀前半を中心とする。対して、１号溝跡や２号焼土遺構はそれより新しい時期であり、基本層序との対比関係から十和田ａテフラ降下期より新しいと推定される。つまり、十和田ａテフラ降下期を挟み、新旧の人的営みが発見されたと捉えられる。特徴的な遺物としては、赤彩土器が挙げられ、２号竪穴住居跡を中心に遺構外からも出土している。今回の調査では、赤色顔料の塗布される器種は球胴甕にのみ認められた。高橋静歩氏の研究（高橋：2007）に従えば、赤彩壺・甕編年の３期（９ｃ前半）を中心に２期（８ｃ中葉～後葉）に相当するものが出土していると捉えられる。

集落の立地に関係が深い旧河道跡は、３条検出された。何れも古代の北上川旧流路の一部と推定される。十和田ａテフラとの層序関係から、１・３号旧河道跡は同テフラ降下期より新しい時期、２号旧河道跡は同テフラ降下期より古い時期と捉えられる。古代の遺構検出地は、現在の北上川河床より４～５ｍは高く（標高54～57ｍ）、尚且つ河道の外側に相当する微高地状の地形部分（※自然堤防の

先端部に相当するものか）に占地している様相で捉えられよう。さらに、北上市埋文による過去の調査事例を加味すると、立花南遺跡における古代集落の中心は、今回の調査区よりやや離れた北東側が中心と捉えられる。従って、調査Ｃ区の調査により、立花南遺跡における古代集落南端付近の様子が判明したものと考えられる。

最後に十和田ａテフラの分布様相について補足する。今回の調査では、調査Ａ・Ｂ区からはⅡｄ層中より十和田ａテフラの良好な堆積状況が確認されたが、古代の遺構や弥生土器が顕著に出土した調査Ｃ区からは一切検出されていない。従って、同テフラの降下期には竪穴住居跡などは既に埋没していたと判断される。推定の域は出ないが、古代の主たる遺物包含層であるⅡｄ層は、比較的長い時期を包括する文化層の可能性が考えられることと、Ⅱｄ層形成期の後半に調査Ｃ区に十和田ａテフラが残らないような、洪水など何らかの自然現象が生じた可能性も合わせて考えられようか。今回の調査は、当初の予想より遺構・遺物は少なかったが、河川作用の土層観察における良好なサンプルデータを残すことができたと思われる。

なお、立花南遺跡の平成22年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

参考文献

金子昭彦：2006「Ⅶ考察 1縄文時代晩期末～弥生時代中期土器の型式編年的検討」『金附遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第482集 p242～254

杉本　良：2001「赤彩球胴甕再考（1)」『北上市立博物館研究報告』第13号 p1～8

高橋静歩：2007「東北地方北部の赤彩土師器から蝦夷集団の動向を探る」『岩手考古学』第19号 p21～47

北上市教育員会：2005『立花南遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告書第82集

北上市教育委員会：2007『北上市内試掘調査報告』北上市埋蔵文化財調査報告書第95集

北上市教育委員会：2008『北上市内試掘調査報告』北上市埋蔵文化財調査報告書第100集

土器観察表

掲載番号	出土位置	時期	器種	部位	外面	内面	底部	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
1	1号竪穴住居跡 Q1 埋土下位	古代	坏	口縁部	口:ミガキ　胴:ハケメ	ミガキ		—	—	<3.9>	内面黒色処理
2	1号竪穴住居跡 Q3 埋土下位	古代	坏	口～胴部	口:ミガキ　胴:ヘラナデ	ミガキ		(12.4)	—	<3.4>	内面黒色処理
3	1号竪穴住居跡カマド周辺 埋土下位	古代	長胴甕	口～胴部	口:横ナデ　胴:ハケメ	ナデ、ヘラナデ		(14.2)	—	<5.4>	
4	1号竪穴住居跡 Q3 埋土下位	古代	長胴甕	口～胴部	口:横ナデ　胴:ハケメ	ナデ、ヘラナデ		—	—	<6.7>	
5	1号竪穴住居跡 埋土中	古代	長胴甕	口～胴部	口:横ナデ　胴:ハケメ	ナデ、ヘラナデ		(14.6)	—	<14.0>	
6	1号竪穴住居跡 埋土中	古代	長胴甕	口～胴部	口:横ナデ　胴:ヘラナデ	ナデ、ヘラナデ		—	—	<9.2>	
7	2号竪穴住居跡 埋土中	古代	坏	口～底部	ミガキ	ミガキ	丸底、ミガキ	(11.4)	—	4.45	内外面黒色処理
8	2号竪穴住居跡 Q3 1層	古代	坏	口～胴部	ヘラナデ	ミガキ		—	—	<3.1>	
9	2号竪穴住居跡 埋土中	古代	高台付坏	胴～却部	ミガキ			—	8.4	<5.8>	外面赤彩、内面黒色処理、却部に孔(4個)
10	2号竪穴住居跡 Q3 1層・南壁際土・壁溝埋土	古代	甕	胴～底部	ヘラ	ナデ		—	<8.8>	<8.7>	
11	2号竪穴住居跡カマド 煙道部・燃焼部・埋土下位	古代	長胴甕	略完形	口:横ナデ　胴:ハケメ	ハケメ	木葉痕	(20.0)	8.5	32.1	
12	2号竪穴住居跡カマド煙道部・燃焼部・埋土下位	古代	長胴甕	頸～底部	ハケメ	ハケメ	木葉痕	—	8.0	<29.3>	
13	2号竪穴住居跡 埋土中	古代	長胴甕	口～胴部	口:横ナデ　ヘラナデ	ナデ、ハケメ		(19.4)	—	<6.9>	
14	2号竪穴住居跡 Q1 埋土中	古代	長胴甕	口～胴部	口:横ナデ　胴:ケズリ	ミガキ		(19.0)	—	<5.9>	
15	2号竪穴住居跡 埋土中	古代	球胴甕	頸～胴部	口:横ナデ　胴:ヘラナデ	ナデ		—	—	(10.5)	
16	2号竪穴住居跡 Q2・3・4 埋土上位・中位	古代	球胴甕	口～胴部	口:横ナデ　胴:ミガキ	ヘラナデ		(35.0)	—	<17.2>	赤彩甕、表裏に赤彩
17	2号竪穴住居跡 煙道部・床面	古代	球胴甕	胴～底部	ミガキ	ナデ、ハケメ		—	8.0	<9.0>	赤彩甕
18	1号溝跡 東壁際土	古代	坏	略完形	ミガキ、ナデ	ミガキ		10.5	4.0	4.3	内外面黒色処理
19	1号溝跡 埋土中	古代	球胴甕?	口縁部	横ナデ	ミガキ		—	—	—	赤彩甕、表裏に線上の赤彩
20	1号畠状遺構 埋土中	古代	須恵器坏	胴～底部			平坦	—	(8.0)	<3.1>	
21	1号焼土遺構 1層	古代	坏	口～底部	ヘラナデ	ミガキ	丸底、ミガキ	(11.8)	(8.0)	4.6	
22	ⅢA 6 k・13 l Ⅱd層	古代	坏	口～胴部	口:ミガキ　胴:ハケメ	ミガキ	丸底、ミガキ	(12.4)	—	<4.7>	
23	Ⅲ A 11 l・11 m Ⅱd層・Ⅱb～Ⅱc層	古代	小形甕	口～底部	口:横ナデ　胴ハケメ	ハケメ	平坦、木葉痕	11.6	(13.8)	(7.8)	
24	ⅢA 10o Ⅱd層	古代	球胴甕?	口縁部	横ナデ	ミガキ		—	—	—	赤彩甕
25	ⅢA 10o Ⅱd層	古代	球胴甕?	口縁部	横ナデ	ミガキ		—	—	—	赤彩甕
26	ⅢA 10o Ⅱd層	古代	球胴甕?	口縁部	ミガキ?	ハケメ		—	—	—	赤彩甕
27	ⅢA 13 k Ⅱd層	古代	鉢	略完形	口:横ナデ　ヘラケズリ	ハケメ		13.7	8.5	9.1	
28	1号旧河道跡 (ⅢA 11 j)	縄文晩期	鉢	胴～底部	LR横位→沈線区画→磨り消し	ミガキ	平坦、ミガキ	—	6.0	<4.6>	大洞C2式
29	ⅡA 16 i Ⅲ層	弥生前期	鉢	略完形	口:無文　胴:LR斜位	横ミガキ	平坦	11.7	5.4	9.2	
30	ⅡA 15h～16i Ⅲ層	弥生前期	深鉢	口～胴部	口端:LR圧痕　口:無文 胴:LR斜・横位	ケズリ・ナデ		(9.0)	—	<9.0>	
31	ⅡA 15h～16i Ⅰ層(Ⅲ層の再堆積土)	弥生前期	深鉢	略完形	口:無文　径:横位沈線 胴:LR縦位	ミガキ		12.2	6.5	17.6	外面剥落多、内面煤付着、炭混じりの土層より出土
32	ⅡA 15h～16i Ⅰ層(Ⅲ層の再堆積土)	弥生前期	浅鉢	口～胴部	口:無文　胴:LR横位	ミガキ		(12.3)	—	<5.2>	内外面煤付着、炭混じりの土層より出土
33	ⅡA 15h～16i Ⅰ層(Ⅲ層の再堆積土)	弥生前期	浅鉢	口～胴部	口:変形工字文、平行沈線 胴:LR横位	ミガキ		—	—	—	炭混じりの土層より出土
34	ⅡA 15h～16i Ⅰ層(Ⅲ層の再堆積土)	弥生前期	浅鉢	口縁部	変形工字文、平行沈線	ミガキ		—	—	—	炭混じりの土層より出土
35	ⅢA 6 j Ⅲ層	弥生前期	鉢	胴～底部	素面	ミガキ	平坦、網代痕、指?痕	—	8.7	<5.6>	
36	ⅢA 10k Ⅲ層	弥生前期	浅鉢	口～胴部	口端:刻み目　口:無文: 頸:横位平行沈線、刺突列 胴:RL横位	ミガキ		—	—	—	37・38と同一個体
37	ⅢA 10k Ⅲ層	弥生前期	浅鉢	口～胴部	口端:刻み目　口:無文: 頸:横位平行沈線、刺突列 胴:RL横位	ミガキ		—	—	—	36・38と同一個体
38	ⅢA 10 k Ⅲ層	弥生前期	浅鉢	胴部	RL・LR羽状縄文(横位)	ミガキ		—	—	—	36・37と同一個体
39	Ⅲ A 10 n・11 m Ⅱd～Ⅲ層	弥生前期	深鉢	胴～底部	RL縦位	粗いナデ	網代痕?	—	8.9	<15.6>	

焼成粘土塊観察表

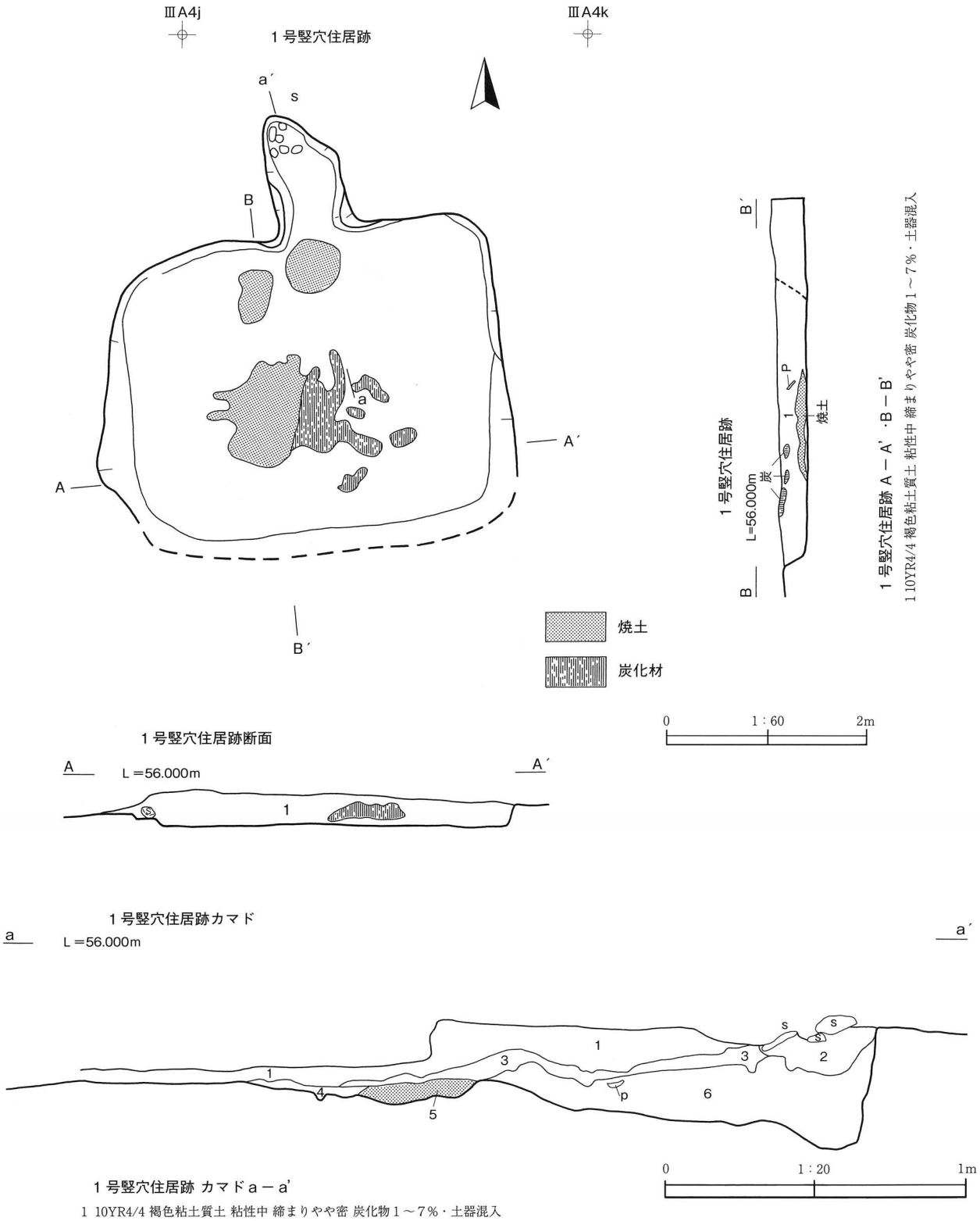
仮登録 No	出土地点	層位	重量 (g)	備　考
1	1号竪穴住居跡東西ベルト	埋土下位	7.8	
2	1号竪穴住居跡	埋土中	16.8	指痕ある資料有り
3	1号竪穴住居跡 Q2	1層下位	5.5	
4	1号竪穴住居跡 Q3	埋土下位	2.7	
5	1号竪穴住居跡	埋土下位	1.4	
6	C区第2トレンチ	表土	9.6	
7	1号旧河道跡（Ⅲ A13k より東）	Ⅱ c 層下位	1.2	
8	C区南端壁面	Ⅱ層（Ⅱ層上面 -120cm）	2.0	
9	C区北東端	Ⅲ層	1.4	
10	Ⅲ A12 j	Ⅱ c 層	4.2	
11	Ⅲ A12 k	Ⅱ d 層	4.2	
12	Ⅲ A12k	Ⅱ c 層	8.0	
13	Ⅲ A13 k	Ⅱ d 層	2.4	
14	Ⅲ A13 k	Ⅱ d 層	1.3	
15	Ⅲ A13 k	Ⅱ d 層	5.7	
16	Ⅲ A 1 1	Ⅱ d 層	1.5	
17	Ⅲ A12 l	Ⅱ b ～Ⅱ c 層	13.0	指痕ある資料有り
18	2号竪穴住居跡	南壁際土	7.6	
19	2号竪穴住居跡カマド煙道部	煙道埋土	10.4	指痕ある資料有り
20	2号竪穴住居跡カマド煙道部	カマド6層	1.7	
21	2号竪穴住居跡カマド周辺	埋土下位	0.6	
22	2号竪穴住居跡 Q3	1層	0.9	
23	1号焼土遺構	1層	20.3	指痕ある資料有り

石器類観察表

掲載番号	旧出土地点	器種	石質	産地	時代	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
40	1号溝跡 埋土中	石鏃	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	<2.3>	1.2	2.3	1.1	
41	ⅢA8i～10j Ⅰ層	石匙	頁岩	北上山地	古生代後期	7.8	3.4	0.8	21.0	石匙(未成品)
42	ⅢA8i～10j Ⅰ層	磨製石斧	閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	<3.7>	4.7	<1.9>	47.6	
43	1号旧河道跡 Ⅳ層	環状石斧	頁岩	北上山地	古生代後期	11.9	9.9	4.9	723.5	環状石斧(未成品)
44	2号竪穴住居跡南北ベルト 1層	磨石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	13.5	9.1	3.2	535.7	
45	ⅢA6i～9l	石刀	ホルンフェルス	北上山地	古生代?	<11.3>	4.3	1.4	79.2	※中生代白亜紀に変成
46	ⅢA13k	石刀	頁岩	北上山地	古生代後期	<8.0>	4.2	2.0	94.6	
47	ⅢA11l	石刀	ホルンフェルス	北上山地	古生代?	<7.4>	3.6	1.6	60.2	※中生代白亜紀に変成

鉄製品観察表

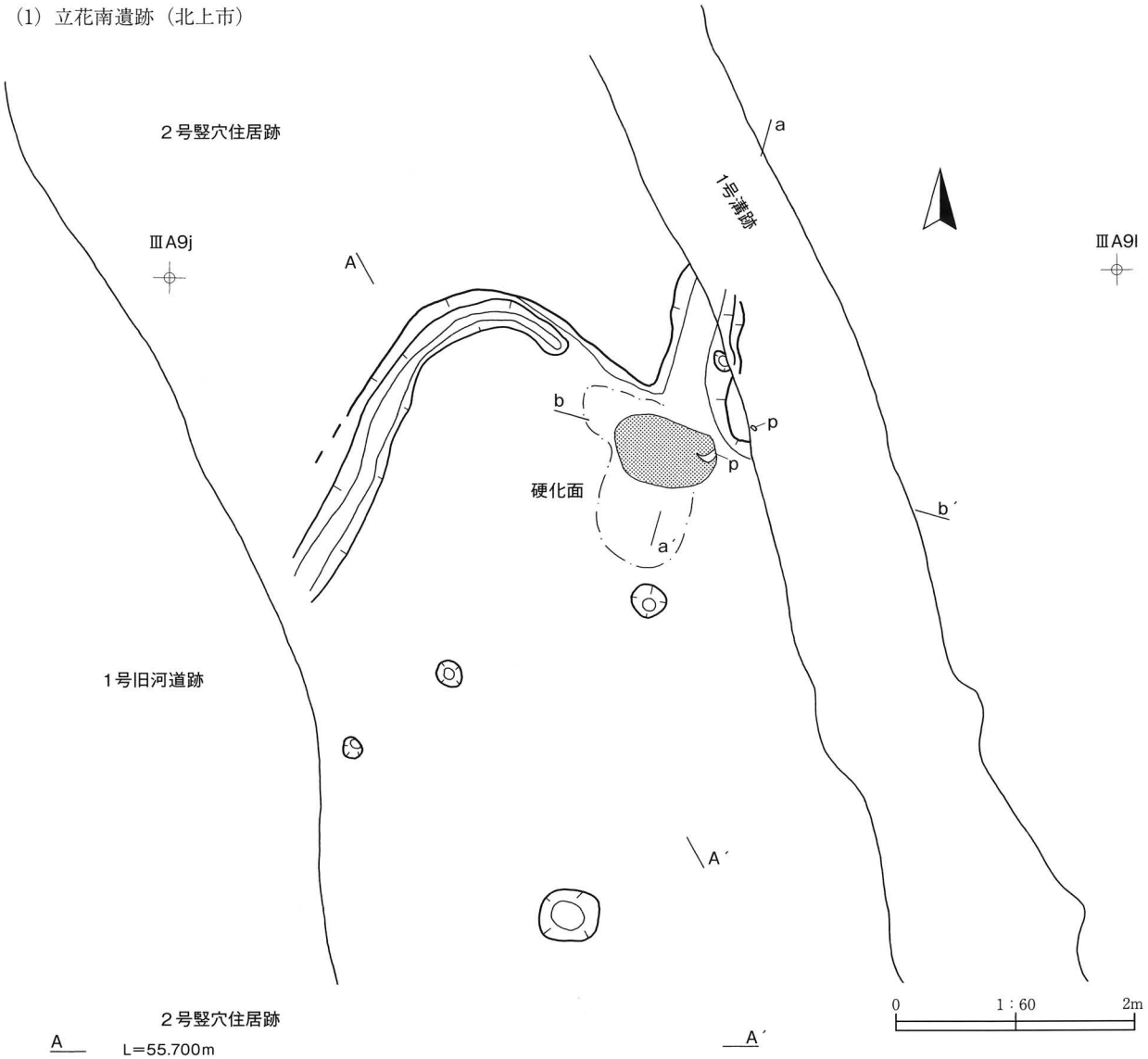
掲載番号	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
48	1号竪穴住居跡	埋土下位	刀子？	<15.3>	2.1	0.7	17.8	
49	2号竪穴住居跡 Q1	埋土中	刀子	<15.9>	2.1	0.6	27.1	木質部の残存あり
50	1号旧河道跡(ⅢA13 i)	旧河道土	不明	<4.85>	1.5	0.5	6.2	
51	Ⅲ A12 k	Ⅱ c 層	釘	<12.6>	1.0	0.5	11.3	

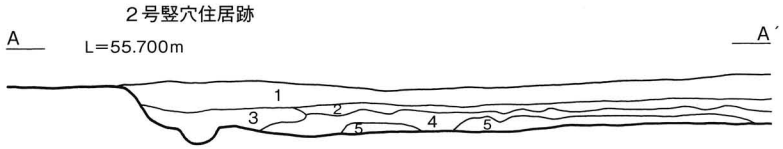


1号竪穴住居跡 カマドa－a'

1 10YR4/4 褐色粘土質土 粘性中 締まりやや密 炭化物1～7％・土器混入
1号竪穴住居跡カマドa－a'
1 10YR4/4 褐色粘土質土 粘性中 締まりやや密 炭化物1％混入（※住居内埋土1層）
2 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 炭化物1％混入 上面に礫有り
3 10YR4/4 褐色粘土質土 粘性中 締まりやや密 焼土・炭化物（煤か？）5％混入
（※ 煙道の天井部分が崩れた層、1層に類似）
4 10YR2/2 黒褐色 粘土質土 粘性やや強 締まりやや疎 炭化物・焼土3％混入
（※カマド使用時の燃え残りか）
5 5YR4/8 赤褐色～5YR3/6 暗赤褐色焼土 粘性なし 締まり密 カマド燃焼部 焼成良好
6 10YR4/4 褐色粘土質土 粘性中 締まりやや密 炭化物1％・土器片混入（※1層に類似）

第4図　1号竪穴住居跡



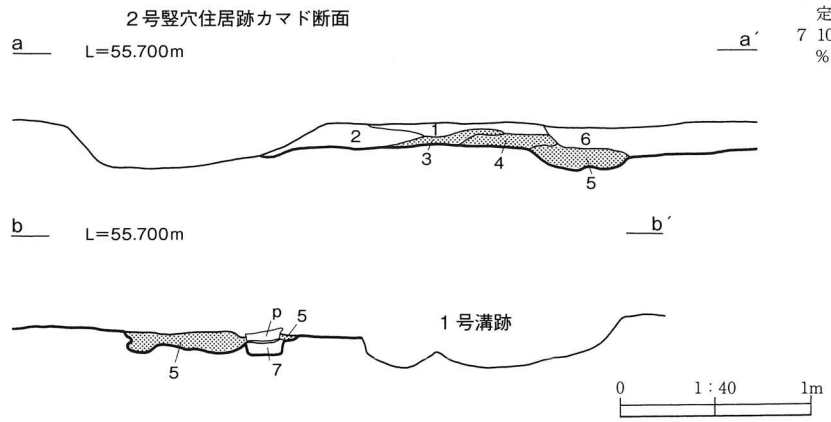


２号竪穴住居跡 A － A'

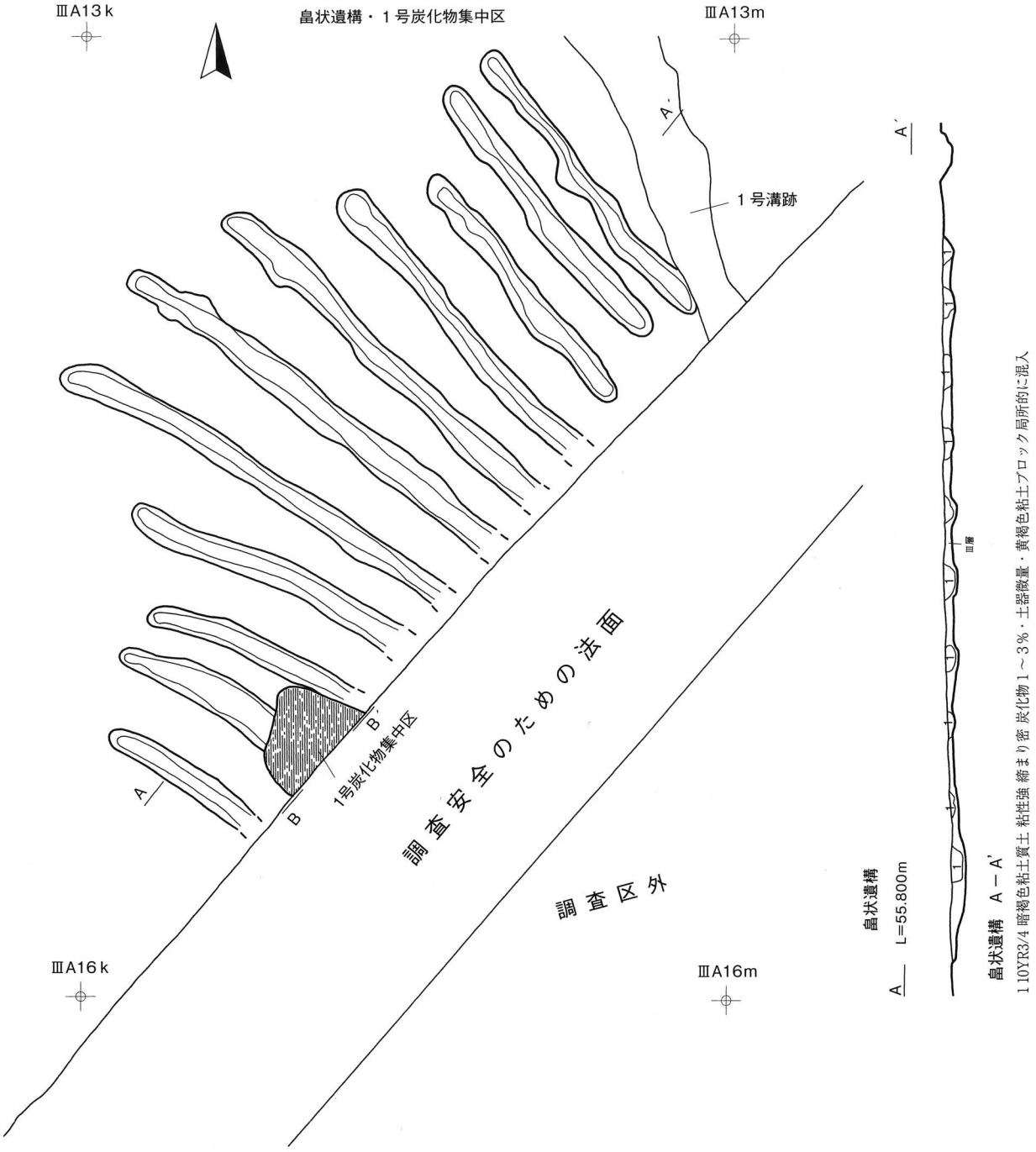
1 10YR4/4 褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 土器一定量・ 炭化物
2 10YR4/4 褐色粘土質砂質土 粘性やや強 締まり密 酸化鉄の集積５％・土器小片混入（※非常に硬い、貼床）
3 10YR3/4 暗褐色砂質粘土 粘性やや強 締まりやや密
4 10YR3/3 暗褐色粘土質土 粘性やや強 締まりやや密
5 10YR3/4 暗褐色粘土質土 粘性強 締まり密

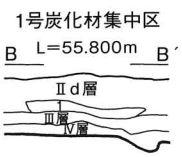
２号竪穴住居跡カマド a－a'・b－b'

1 10YR4/4 褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 土器少量混入（※２・６層と類似した土質）
2 10YR4/4 褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 焼土５％混入（※焼土は３層と色調が類似する）
3 7.5YR2/3 極暗褐色焼土 粘性やや強 締まりやや密
4 7.5YR3/4 暗褐色焼土 粘性やや強 締まりやや密 ５YR4/4 焼土ブロック（焼成の良い焼土）５％・炭化物２％混入（※煙道部中に形成された焼土）
5 ５YR4/4 にぶい赤褐色焼土 粘性やや強 締まり中（※焼成良好、燃焼部に伴う焼土）
6 10YR4/4 褐色粘土 粘性やや強 締まり密 土器一定量・炭化物２％混入
7 10YR4/4 褐色粘土 粘性やや強 締まり密 焼粒５％・炭化物１％混入（※据え方の土）



第５図　２号竪穴住居跡



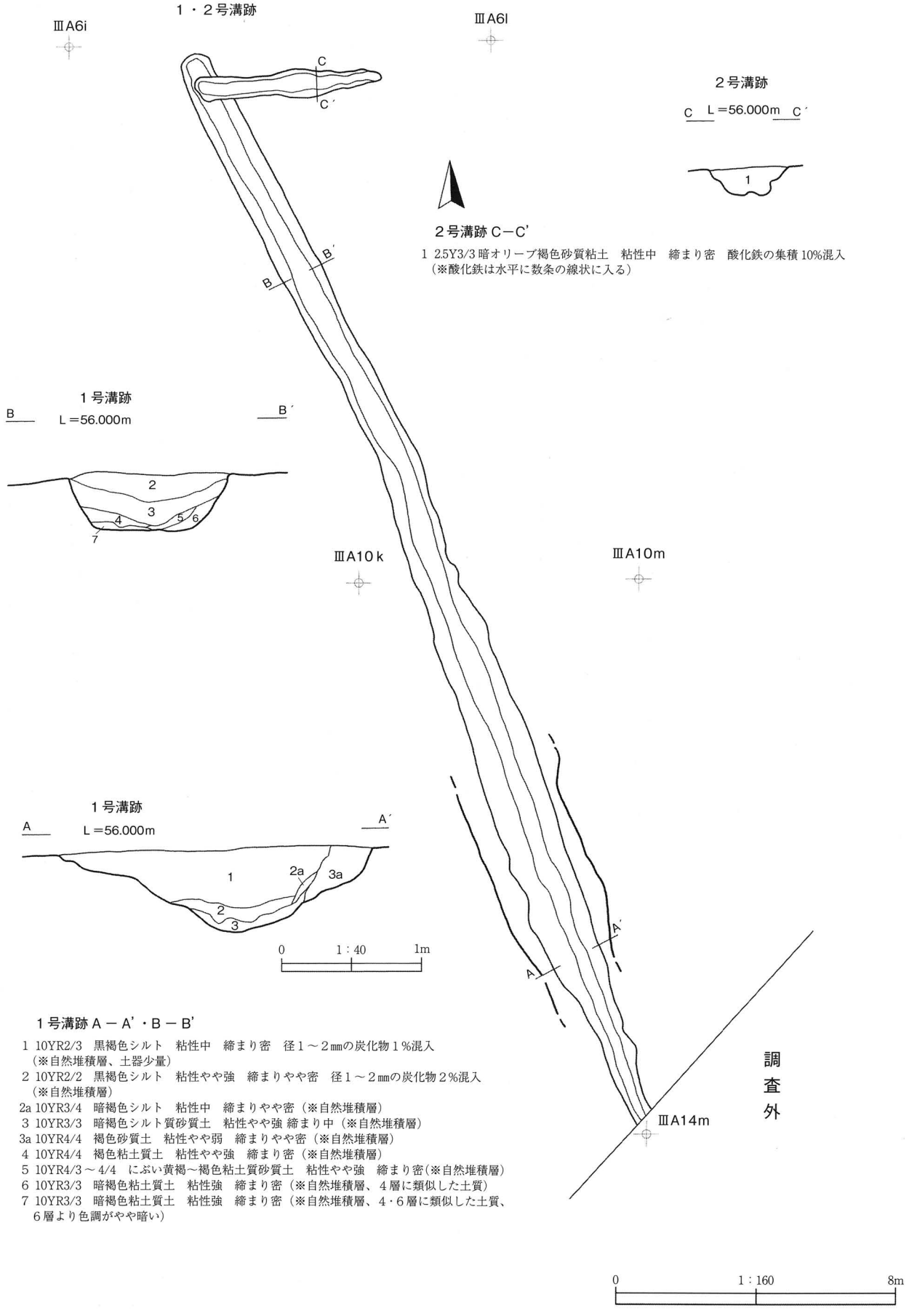


１号炭化物集中区

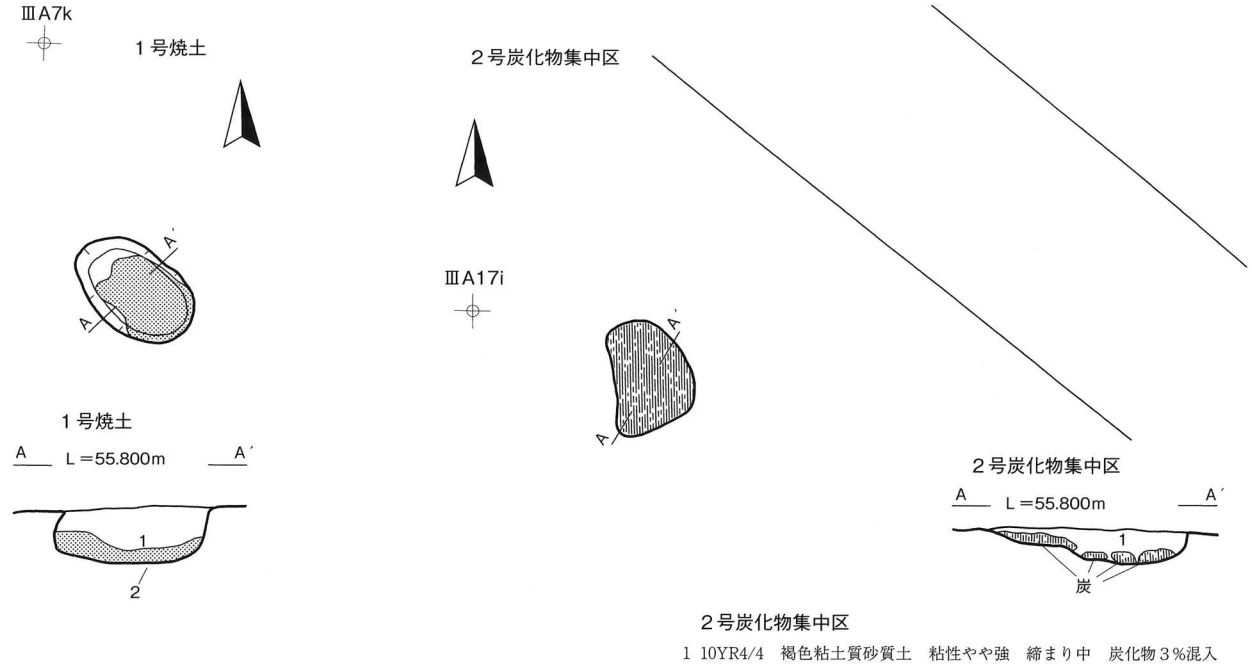
1 10YR4/4 褐色粘土質土 粘性やや強 締まりやや密
※１号畠状遺構の上部、若しくは同じ層に入ってくる

0　1：80　4m

第６図　畠状遺構、１号炭化物集中区


1・2号溝跡
ⅢA6i
ⅢA6l
C
C′
2号溝跡
C L＝56.000m C′
1
2号溝跡 C－C′
1 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質粘土 粘性中 締まり密 酸化鉄の集積 10%混入
（※酸化鉄は水平に数条の線状に入る）
B
B′
1号溝跡
B L＝56.000m B′
2
3
4
5
6
7
ⅢA10k
ⅢA10m
1号溝跡
A L＝56.000m A′
1
2a
3a
2
3
0 1：40 1m
A
A′
1号溝跡 A－A′・B－B′
1 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 締まり密 径1～2㎜の炭化物1%混入
（※自然堆積層、土器少量）
2 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや密 径1～2㎜の炭化物2%混入
（※自然堆積層）
2a 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 締まりやや密（※自然堆積層）
3 10YR3/3 暗褐色シルト質砂質土 粘性やや強 締まり中（※自然堆積層）
3a 10YR4/4 褐色砂質土 粘性やや弱 締まりやや密（※自然堆積層）
4 10YR4/4 褐色粘土質土 粘性やや強 締まり密（※自然堆積層）
5 10YR4/3～4/4 にぶい黄褐～褐色粘土質砂質土 粘性やや強 締まり密（※自然堆積層）
6 10YR3/3 暗褐色粘土質土 粘性強 締まり密（※自然堆積層、4層に類似した土質）
7 10YR3/3 暗褐色粘土質土 粘性強 締まり密（※自然堆積層、4・6層に類似した土質、
6層より色調がやや暗い）
ⅢA14m
調査外
0 1：160 8m

第7図 1・2号溝跡

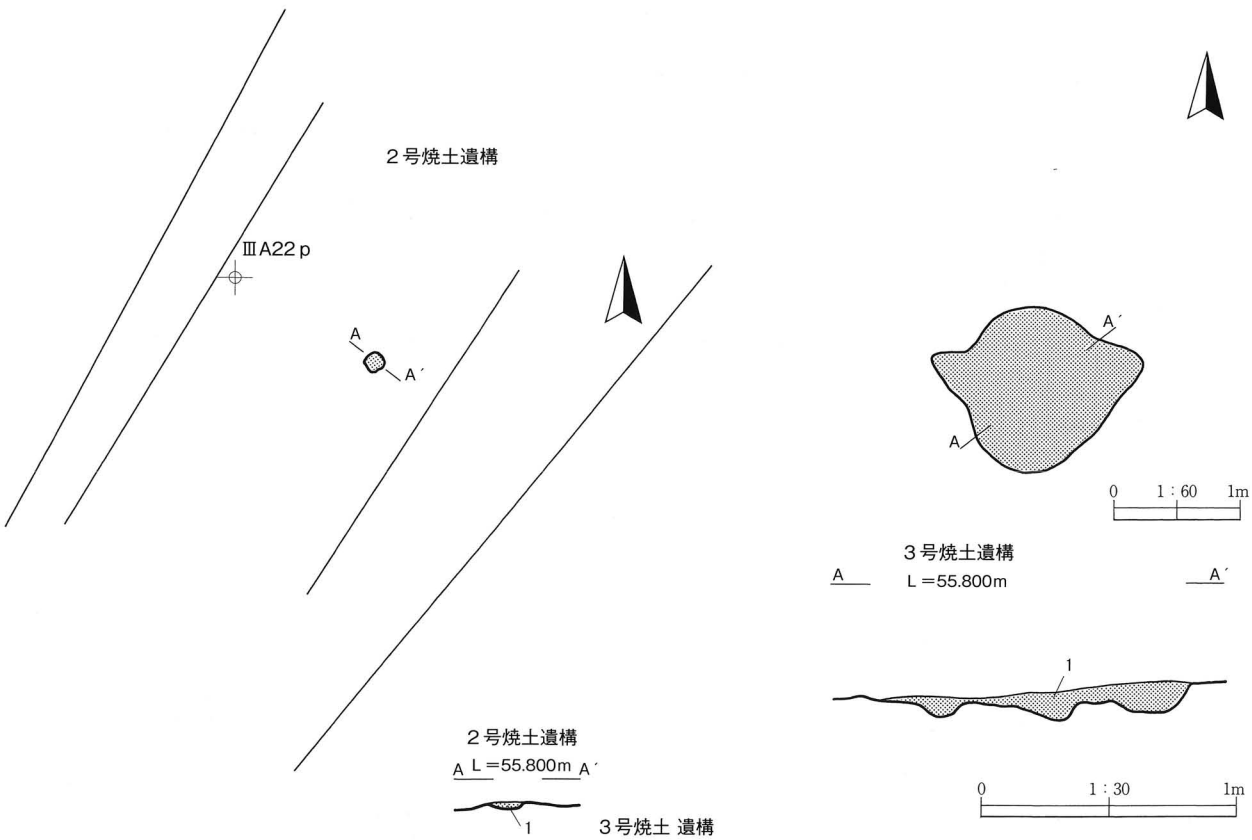


2号炭化物集中区

1 10YR4/4　褐色粘土質砂質土　粘性やや強　締まり中　炭化物３%混入

1号焼土遺構 A－A'

1 10YR4/4　褐色シルト質砂質土　粘性やや弱　締まりやや密　炭化物３%混入
2 10YR3/4　暗褐色粘土　粘性やや強　締まりやや密　焼土ブロック（５YR4/6）15%・炭化物７%混入
※この様相からは現地性焼土と判断される



2号焼土遺構

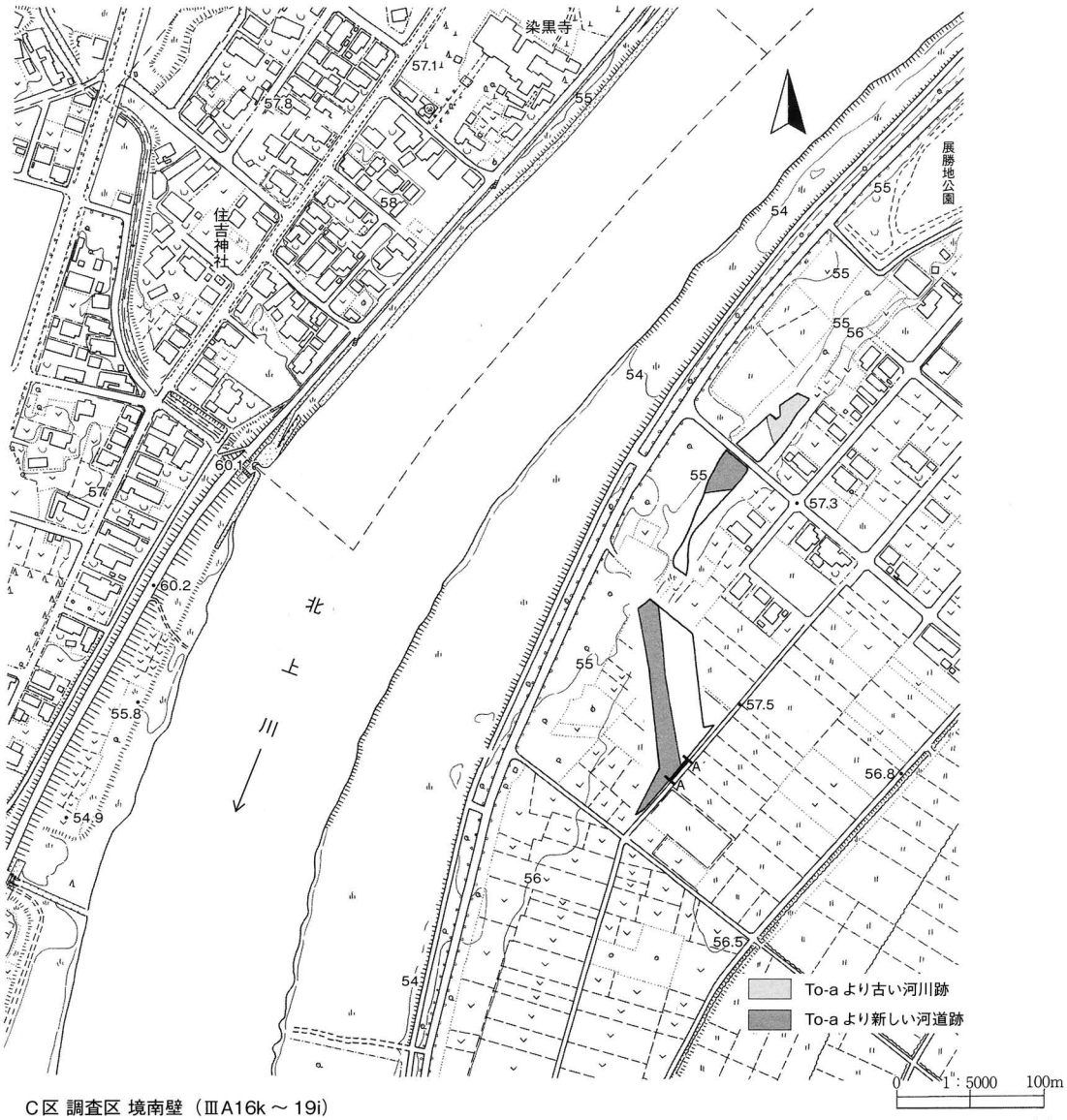
1 5YR3/4 暗褐色焼土 粘性やや弱 締まり中（※現地性）

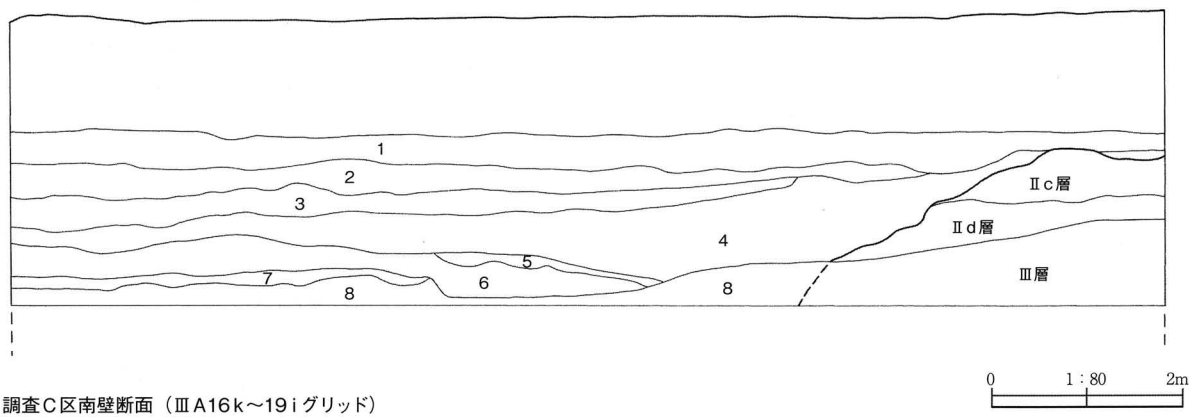
3号焼土 遺構

1　10YR4/4　褐色粘土　粘性やや強　締まり中　焼土（7.5YR2/3 極暗褐色）15%混入

第８図　１～３号焼土遺構、２号炭化物集中区

(1) 立花南遺跡（北上市）

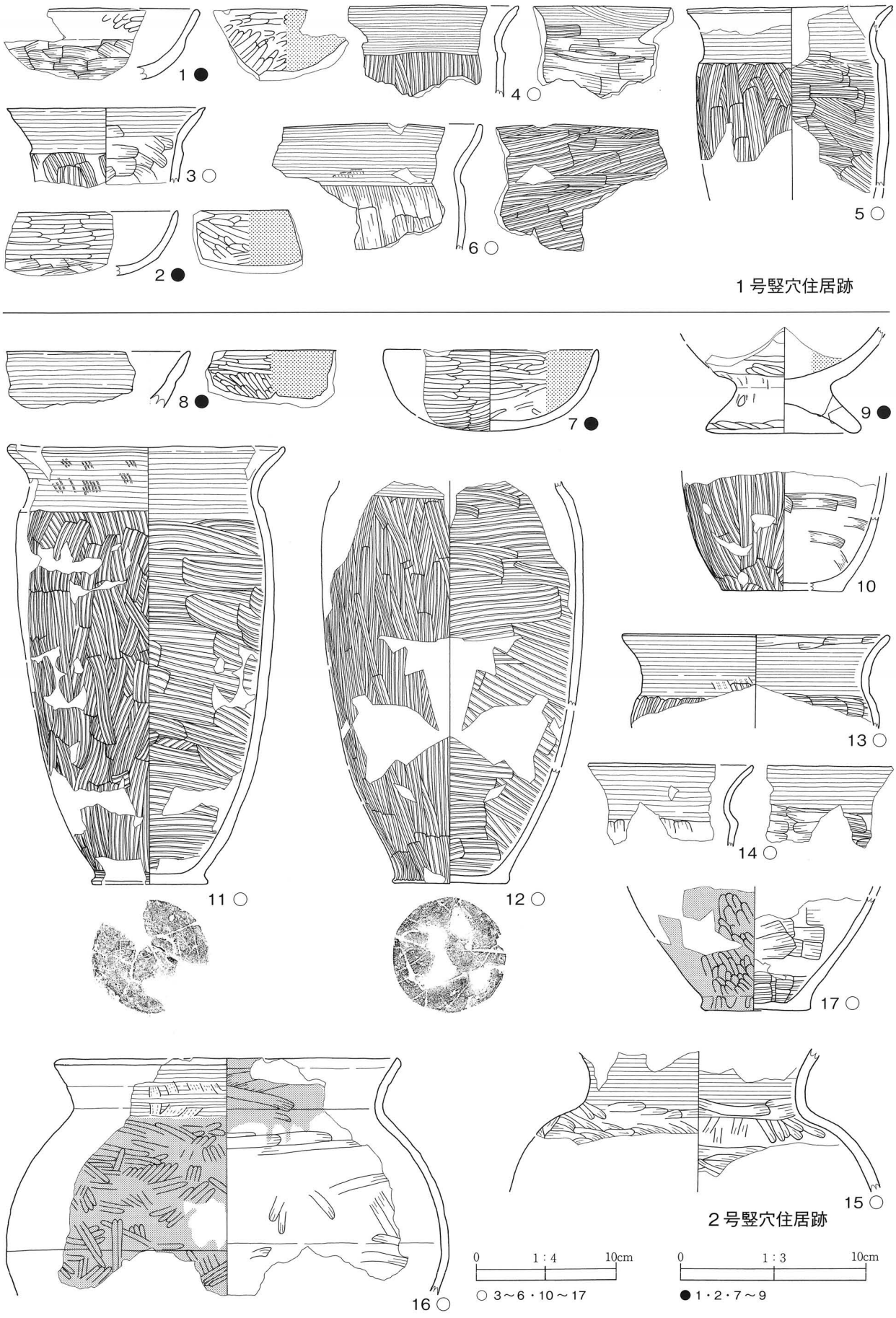




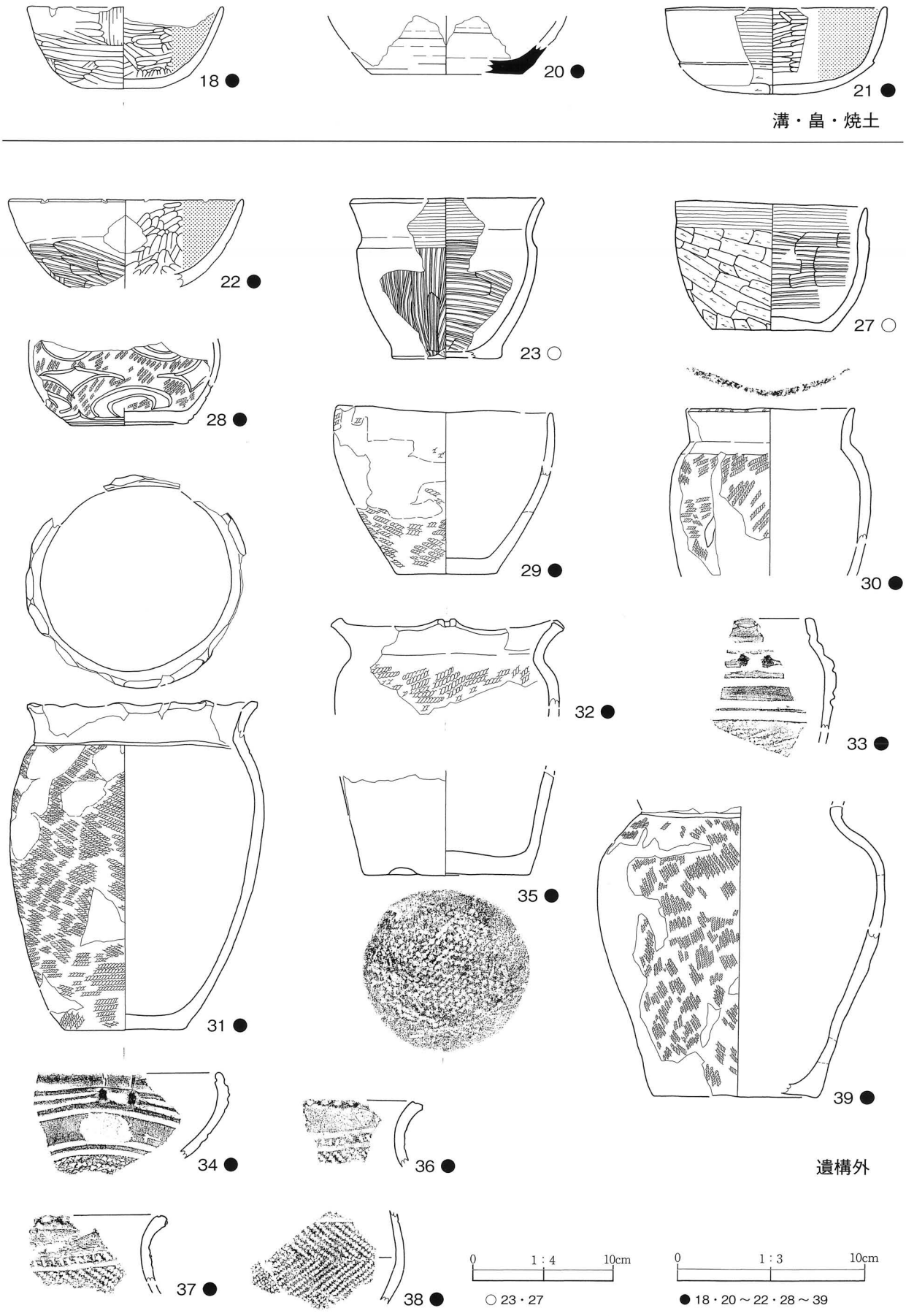
調査C区南壁断面（ⅢA16k～19ｉグリッド）

1 10YR3/3　暗褐色粘土質シルト　粘性やや強　締まりやや密（※基本層序Ⅱｂ層相当）
2 10YR3/4　暗褐色砂質粘土　粘性やや弱　締まり中（※Ⅱｃ層を起源とする土層と推定される）
3 10YR3/3　暗褐色粘土質土　粘性やや強　締まりやや密　炭化物１％混入（※Ⅱｄ層に類似する、あるいは同層を起源とする土層か？）
4 10YR2/3　黒褐色粘土質泥質土　粘性強　締まり密　砂質土５％・炭化物１％混入（※黒っぽくみえる、旧河道跡の検出のキー層）
5 10YR4/6　褐色粘土質砂質土　粘性中　締まりやや密
6 10YR4/4　褐色砂質粘土質土　粘性やや強　締まりやや疎
7 10YR4/4　褐色砂質土　粘性中　締まりやや疎
8 10YR4/3　にぶい黄褐色粘土質土　粘性やや強　締まりやや密

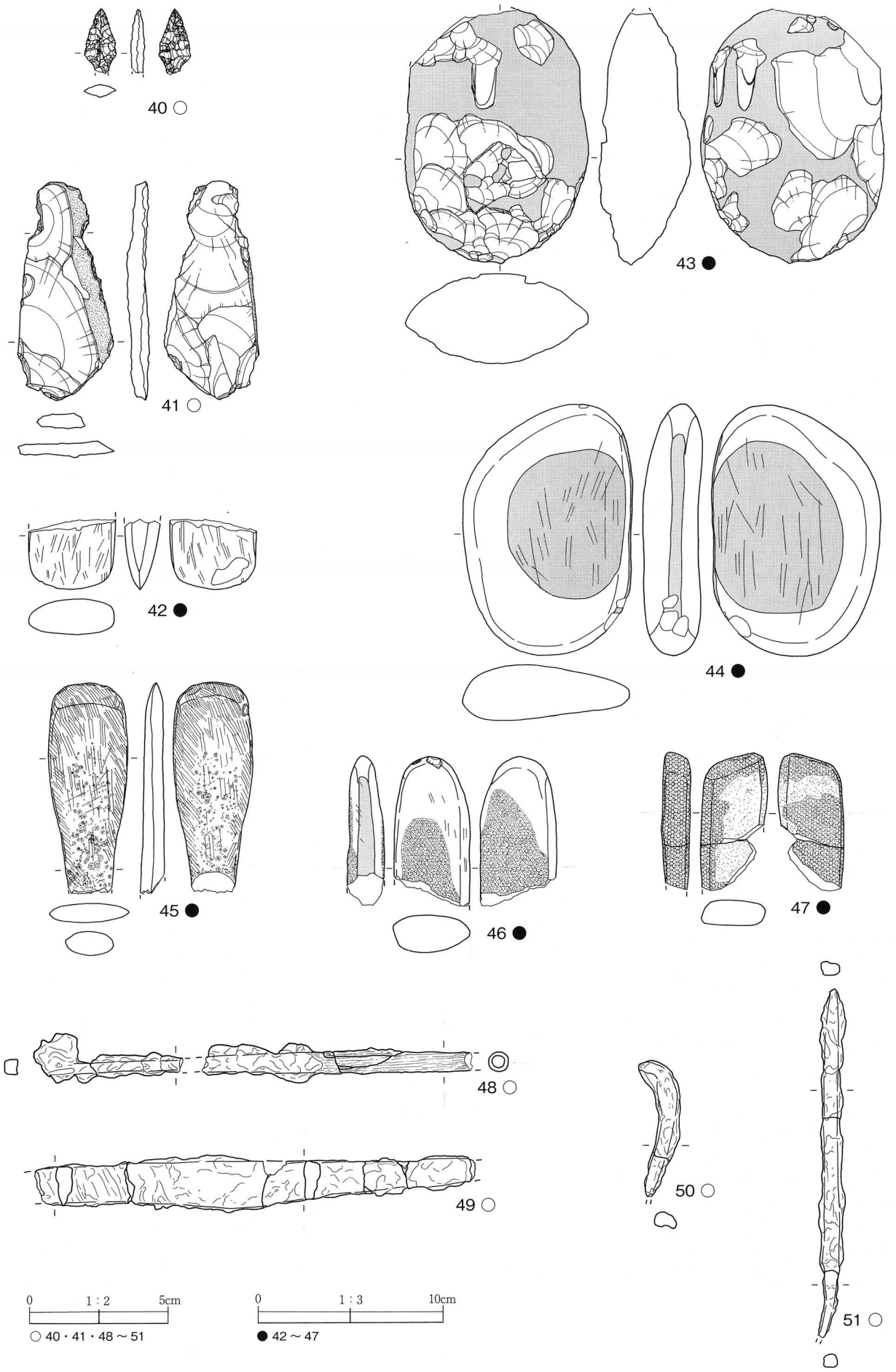
第９図　１～３号旧河道跡


1 ●
2 ●
3 ○
4 ○
5 ○
6 ○
1号竪穴住居跡
7 ●
8 ●
9 ●
10
11 ○
12 ○
13 ○
14 ○
15 ○
16 ○
17 ○
2号竪穴住居跡
0　1：4　10cm
○ 3～6・10～17
0　1：3　10cm
● 1・2・7～9

第10図　出土遺物（1）


18 ●
20 ●
21 ●
溝・畠・焼土
22 ●
23 ○
27 ○
28 ●
29 ●
30 ●
32 ●
33 ●
31 ●
35 ●
39 ●
34 ●
36 ●
遺構外
37 ●
38 ●
0 1：4 10cm
○ 23・27
0 1：3 10cm
● 18・20～22・28～39

第11図　出土遺物（土器）

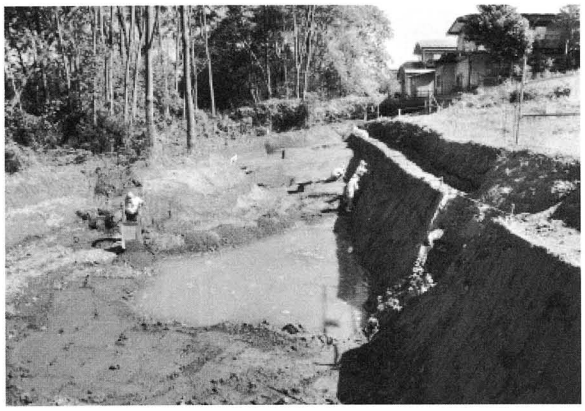


第12図　出土遺物（石器類・鉄製品）

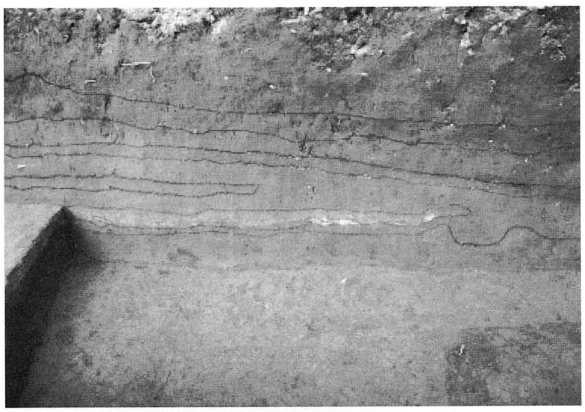
全景（下が南西）

遺跡全景（西から）

写真図版１　遺跡全景



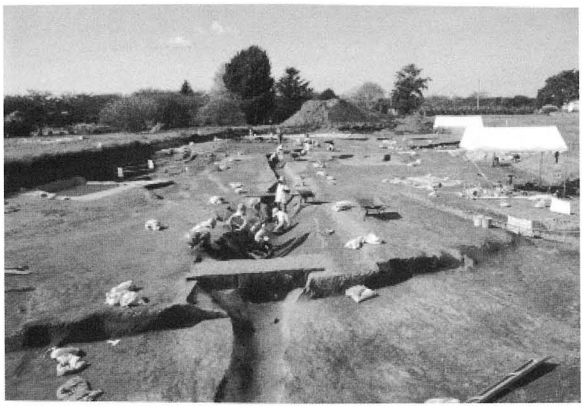
調査Ａ区遠景（南から）



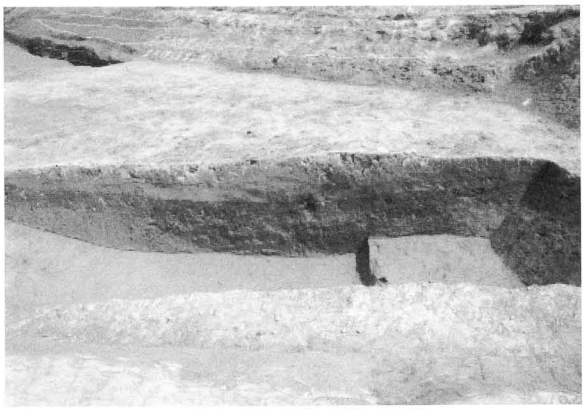
調査Ａ区西境土層断面（東から）

調査Ｂ区全景（北から）

調査Ｂ区東境土層断面（西から）



調査Ｃ区（南から）

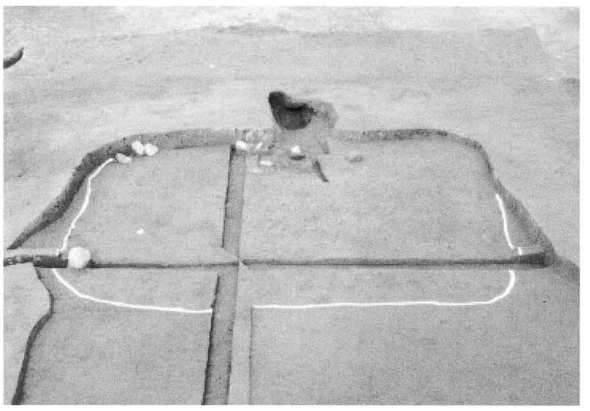


Ｃ区基本層序（※第 12 トレンチ西から）

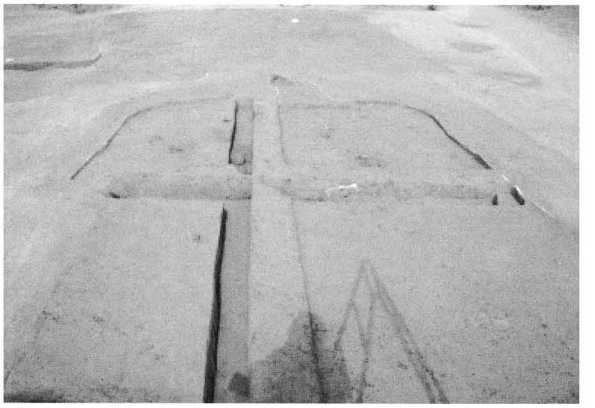
東端部土層断面（弥生土器集中出土西から）

調査Ｃ区調査前風景（東から）

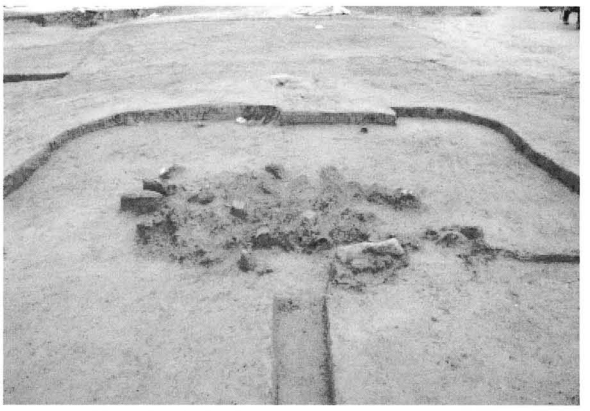
写真図版２　調査区遠景



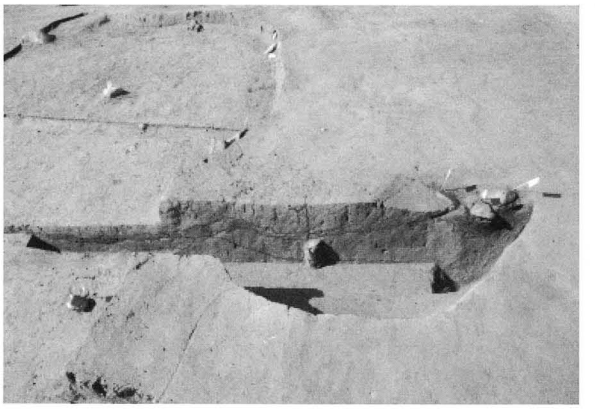
１号竪穴住居跡　完掘平面（南から）



１号竪穴住居跡　埋土土層（南から）



１号竪穴住居跡　炭化材・焼土塊・土器出土状況（南から）



１号竪穴住居跡　カマド煙道部断面（東から）

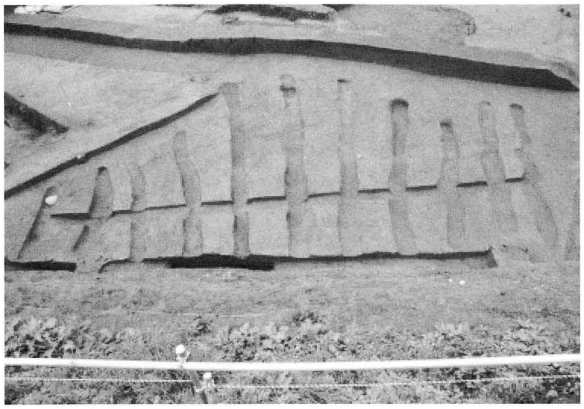
２号竪穴住居跡　全景（南から）

２号竪穴住居跡　埋土断面（西から）

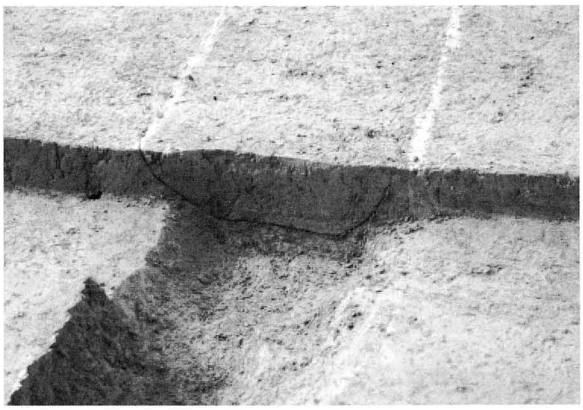
２号竪穴住居跡　カマド全景（南から）

２号竪穴住居跡　カマド断面（南から）

写真図版３　住居



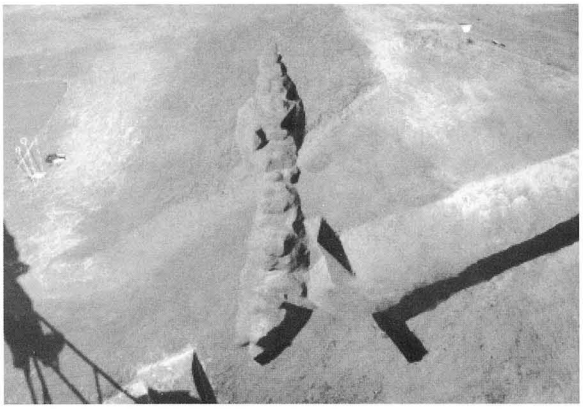
畠状遺構全景（南から）



畠状遺構（南から）

１号溝跡　完掘全景（南）

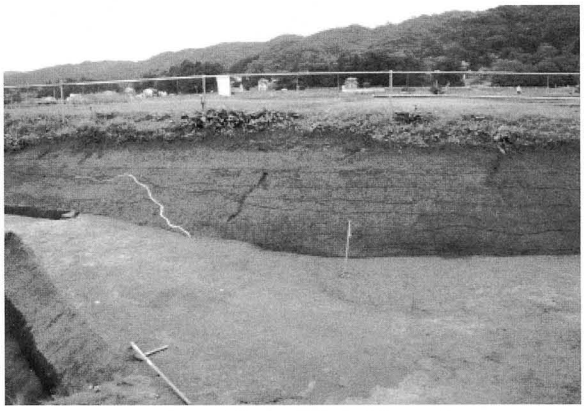
１号溝跡　断面（南）



２号溝跡　完掘全景（西から）

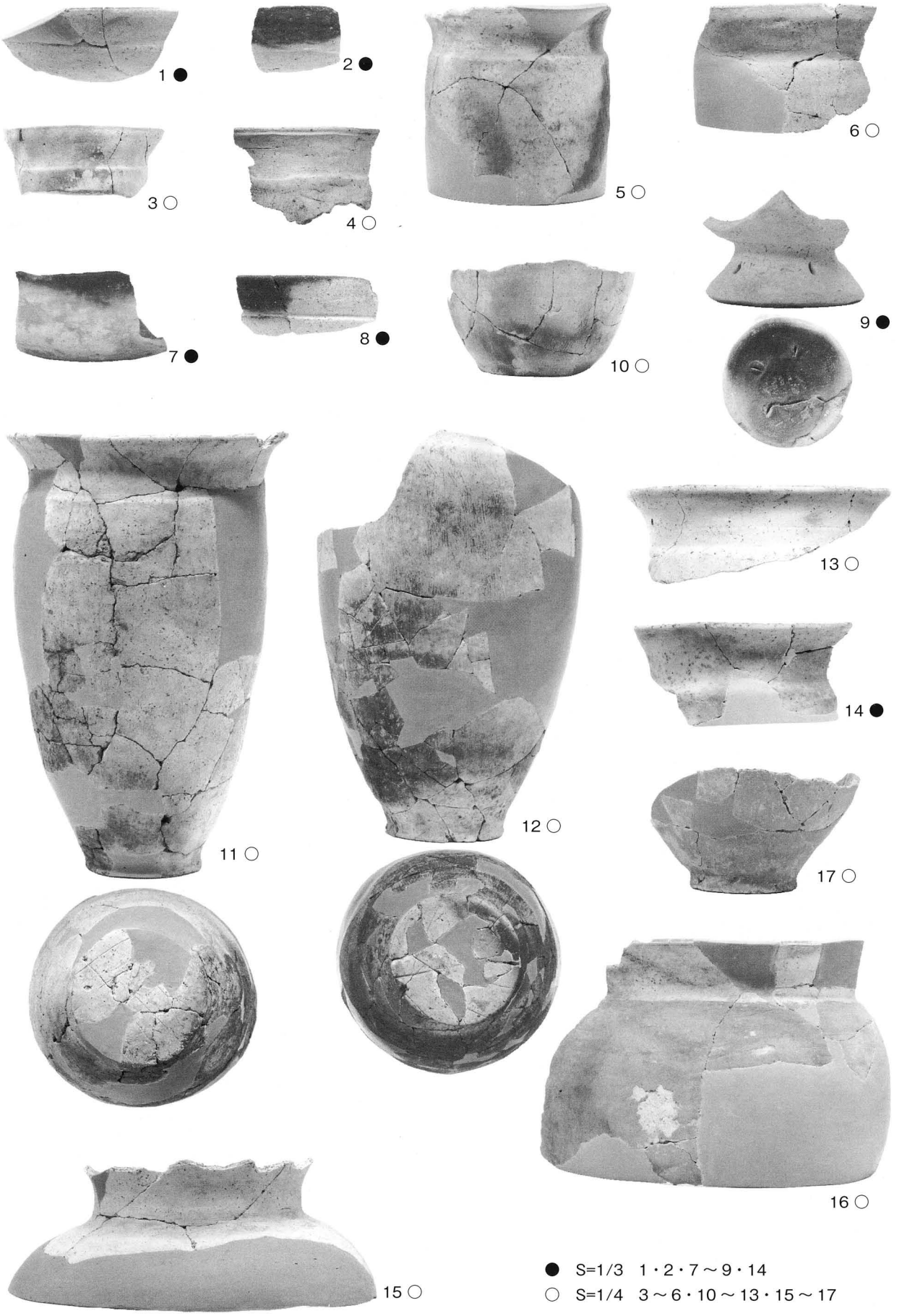
２号溝跡　断面（西から）

１号焼土遺構　断面（南から）



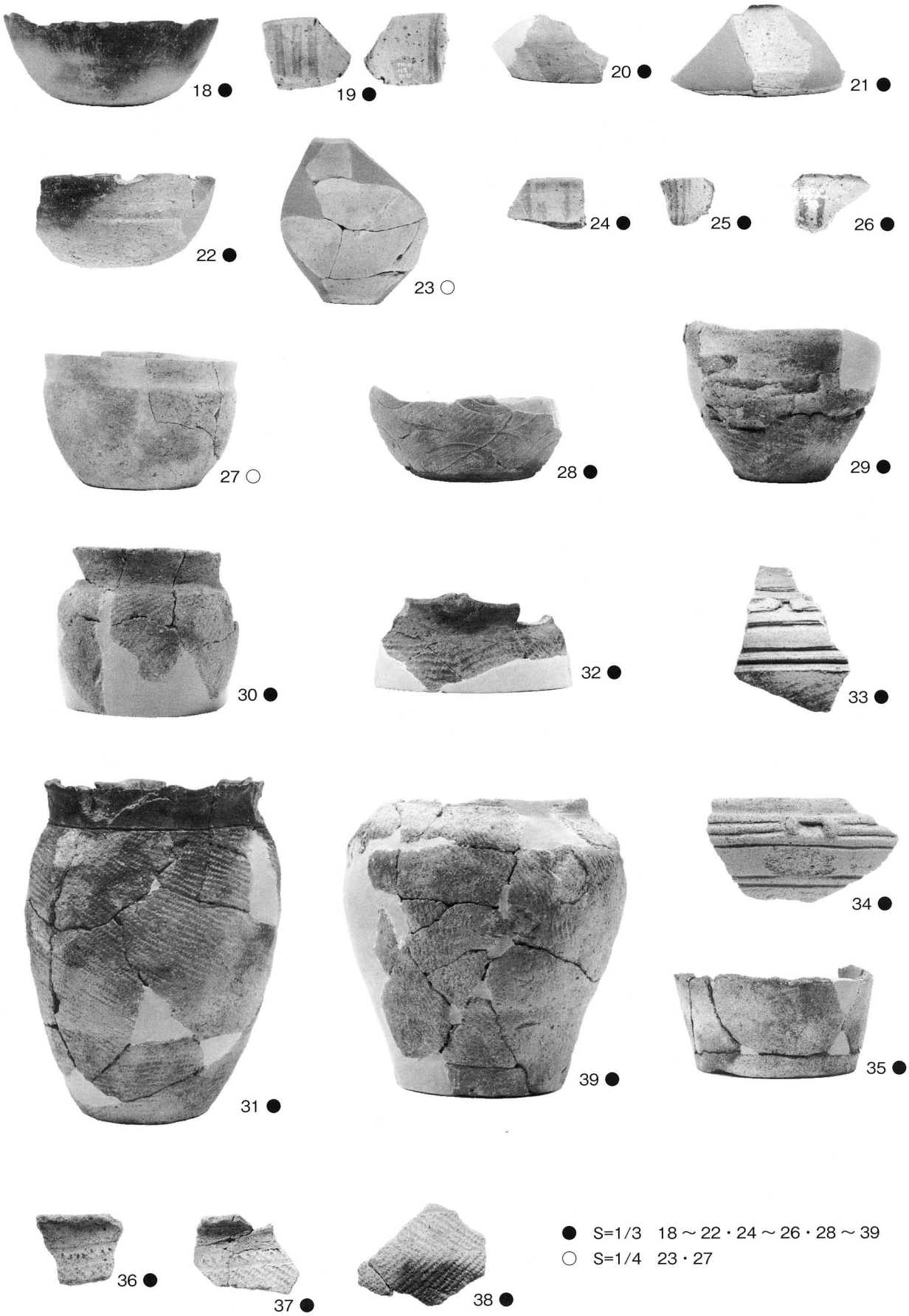
１号旧河道跡　断面（北から）

写真図版４　畠・溝・その他

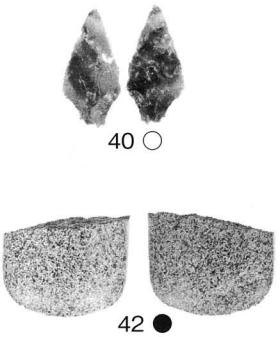


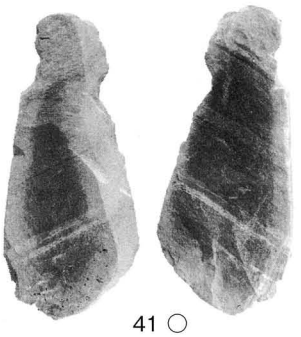
● S=1/3　1・2・7～9・14
○ S=1/4　3～6・10～13・15～17

写真図版５　出土遺物（土器）



写真図版６　出土遺物（土器）


40 ○
42 ●

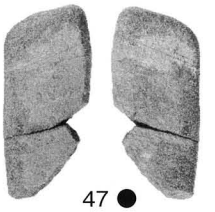

41 ○

43 ●

44 ●

45 ●

46 ●


47 ●

48 ○

49 ○

51 ○

50 ●

焼成粘土塊Ｓ＝1/3

○ S=1/2　40・41・48・49・51
● S=1/3　42～47・50

写真図版７　出土遺物（石器類・鉄製品・焼成粘土塊）

（2）熊の沢Ⅱ遺跡

所在地	遠野市綾織町新里27地割58-39地内ほか	遺跡コード・略号	MF54-0051・KN-Ⅱ-10
委託者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	641㎡
事業名	東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業	調査終了面積	641㎡
発掘調査期間	平成22年10月5日～10月15日	調査担当者	溜　浩二郎・西澤正晴

1　調査に至る経過

「上日影遺跡」および「熊の沢Ⅱ遺跡」は東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）の施工に伴って、その事業区内に存在することから発掘調査を実施することになったものである。東北横断自動車道は、釜石市を起点として、遠野市、奥州市を経由し、花巻市にて東北縦貫自動車道（東北道）に合流し、さらに分岐し、西和賀町、横手市、大仙市を経緯して秋田市に至る総延長212km（内岩手県内113kmで供用区間は45km。）の高規格道路である。

本路線は、釜石港・大船渡港といった重要港湾や観光資源豊富な陸中海岸国立公園を有する三陸地方拠点都市地域と、先端技術産業の集積が著しい北上中部地方拠点都市地域等の岩手県内と秋田県を結び、周辺地域のみならず岩手・秋田両県全域の産業・経済発展を担うことを目的に平成10年度に遠野～宮守間で整備計画、宮守～東和間では施工命令が、平成15年には新直轄方式により整備することが決定している。

「上日影遺跡」および「熊の沢Ⅱ遺跡」については、本年度に岩手県教育委員会で試掘調査を実施され、当路線事業地内が埋蔵文化財包蔵地であることが確認されたものであり、その結果に基づいて岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所が協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることにした。

これにより財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターにおいて、「上日影遺跡」・「熊の沢Ⅱ遺跡」の発掘調査に着手した。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

2　遺跡の位置と立地

熊の沢Ⅱ遺跡は遠野市役所から西南西約4.6kmの位置にあり、西から東へ流れる猿ヶ石川と南側に接する山林から続く丘陵の先端部に立地する。調査前の状況は山林で、標高は279m前後である。

3　基本層序

いずれも表土（黒褐色シルト）下は褐色土（10YR4/4）で、遺構検出面である。

4　調査の概要

（1）遺　構

陥し穴状遺構が２基検出された。形状はいずれも溝状を呈し、規模は１号陥し穴が開口部径324×74cm、底径336×６cm、深さ114cm、２号陥し穴が開口部径290×56cm、底径286×９cm、深さ86cmで、遺構から遺物は出土していない。

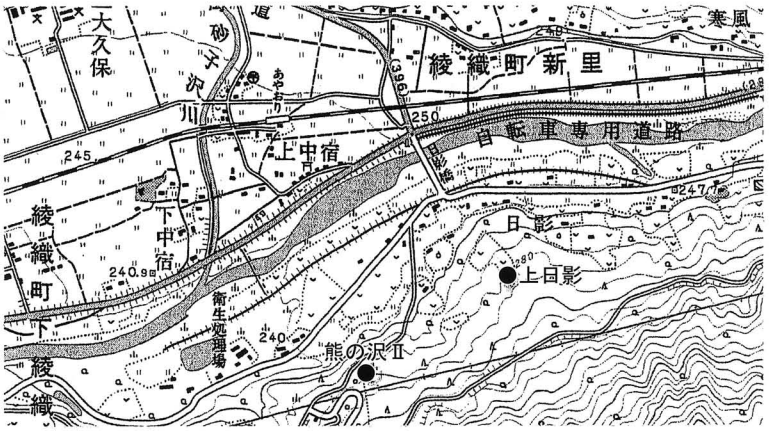
（2）遺　物

表土下の褐色土面から縄文土器の小破片が１点出土した。外面に貝殻文・沈線文が施されている。

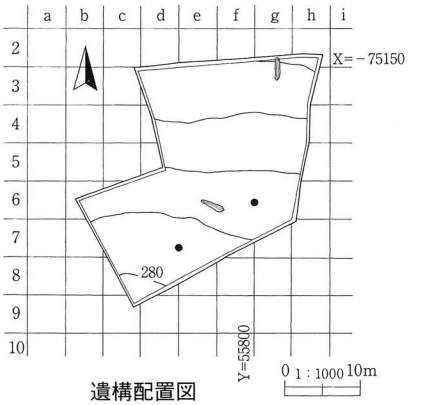
5　まとめ

今回の調査で熊の沢Ⅱ遺跡は縄文時代の狩猟場であることが判明した。遺跡全体の詳細については

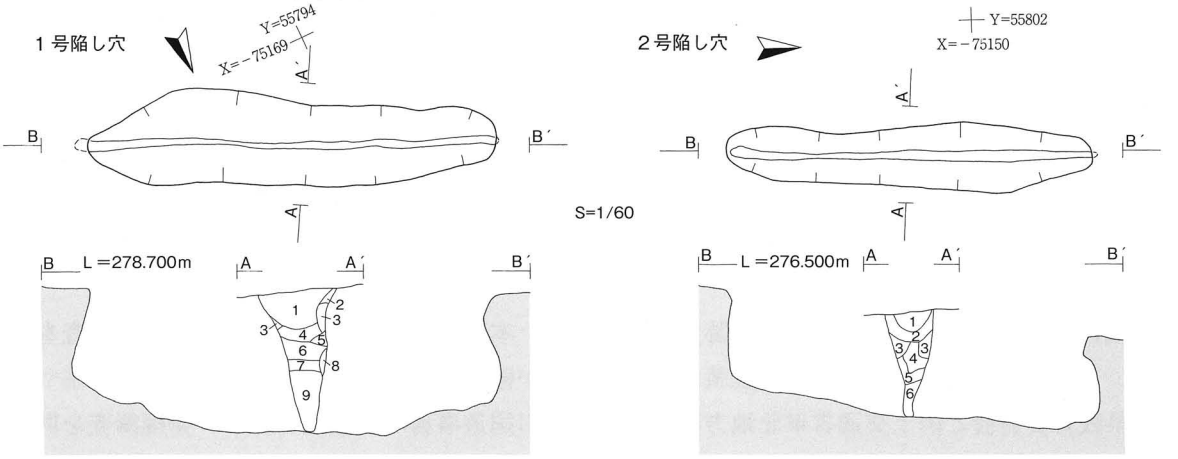
今後の調査機会を待ちたい。なお、熊の沢Ⅱ遺跡の平成22年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。



遺跡位置図



遺構配置図

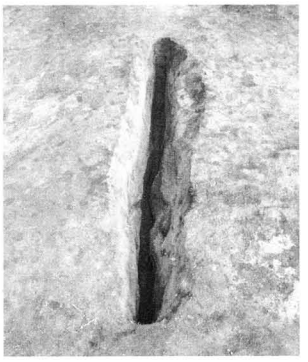


1号陥し穴
A－A'

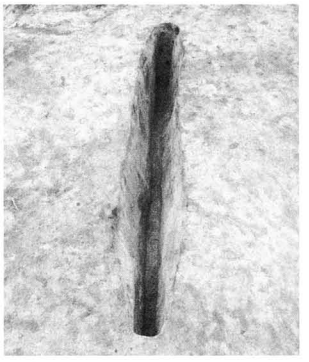
1　10YR2/1　黒色シルト　粘性・しまりあり
2　10YR3/4　暗褐色シルト　粘性・しまりあり
3　10YR3/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　暗褐色シルト(10YR3/4)5%含む。
4　10YR2/1　黒色シルト　粘性ややあり　しまりあり
5　10YR3/3　暗褐色シルト　粘性・しまりあり
6　10YR2/1　黒色シルト30%、10YR3/4　暗褐色シルト70%の混合土層。粘性・しまりあり
7　10YR5/6　黄褐色シルト　粘性なし　しまりあり
8　10YR3/2　黒褐色砂質シルト　粘性なし　しまりややあり
9　10YR5/6　黄褐色シルト　粘性なし　しまりあり　砂・礫粒多い。

2号陥し穴
A－A'

1　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり
2　10YR3/2　黒褐色シルト70%、10YR4/4　褐色シルト30%の混合土層。粘性あり　しまりなし
3　10YR4/6　褐色シルト　粘性・しまりあり
4　10YR3/2　黒褐色シルト　粘性・しまりややあり
5　10YR4/6　褐色砂質シルト　粘性なし　しまりあり
6　10YR3/2　黒褐色シルト　粘性あり　しまりややあり



1号陥し穴平面



2号陥し穴平面

調査区近景

1号陥し穴断面

2号陥し穴断面

1

写真図版

（3）上日影（かみひかげ）遺跡

所　在　地	遠野市綾織町新里22地割45-3地内ほか	遺跡コード・略号	MF30-0285・KHK-10
委　託　者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	1,450㎡
事　業　名	東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業	調査終了面積	1,450㎡
発掘調査期間	平成22年9月17日～10月15日	調査担当者	溜　浩二郎・西澤正晴

1　遺跡の位置と立地

上日影遺跡は遠野市役所から西南西約4.1kmの位置にあり、西から東へ流れる猿ヶ石川と南側に接する丘陵部の先端に立地する。調査前の状況は山林で、標高は286～289mである。

3　基　本　層　序

調査区は南東から北西に向かって傾斜しており、丘陵の上部から流入した土砂が北側ほど厚く堆積している。

4　調査の概要

（1）遺　　構

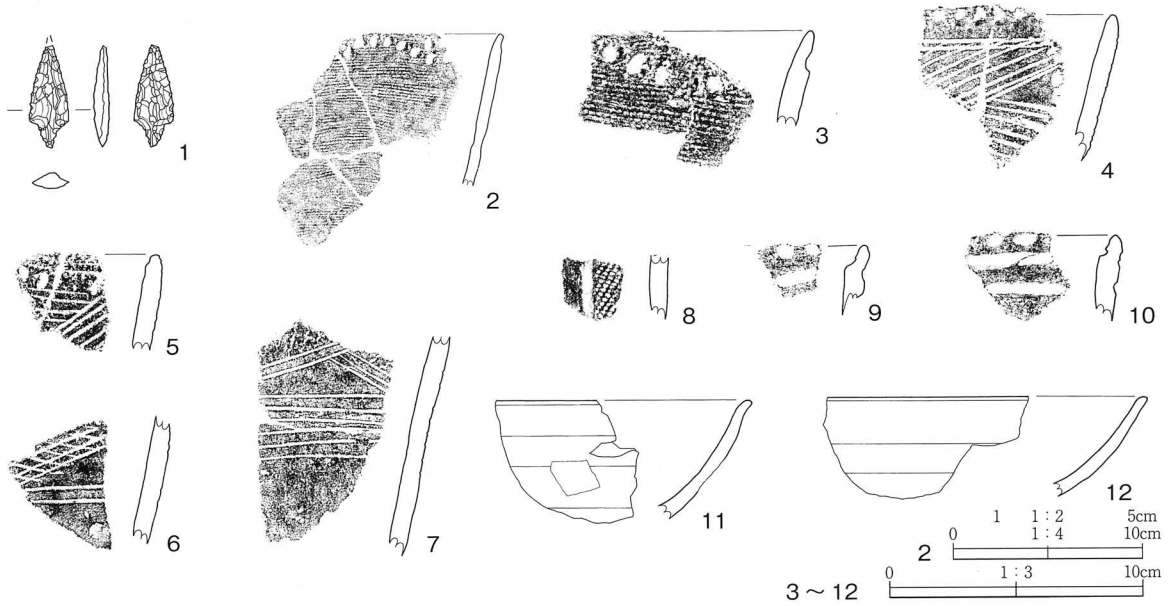
古代の焼土遺構１基、時期不明の柱穴状土坑１個を検出した。焼土遺構は82×51cmの範囲に焼土が広がっており、焼土から土師器坏の破片が２点出土した。柱穴状土坑は焼土遺構の南側で検出され、径44×40cm、深さ７cmで埋土に焼土を含む。出土遺物はなく、時期は不明である。

（2）遺　　物

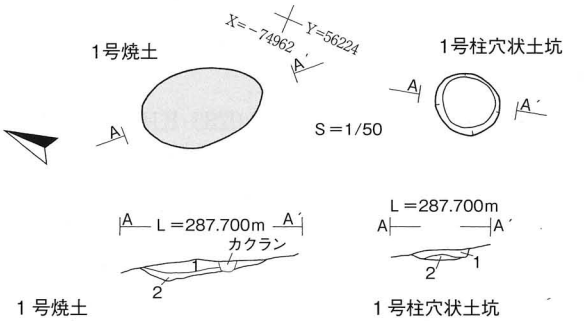
小コンテナで１箱分出土した。１は石鏃で先端部を欠く。石材には北上山地産の頁岩が使用されている。２～７は縄文時代早期の深鉢の口縁～胴部破片で、口縁部には幅広の刺突文（２・３）、平行・斜行の沈線文（４～７）、貝殻腹縁圧痕文（７）などの文様が施されている。９・10は縄文時代晩期の鉢の口縁部破片である。11・12は１号焼土内から出土したロクロ成形による土師器坏の破片である。

5　ま　と　め

今回の調査で、上日影遺跡は縄文時代・古代の遺物散布地であることが分かった。古代の焼土遺構からは土師器が少量出土したことから、近隣に集落が存在する可能性が考えられるが、今回調査した範囲では詳細は不明である。なお、上日影遺跡22年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。



（3）上日影（かみひかげ）遺跡

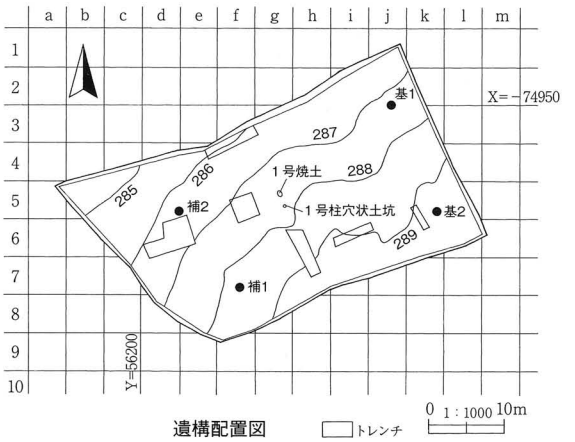


1号焼土
A－A′

1．5YR5/8　明赤褐色焼土　粘性・しまりややあり　黒色シルト（10YR2/1）20%混入。砂粒を多量含む。
2．10YR4/6　褐色焼土　粘性なし　しまりあり　径5㎜の炭化物片1％未満含む。

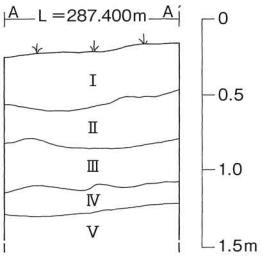
1号柱穴状土坑
A－A′

1．7.5YR3/2　黒褐色焼土　砂質粘性・しまりなし
2．10YR2/1　黒色砂質シルト　粘性なし　しまりややあり　径5～7㎜の砂粒を多量含む。



遺構配置図

基本土層

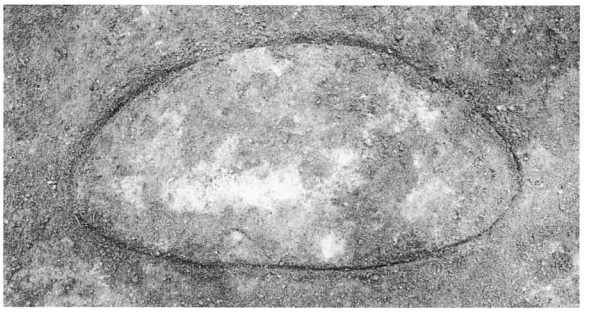


基本土層

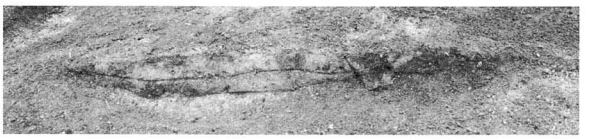
Ⅰ　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性ややあり　しまりあり
Ⅱ　10YR2/1　黒色シルト　粘性・しまりあり
Ⅲ　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　径3～5㎝の礫3～5％含む。
Ⅳ　10YR3/3　暗褐色シルト50%、10YR4/6褐色シルト50%の混合土層。粘性・しまりあり　径3～5㎜の礫5～7％含む。
Ⅴ　10YR4/6　褐色シルト　粘性・しまりあり　花崗岩（大）混入。

調査区近景

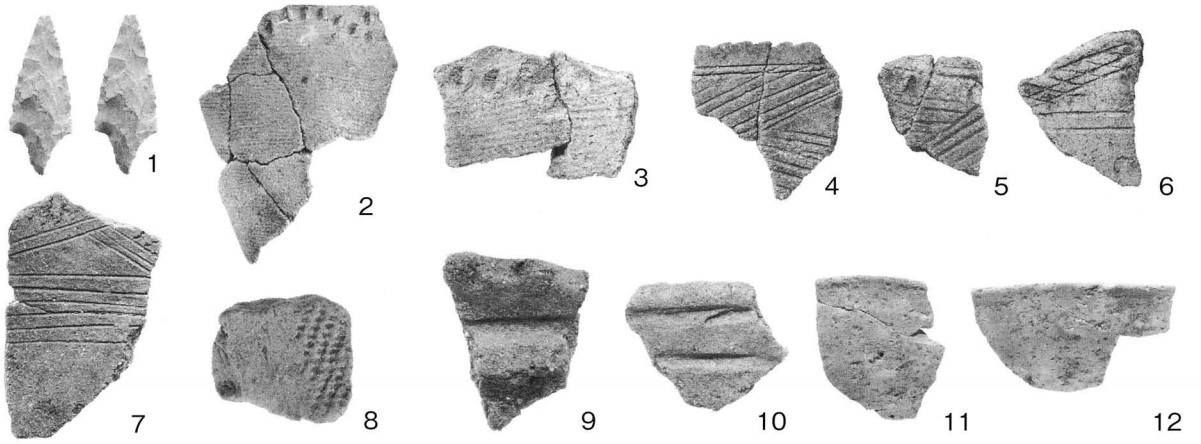
基本土層



1号焼土平面



1号焼土断面



写真図版

（4）高殿Ⅱ遺跡

所在地	奥州市前沢区古城字高殿60番地6ほか	遺跡コード・略号	ＮＥ46-1301・ＫＤ-10
委託者	県南広域振興局農政部農村整備室	調査対象面積	677㎡
事業名	経営体育成基盤整備事業古城２期地区	調査終了面積	677㎡
発掘調査期間	平成22年５月６日～６月１日	調査担当者	杉沢昭太郎・米田　寛

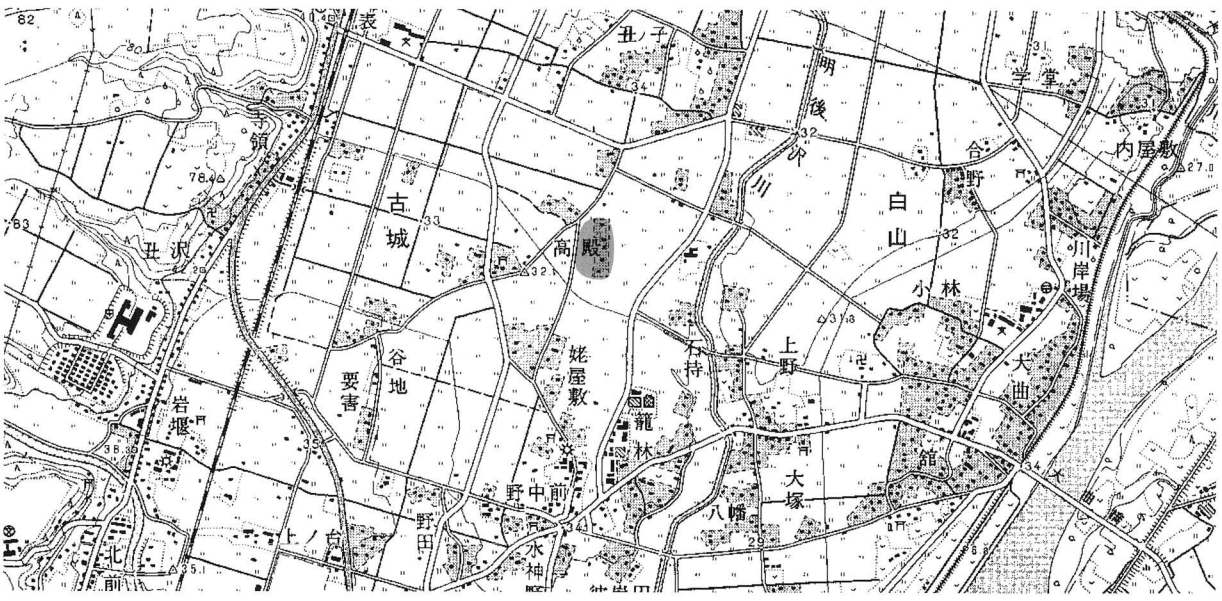
１　調査に至る経過

高殿Ⅱ遺跡は、「経営体育成基盤整備事業古城２期地区」のほ場整備に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

本地区は奥州市前沢区中心部より北東部に位置し、現況は、小区画・不整形な水田で、かつ幅員狭小な農道となっていることから、作業効率が悪く、また用排水兼用の土側溝水路のため、用水不足や排水不良となっており、維持管理に支障を来しているところである。このため、本事業地区においては、大区画ほ場整備を実施することで、農作業の効率化、生産コストの削減、生産性の向上を図り、農地集積による安定した経営体および担い手農家の育成を目的として、事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、県南広域振興局農政部農村整備室から平成21年８月28日付け　県南広農整第136－2号「経営体育成基盤整備事業古城2期地区における埋蔵文化財試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。依頼を受けた岩手県教育委員会は平成21年９月24日に試掘調査を実施し、工事に着手するには当該遺跡の発掘調査が必要になる旨を、平成21年10月20日付け教生第929号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により回答があった。この回答を受け、当農村整備室は平成22年９月24日付け　県南広農整第136－8号「埋蔵文化財試掘調査結果による工法協議について」により、盛土工法による保存箇所と、発掘調査による記録保存箇所について協議を行った。その結果を踏まえて当農村整備室は、岩手県教育委員会の調整を受けて、平成22年４月１日付けで財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった

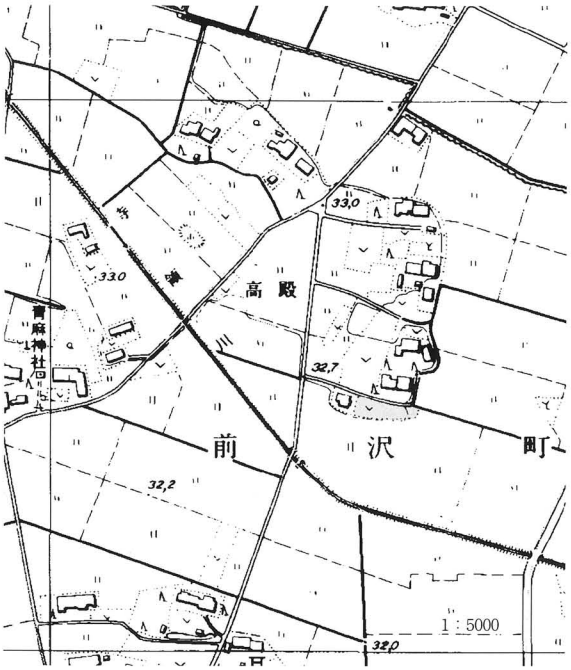
（岩手県県南広域振興局農政部農村整備室）



第１図　遺跡位置図

2　遺跡の位置と立地

本遺跡は奥州市前沢区北部の古城地区にあり、北上川西岸の水沢高位段丘に立地する。この段丘は胆沢扇状地の低位段丘面に相当し、中位段丘面（胆沢段丘）までは西に2.5km程ある。遺跡とその周辺は概ね平坦で、現在は水田が多くを占め微高地には集落や畑地が点在している。標高は31mである。



第２図　地形図

3　基本層序

Ⅰ層　暗褐色土層。表土･耕作土。層厚 20～30cm。

Ⅱ層　黒色土層。旧表土。遺跡東側のみに見られる。０～30cm。

Ⅲ層　黒褐色土層。部分的に見られる。０～10cm。

Ⅳ層　黄褐色土。遺構検出面。場所によってはその下の礫層が見られる。層厚は不明。

4　調査の概要

本遺跡は南北210m、東西110mの広がりを有するが、その中で今回は遺跡の南端部を調査したことになる。

（1）遺　　構

＜土坑＞

調査区の北側にややまとまって分布しているもの、その他の場所に点在するものに大きく分けられる。前者の中には焼土粒・炭粒・土師器細片を多く含む土坑が複数見られた。５・10・11・13～15号土坑がそれにあたり、不要なものを埋めた平安時代の施設と考えられる。調査区が遺跡の縁辺部に相当すること、竪穴住居跡が見られないことなどから、集落の中の居住域からやや外れた場所にあたると推察される。個々の土坑については第１表に整理した。

第１表　土坑観察表　　（　）は残存値

遺構名	重複関係	検出面での計測値(cm)			埋土	出土遺物	時期	備考
		長さ	幅	深さ				
１号土坑	１号溝より古い。	106	(92)	24	人為堆積	粘土塊 0.1 袋、炭化種子	近世	近世の環濠屋敷の堀であろう。
２号土坑	１号堀、３号土坑との関係は不明。５号土坑より古い。	(125)	(100)	10	人為堆積	土師器坏片１・甕片１、須恵系坏片１	平安時代	
３号土坑	１号堀より古い。２号土坑との関係は不明。	(86)	(85)	23	人為堆積	須恵器坏片１、土師器片 12、剥片２	不明	
４号土坑	２号溝より古い。	102	90	26	人為堆積	須恵器坏片２、土師器・須恵系片 0.2 袋、粘土塊１、炭粒	平安時代か	
５号土坑	２・９号土坑より新。１号堀より古い。	(100)	(90)	32	人為堆積	須恵器甕片１・坏片１、土師器坏・甕片、須恵系 0.5 袋、粘土塊１	平安時代	破片が大きい。土器廃棄した土坑か。甕は２～３個体分のようだ。
６号土坑	１号溝より古い。	75	70	22	人為堆積	土師器甕片３片	不明	
７号土坑	８号土坑との関係は不明。	79	74	30	人為堆積	須恵器坏片２、須恵系坏片３	平安時代か	
８号土坑	７号土坑との関係は不明。	81	67	42	人為堆積	須恵器坏片１、土師器片・須恵系片 0.1 袋	平安時代か	

9号土坑	1号堀、5号土坑より古い。7号溝より新しい可能性あり。	(140)	93	22	人為堆積	土師器甕片8片	平安時代	
10号土坑	なし。	96	(50)	25	人為堆積	須恵器坏片1、蓋片？1、土師器坏片1・甕片13、須恵系坏片18、粘土塊3、炭粒	平安時代	須恵系坏は4個体分ある。廃棄土坑か。
11号土坑	1号堀より古い。4号溝との関係は不明。	(68)	64	30	人為堆積	須恵器坏片1、土師器坏片4・甕片14、粘土塊11、炭粒	平安時代	廃棄土坑か。
12号土坑	なし。	120	72	13	人為堆積	須恵器小甕類片1、土師器片5	不明	
13号土坑	なし。	58	52	31	人為堆積	須恵器壺類片1、甕類片2、土師器甕片1袋、須恵系坏片1、粘土塊0.3袋、炭粒	平安時代	廃棄土坑か。 1号焼土と同一遺構。
14号土坑	1号堀より古い。	58	(32)	31	人為堆積	須恵器坏片1、土師器甕片0.2袋、土師器坏片2	平安時代	廃棄土坑か。
15号土坑	なし。	(112)	68	22	人為堆積	土師器坏片0.1袋・甕片0.2袋、粘土塊0.2袋	平安時代	廃棄土坑か。
16号土坑	1号溝より古い。	122	(53)	43	人為堆積	須恵器坏片3、土師器片0.1袋	不明	
17号土坑	なし。	91	89	42	上が人為、下が自然堆積か		不明	

＜堀跡・溝跡＞

東－西方向に延びている近世の堀跡・溝跡、概ね南－北方向に延びている平安時代とみられる溝跡がある。前者は残りが良いのに対して、後者は浅く土坑類に切られたりしていて残りが悪い。

1号堀跡はこの地域に広く見られる環濠屋敷の堀跡と思われるが、詳細な時期を判断する遺物を欠く。しかし、逆にこのことから本遺構が近世の中でも陶磁器などの出土量が非常に少ない17世紀初頭頃に遡る可能性もある。環濠の全域については周辺地形の改変が著しく手掛かりに乏しいが、古い航空写真から1辺が凡そ30m四方となるのではないかと推測される。

第2表　堀・溝観察表

遺構名	重複関係	方向	検出面での計測値(m)			出土遺物	時期	備考
			長さ	幅	深さ			
1号堀	2・3・5・9・11・14号土坑より新。	南－北 西－東	4 10	2.68	0.45	須恵器片0.2袋、土師器・須恵系1.5袋、粘土塊0.1袋、石皿？1、剥片1	近世	摩耗した細片のみ。粘土塊は11号土坑出土の粘土塊とよく似ている。
1号溝	1・16号土坑より新。	西－東	49	0.94	0.29	須恵器片1袋、土師器・須恵系2袋、石鏃1・敲石1、剥片1	近世	摩耗した細片のみ
2号溝	4号土坑より新。	西－東	19	0.4	0.1	須恵器坏片2・高台坏片1、土師器片0.3袋	近世か	8cの高台坏か
3号溝		西北西－東南東	6.5	0.19	0.13	須恵器坏片3、土師器坏片9、甕片2	平安時代か	
4号溝	11号土坑との関係不明。	北西－南東	4	0.12	0.1	須恵系坏片2、甕片1	平安時代か	
5号溝		南－北	6.5	0.65	0.19	須恵器坏片2、壺片1、須恵系坏・土師器甕片0.4袋	平安時代か	
6号溝		南－北	4	0.32	0.1	土師器坏片1、須恵系坏片6	平安時代か	
7号溝	9号土坑より古い可能性あり。	南－北	3	0.58	0.13		平安時代	

＜掘立柱建物跡・柱穴＞

調査区のほぼ中央に１号掘立柱建物跡がある。桁行き２間、梁間２間の総柱建物であるが、かなり歪な柱配置をしている。四隅にくる柱穴４個に対して、そうではない柱穴４個がかなり内側に入っている。柱間寸法にも統一感がないが、P45・P51・P54が直線的に結べることから東西方向を梁間、南北方向を桁行きと考えた。平面形態から倉庫と見られる。

第３表　柱穴観察表　　単位：cm

No	規模		深さ	その他
1	37	35	17.7	
2	32	24	8.1	
3	29	22	7.5	
4	41	31	21.5	
5	57	45	23.2	
6	62	55	40.4	須恵器坏片２・壺片１、土師器・須恵系片９
7	90	85	50.2	須恵器坏片１、土師器・須恵系片10
8	57	48	3.6	土師器甕片１、須恵系坏片１
9	59	39	45.1	須恵器壺片１
10	33	32	35.8	土師器坏片３、甕片２、須恵器坏片１
11	42	31	6.3	須恵器壺片１、土師器片５
12	52	45	26.5	
13	36	28	28.8	
14	28	25	30.5	
15	24	24	16.6	
16	25	19	11.4	
17	31	28	19.1	土師器甕片３
18	22	16	19.4	
19	32	30	44.9	須恵器系坏片２
20	35	30	37.1	
21	31	22	13.2	
22	35	31	13.4	
23	28	21	9.2	
24	22	21	10.3	
25	26	22	34.2	
26	21	15	6.5	
27	30	25	16.5	
28	25	24	18.9	
29	33	31	26.1	
30	31	28	19.7	
31	32	26	14.0	
32	25	25	13.5	
33	31	28	22.9	
34	27	19	9.4	
35	45	42	39.4	
36	20	19	20.0	
37	33	23	36.3	

No	規模		深さ	その他
38	49	41	33.7	
39	24	20	27.9	
40	27	26	22.3	
41	40	22	11.8	
42	34	27	24.8	
43	29	25	16.4	
44	35	35	38.3	
45	48	45	32.2	
46	25	21	15.6	
47	29	22	9.7	
48	29	25	12.5	
49	25	21	19.0	
50	39	29	10.9	
51	39	31	24.4	
52	40	36	30.0	
53	45	45	35.3	
54	39	33	24.6	土師器甕片２
55	28	19	9.2	
56	31	22	18.8	
57	35	30	11.1	土師器甕片１
58	25	21	21.5	
59	24	19	14.6	
60	50	(25)	7.5	須恵器坏片２、須恵系坏片１
61	25	27	8.2	
62	29	27	13.6	
63	60	41	5.4	土師器甕片１
64	66	(30)	21.5	
65	37	37	35.6	
66	25	24	8.6	
67	30	25	11.8	
68	27	23	11.5	
69	28	22	8.0	
70	45	30	4.6	
71	35	(18)	11.5	
72	33	(18)	26.4	
73	44	39	34.1	
74	45	29	25.7	

（２）遺物

土師器・須恵器・須恵系土器片が中コンテナで２箱程出土した。石器類は８点、焼けた粘土塊が中コンテナ0.3箱出土している。土師器・須恵器・須恵系土器は10世紀前半が中心のようであるが、破片が多く詳細は不明である。粘土塊については、欠け口が風化して磨滅している。廃棄土坑としているものからよく出土している。粘土中にコマイの痕跡は認められないこと、壁の表面の平坦な面が見られないことから壁土に使われたものではないと考えた。加えてかなりの繊維が入っていることから、土器をつくる粘土ではないようだ。以上のことからカマドの壊れたものではないかと推察される。

13号土坑出土炭化物を㈱加速器研究所に依頼し年代測定を行った。その分析結果を記す。

13号土坑埋土出土炭化物１の ^{14}C年代は1150 ± 30yrBPである。暦年較正年代（１σ）は830～967cal ADの間に３つの範囲で示される。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C(‰)	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC(%)
IAAA-102633	1	遺構：13号土坑　層位：埋土	炭化物	AAA	**-24.81 ± 0.63**	**1,150 ± 30**	**86.67 ± 0.31**

試料の炭素含有率は70%を越える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。　[#4069]

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ歴年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-102633	1,150 ± 30	86.70 ± 0.29	1,149 ± 28	830calAD-837calAD(3.6%) 868calAD-902calAD(25.8%) 916calAD-967calAD(38.9%)	780calAD-792calAD(3.8%) 805calAD-974calAD(91.6%)

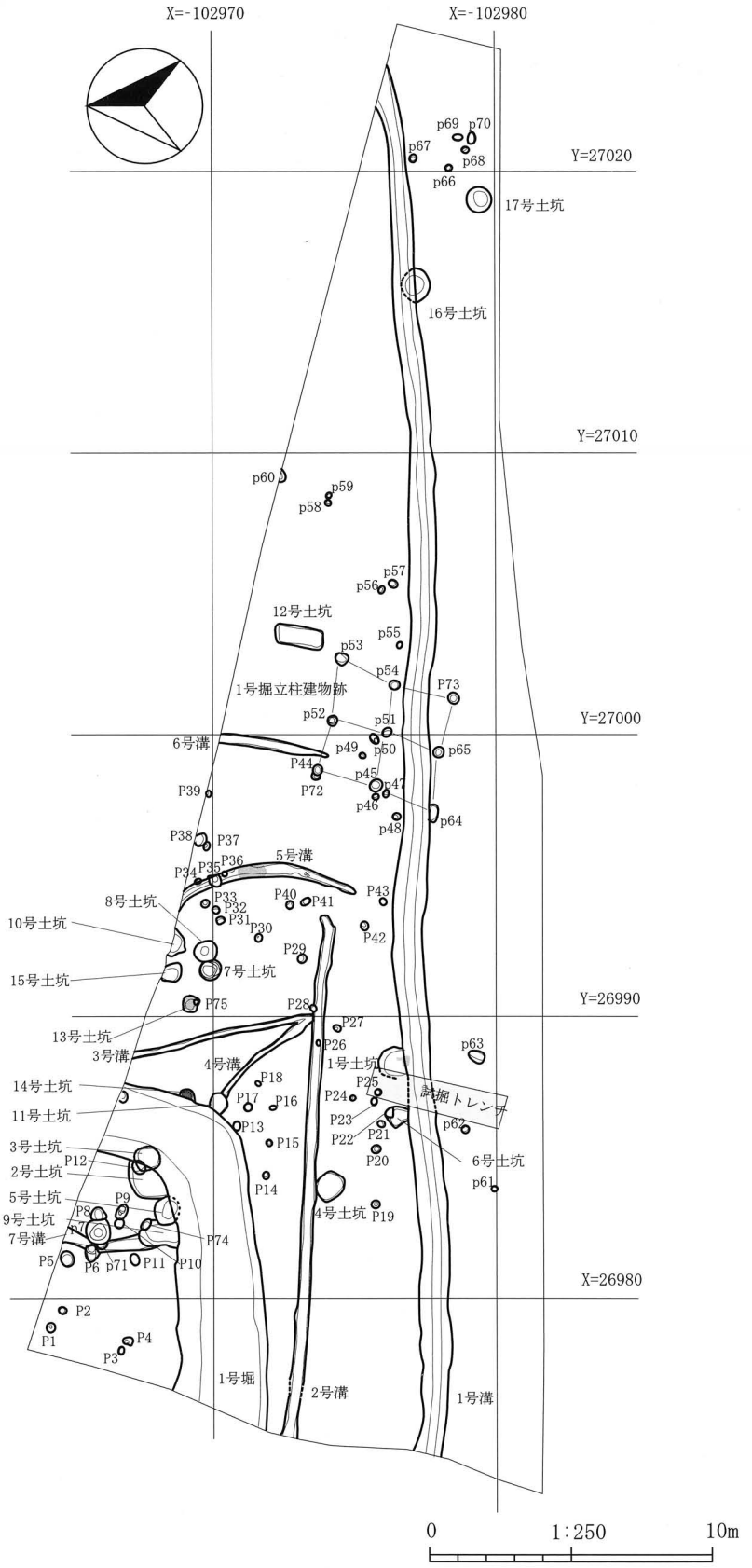
[参考値]

第4表　土師器・須恵器観察表

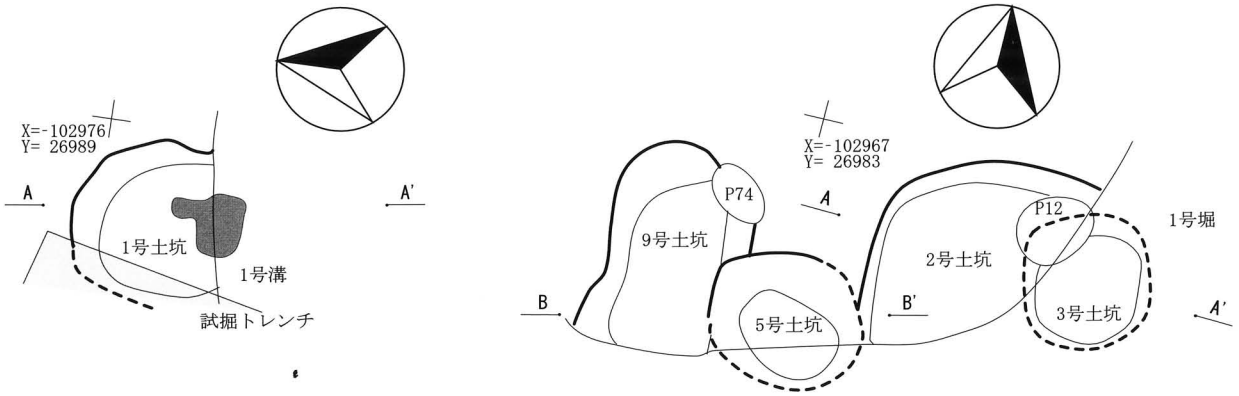
番号	出土地点	種別・器種・部位	外面の特徴	内面の特徴	その他
1	5号土坑埋土	土師器・甕・口縁から胴部	体部にハケメ、粘土貼付	ハケメ	非ロクロ
2	10号土坑埋土	須恵系・坏・口縁	ロクロナデ	ロクロナデ	
3	11号土坑埋土	土師器・坏・口縁	ロクロナデ	黒色処理・ミガキ	
4	13号土坑埋土	須恵系・坏・口縁	ロクロナデ	ロクロナデ	外面に浅い沈線
5	15号土坑埋土	須恵系・坏・口縁から底面	ロクロナデ	ロクロナデ	
6	13号土坑埋土	土師器・小甕・口縁から底部	粗いヘラナデか	粗いハケメ	
7	14号土坑埋土	土師器・甕・口縁から胴部	口縁部ヨコナデ、胴部の調整は不明。	ヘラナデ	
8	5号溝埋土	須恵系・坏・口縁から底面	ロクロナデ	ロクロナデ	
9	5号溝埋土	土師器・甕・口縁から胴部	ヘラナデ	ヘラナデか	ロクロ
10	5号溝埋土	土師器・甕・口縁から胴部	ロクロナデ、ヘラナデ	ヘラナデか	
11	5号溝埋土	土師器・坏・口縁	ロクロナデ	黒色処理・ミガキ	
12	5号溝埋土	須恵系・坏・口縁から底面	ロクロナデ	ロクロナデ	
13	10号土坑埋土	須恵器・大甕・胴部	タタキ	タタキ	
14	1号溝埋土	須恵器・大甕・胴部	タタキ	タタキ	
15	1号溝埋土	須恵器・壺・胴部	ロクロナデ	ロクロナデ	
16	1号溝埋土	須恵器・甕・胴部	タタキ		
17	13号土坑埋土	須恵器・甕・胴部	タタキ		

5　まとめ

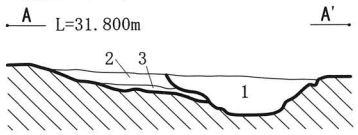
高殿Ⅱ遺跡の今回の調査区は遺跡の南東端にあたる。ここには主に平安時代の遺構・遺物と近世と見られる遺構が分布していた。平安時代では土坑、溝、掘立柱建物跡があり、土坑は土器片や粘土塊等を焼土・炭粒などと共に廃棄するためのものであった。掘立柱建物跡も柱間寸法にばらつきの目立つものであるため、食糧以外のものを保管する施設の可能性がある。近世と見られる遺構には堀跡がある。これはこの地域の特色といえる環濠屋敷の堀跡と考えられるが、遺構に伴う遺物がなく詳細な時期は不明である。なお、高殿Ⅱ遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。



第３図　高殿Ⅱ遺跡遺構配置図

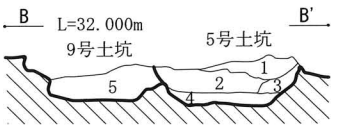


1号溝、1号土坑



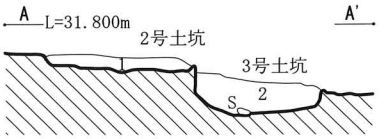
1号溝堆積土
1　10YR4/1　　褐灰色土 粘粘性・しまりややあり

1号土坑堆積土
2　10YR2/3　　黒褐色土　粘性・しまりややあり
炭化物粒・焼土粒少量（人為堆積）
3　10YR2/3　　黒褐色土　粘性・しまりややあり
焼土ブロック多量（人為堆積）



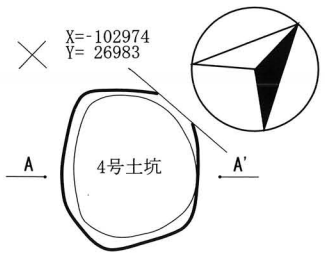
5号土坑堆積土
1　10YR3/4　　暗褐色焼土　粘性・しまり
ややあり　焼土ブロック多量
2　10YR3/3　　暗褐色土　粘性・しまり
ややあり　地山ブロック・焼土
ブロック極微量
3　10YR2/3　　暗褐色土　粘性・しまり
ややあり　地山ブロック多量
4　10YR3/3　　暗褐色土　粘性・しまり
ややあり　地山ブロック多量

9号土坑堆積土
5　10YR4/1　　褐灰色土　粘性・しまり
ややあり　地山ブロック多量

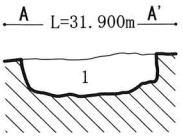


2号土坑堆積土
1　10YR2/2　　黒褐色土 粘性・しまり
ややあり　地山ブロック多量
炭化物粒微量（人為堆積）

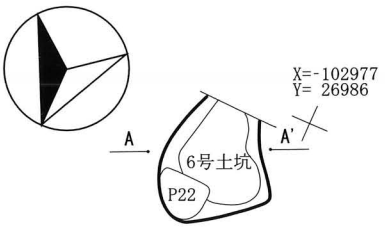
3号土坑堆積土
2　10YR3/2　　黒褐色土　粘性・しまり
ややあり　地山ブロック多量
炭化物粒微量（人為堆積）



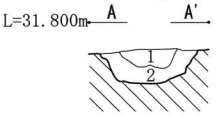
4号土坑



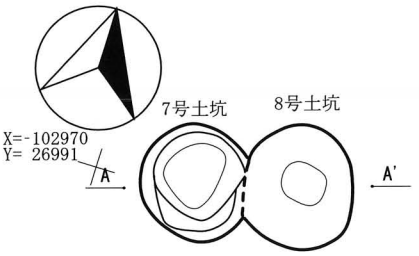
1　10YR3/2　　黒褐色土　粘性・しまり
ややあり　炭化物粒・焼土粒含む
土師器微細片多量（人為堆積）

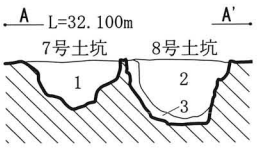


6号土坑



1　10YR2/2　　黒褐色土
粘性ややあり　しまり強
2　10YR2/2　　黒褐色土
粘性ややあり　しまり強
地山ブロック少量
（人為堆積の可能性あり）





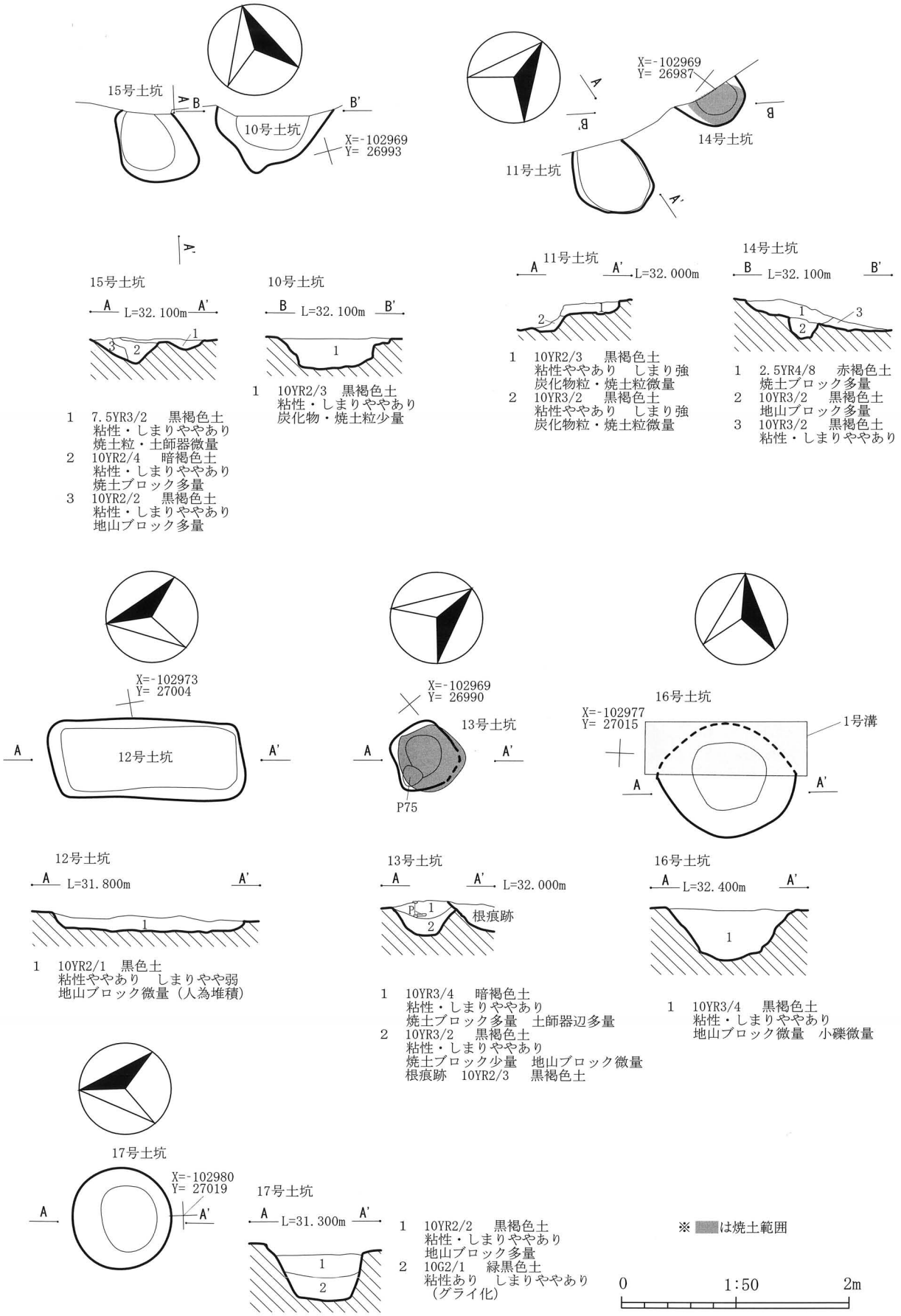
7号土坑堆積土
1　10YR2/3　　黒褐色土
粘性・しまりややあり
地山ブロック多量

8号土坑堆積土
2　10YR2/3　　黒褐色土
粘性・しまりややあり
地山ブロック少量
3　10YR3/2　　暗褐色土
粘性ややあり　しまり強
地山ブロック多量

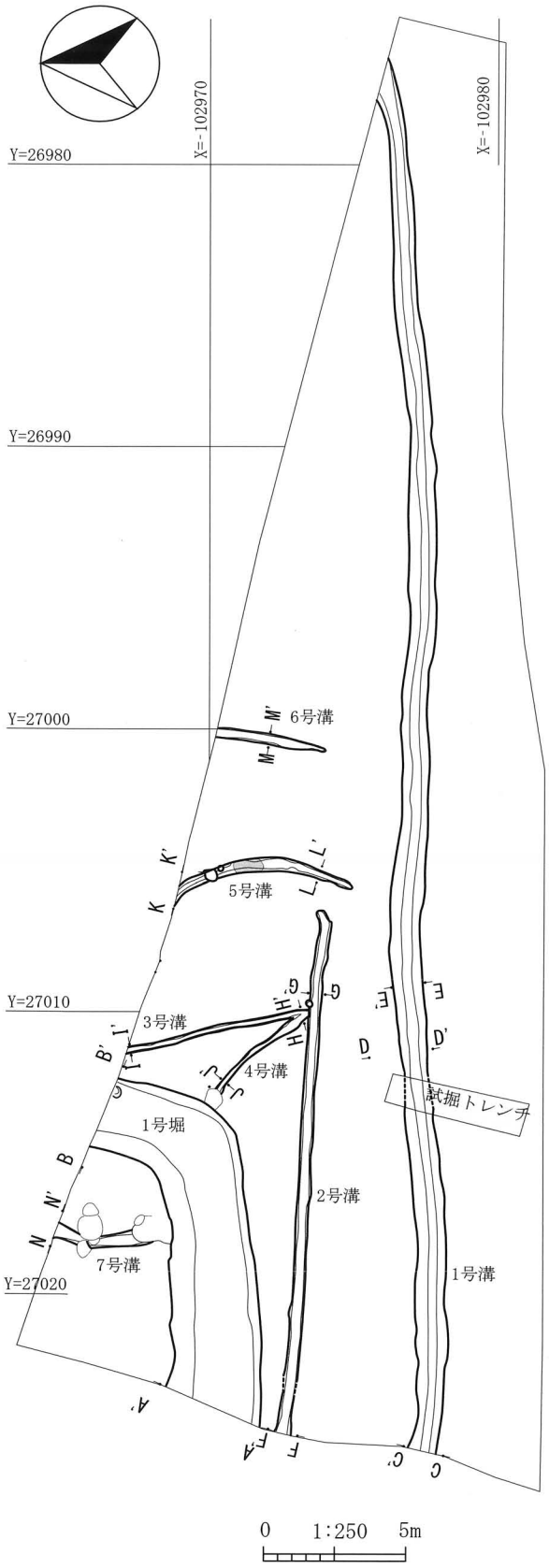
※ ■は焼土範囲

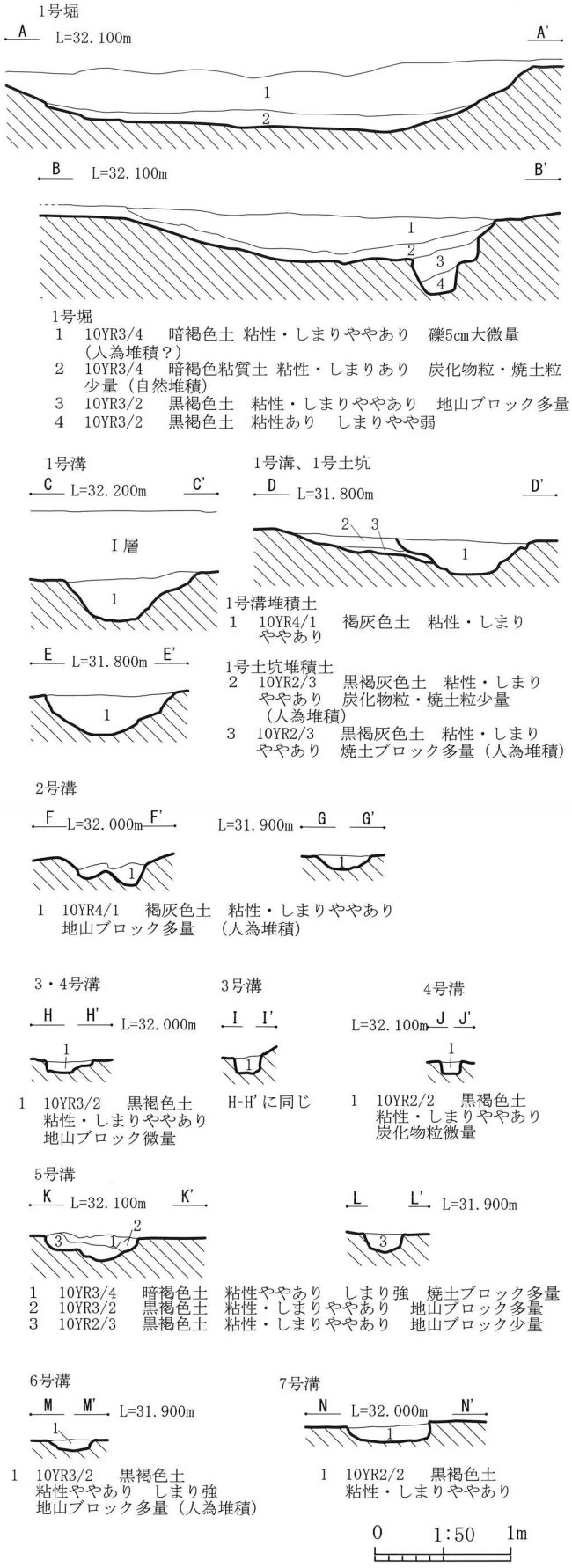
0　1:50　2m

第４図　１～９号土坑


15号土坑
10号土坑
X=-102969
Y= 26993
X=-102969
Y= 26987
14号土坑
11号土坑
15号土坑
L=32.100m
1　7.5YR3/2　黒褐色土
粘性・しまりややあり
焼土粒・土師器微量
2　10YR2/4　暗褐色土
粘性・しまりややあり
焼土ブロック多量
3　10YR2/2　黒褐色土
粘性・しまりややあり
地山ブロック多量
10号土坑
L=32.100m
1　10YR2/3　黒褐色土
粘性・しまりややあり
炭化物・焼土粒少量
11号土坑
L=32.000m
1　10YR2/3　黒褐色土
粘性ややあり　しまり強
炭化物粒・焼土粒微量
2　10YR3/2　黒褐色土
粘性ややあり　しまり強
炭化物粒・焼土粒微量
14号土坑
L=32.100m
1　2.5YR4/8　赤褐色土
焼土ブロック多量
2　10YR3/2　黒褐色土
地山ブロック多量
3　10YR3/2　黒褐色土
粘性・しまりややあり
X=-102973
Y= 27004
12号土坑
X=-102969
Y= 26990
13号土坑
P75
16号土坑
X=-102977
Y= 27015
1号溝
12号土坑
L=31.800m
1　10YR2/1　黒色土
粘性ややあり　しまりやや弱
地山ブロック微量（人為堆積）
13号土坑
L=32.000m
根痕跡
1　10YR3/4　暗褐色土
粘性・しまりややあり
焼土ブロック多量　土師器辺多量
2　10YR3/2　黒褐色土
粘性・しまりややあり
焼土ブロック少量　地山ブロック微量
根痕跡　10YR2/3　黒褐色土
16号土坑
L=32.400m
1　10YR3/4　黒褐色土
粘性・しまりややあり
地山ブロック微量　小礫微量
17号土坑
X=-102980
Y= 27019
17号土坑
L=31.300m
1　10YR2/2　黒褐色土
粘性・しまりややあり
地山ブロック多量
2　10G2/1　緑黒色土
粘性あり　しまりややあり
（グライ化）
※ は焼土範囲
0　1:50　2m

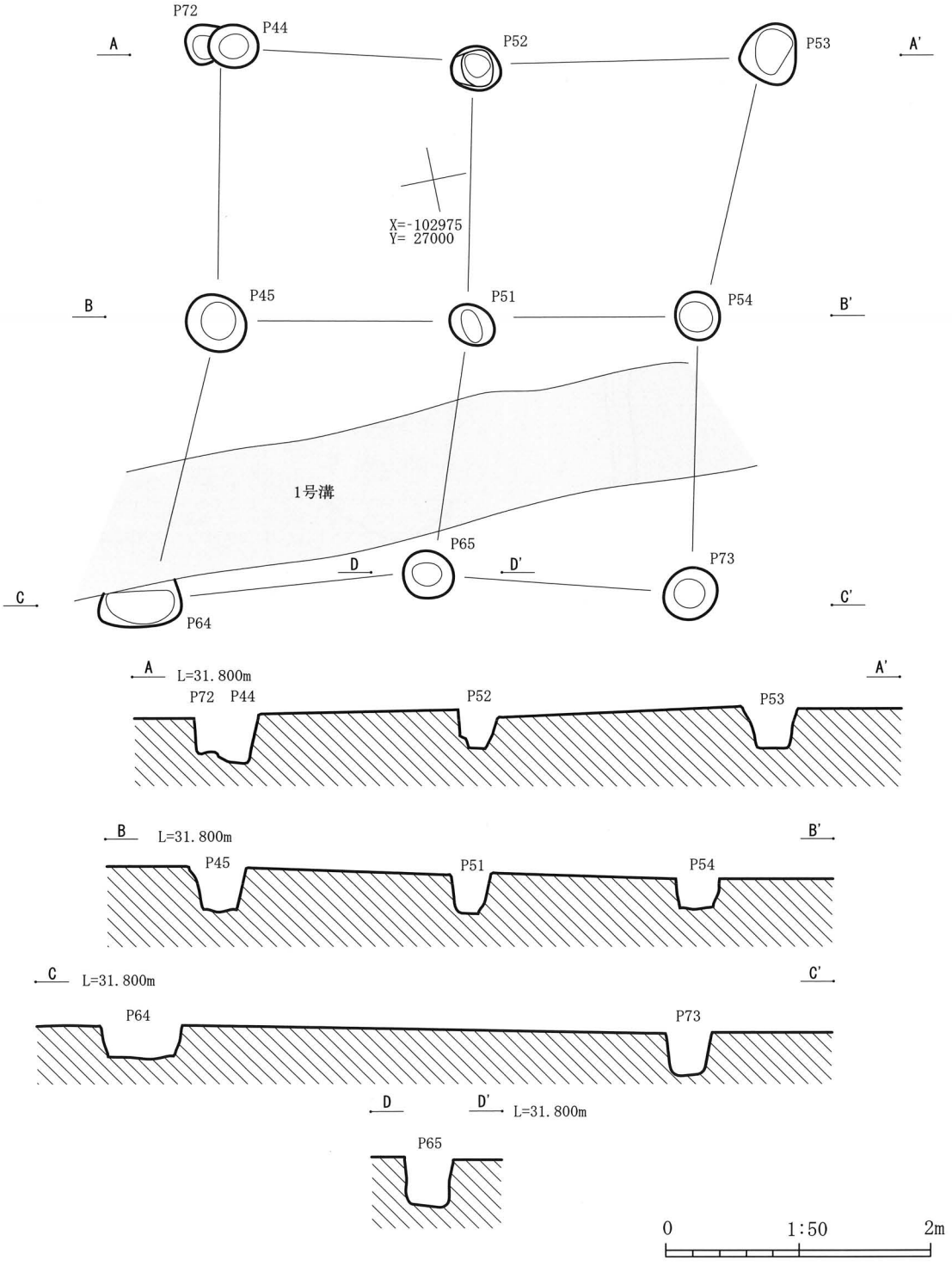
第5図　10～17号土坑


X=-102970
X=-102980
Y=26980
Y=26990
Y=27000
Y=27010
Y=27020
6号溝
5号溝
3号溝
4号溝
1号堀
2号溝
7号溝
1号溝
試掘トレンチ
0　1:250　5m

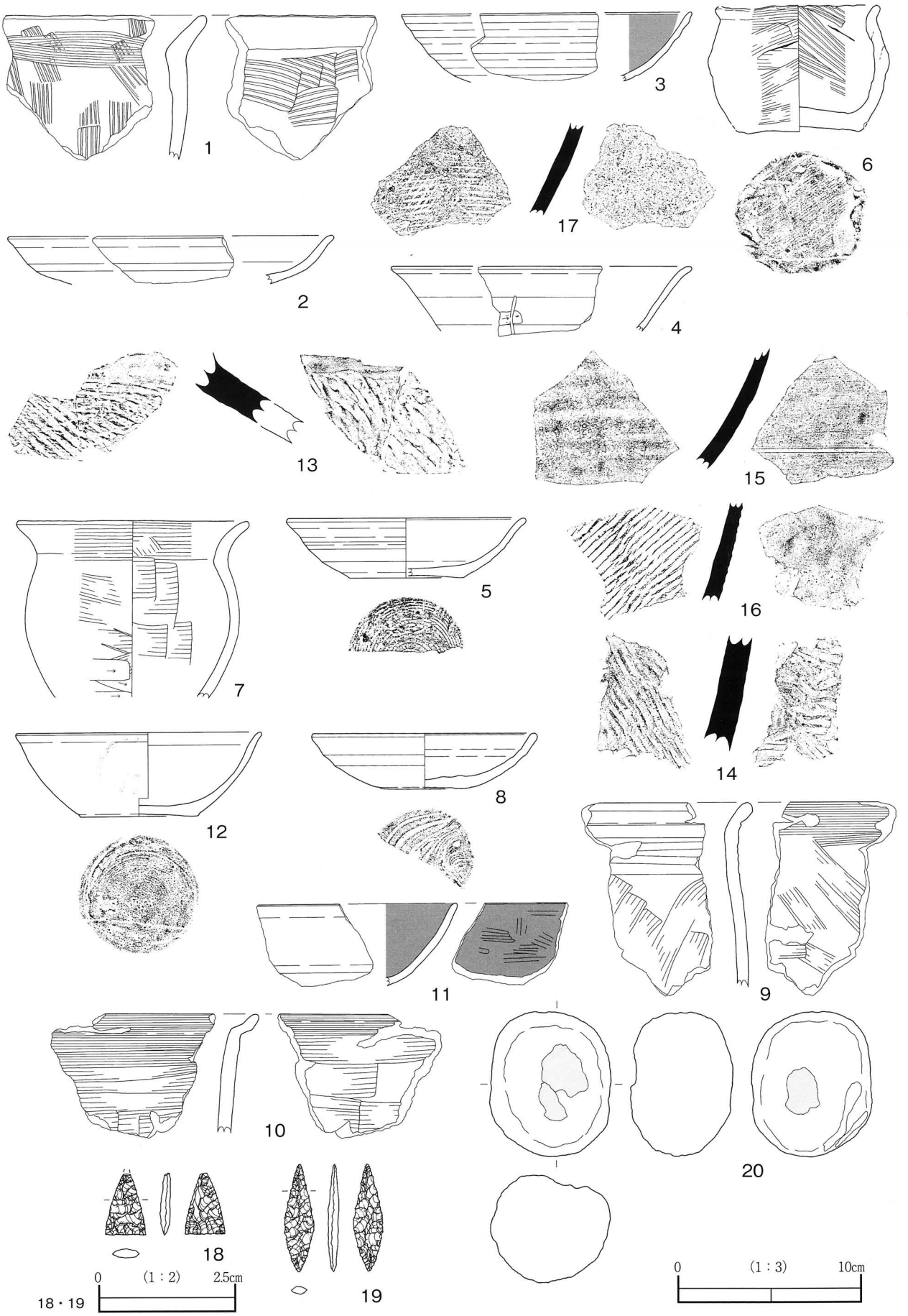

1号堀
A　L=32.100m　A'
B　L=32.100m　B'
1号堀
1　10YR3/4　暗褐色土 粘性・しまりややあり　礫5cm大微量（人為堆積？）
2　10YR3/4　暗褐色粘質土 粘性・しまりあり　炭化物粒・焼土粒少量（自然堆積）
3　10YR3/2　黒褐色土　粘性・しまりややあり　地山ブロック多量
4　10YR3/2　黒褐色土　粘性あり　しまりやや弱
1号溝
C　L=32.200m　C'
Ⅰ層
1号溝、1号土坑
D　L=31.800m　D'
1号溝堆積土
1　10YR4/1　褐灰色土　粘性・しまりややあり
E　L=31.800m　E'
1号土坑堆積土
2　10YR2/3　黒褐灰色土　粘性・しまりややあり　炭化物粒・焼土粒少量（人為堆積）
3　10YR2/3　黒褐灰色土　粘性・しまりややあり　焼土ブロック多量（人為堆積）
2号溝
F　L=32.000m　F'
L=31.900m　G　G'
1　10YR4/1　褐灰色土　粘性・しまりややあり　地山ブロック多量　（人為堆積）
3・4号溝
H　H'　L=32.000m
1　10YR3/2　黒褐色土　粘性・しまりややあり　地山ブロック微量
3号溝
I　I'
H-H'に同じ
4号溝
L=32.100m　J　J'
1　10YR2/2　黒褐色土　粘性・しまりややあり　炭化物粒微量
5号溝
K　L=32.100m　K'
L　L'　L=31.900m
1　10YR3/4　暗褐色土　粘性ややあり　しまり強　焼土ブロック多量
2　10YR3/2　黒褐色土　粘性・しまりややあり　地山ブロック多量
3　10YR2/3　黒褐色土　粘性・しまりややあり　地山ブロック少量
6号溝
M　M'　L=31.900m
1　10YR3/2　黒褐色土　粘性ややあり　しまり強　地山ブロック多量（人為堆積）
7号溝
N　L=32.000m　N'
1　10YR2/2　黒褐色土　粘性・しまりややあり
0　1:50　1m

第６図　１号堀、１～７号溝

1号掘立柱建物跡



第７図　１号掘立柱建物跡



第８図　出土遺物

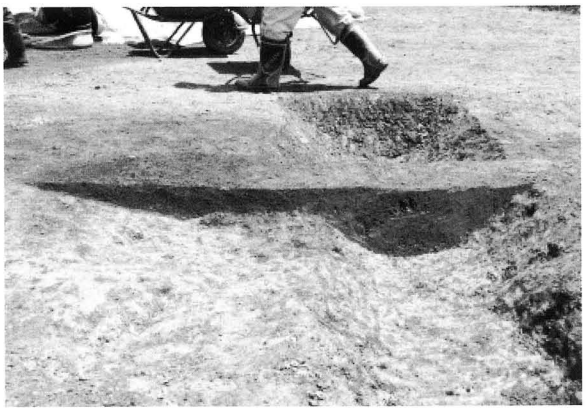
遺跡遠景（南東から）

遺跡近景（南から）
調査区は遺跡の南端にあたる。

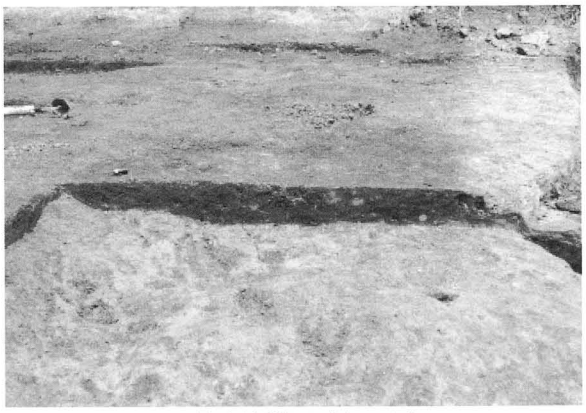
調査区近景、１号溝跡ほか
（西から）

写真図版１　遺跡遠景ほか

1号土坑平面（南から）

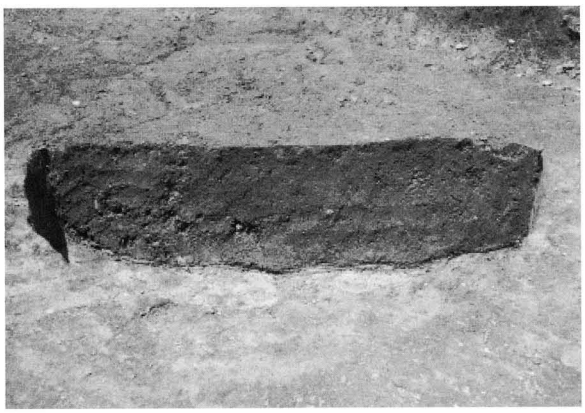

1号土坑・1号溝断面（西から）

2・3号土坑平面（南から）


2号土坑断面（南から）

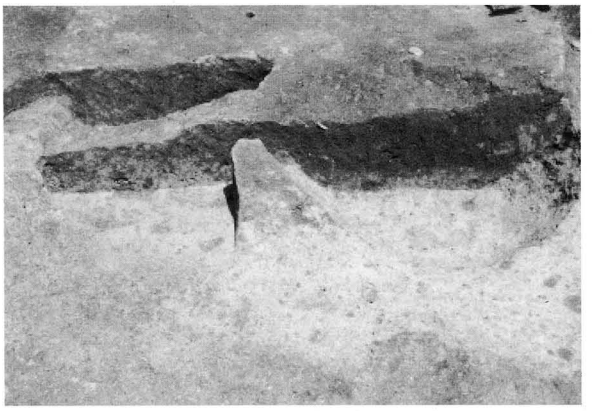
3号土坑断面（南から）

4号土坑平面（南から）


4号土坑断面（南から）

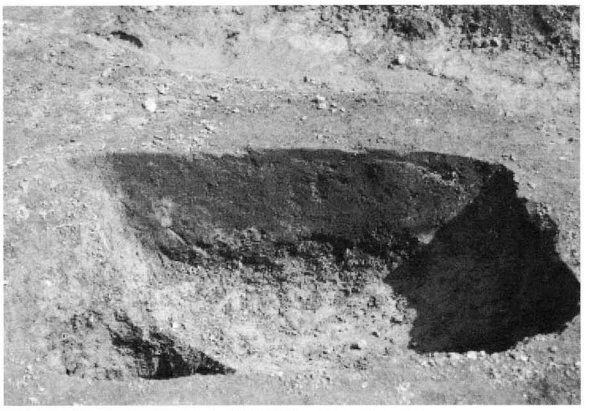
5号土坑平面（南から）

写真図版2　土坑（1）、溝（1）



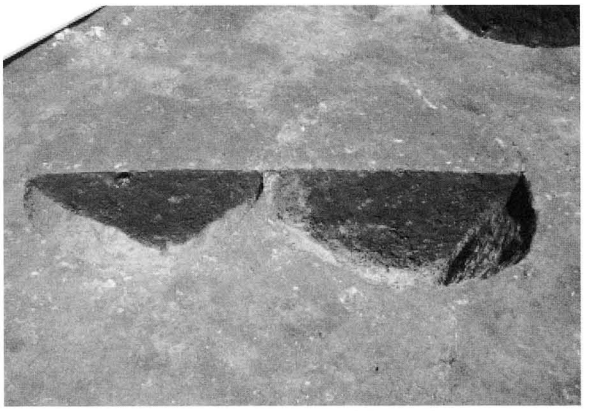
5・9号土坑断面（南から）

6号土坑平面（南から）



6号土坑断面（北西から）

7・8号土坑平面（南から）



7・8号土坑断面（南から）

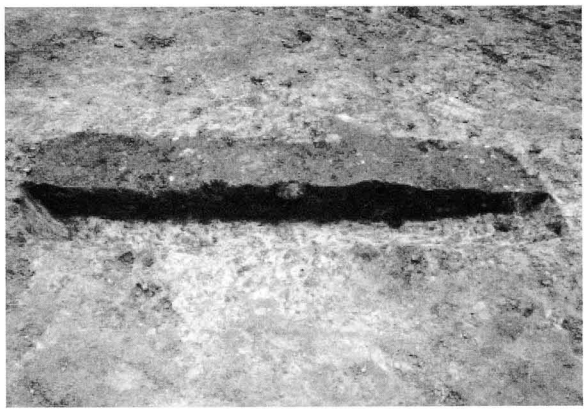
5・9号土坑平面（北から）

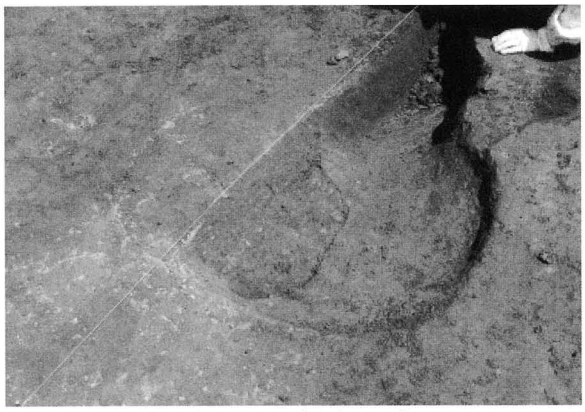
10号土坑断面（南から）

11号土坑断面（南から）

写真図版3　土坑（2）

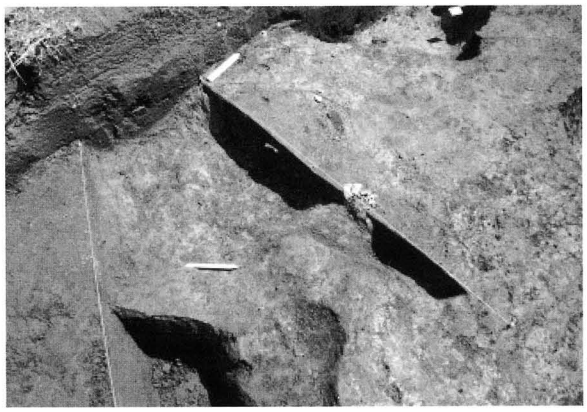
12 号土坑平面（西から）

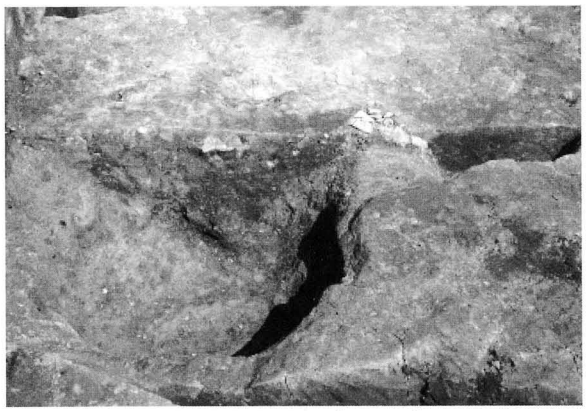

12 号土坑断面（西から）

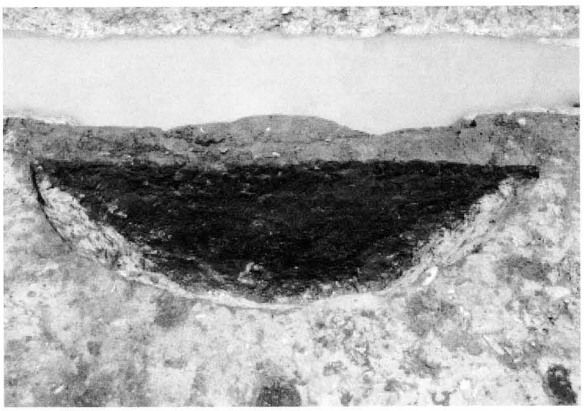

13 号土坑（南東から）

13 号土坑断面（南東から）

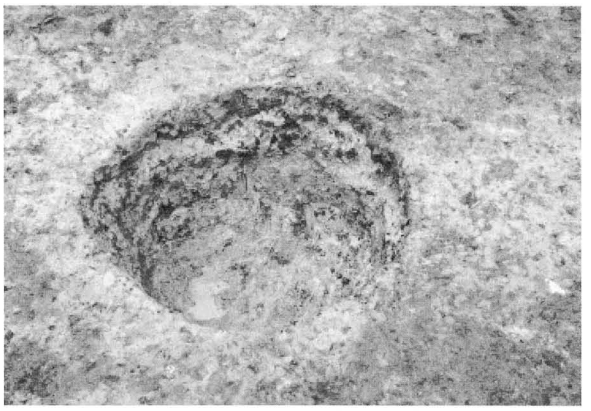
14 号土坑断面（西から）

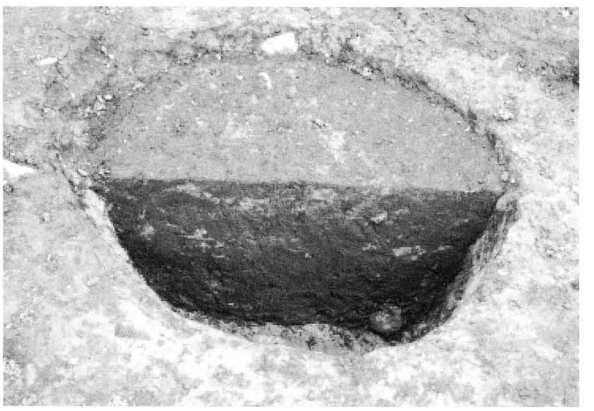

15 号土坑平面（西から）


15 号土坑断面（西から）

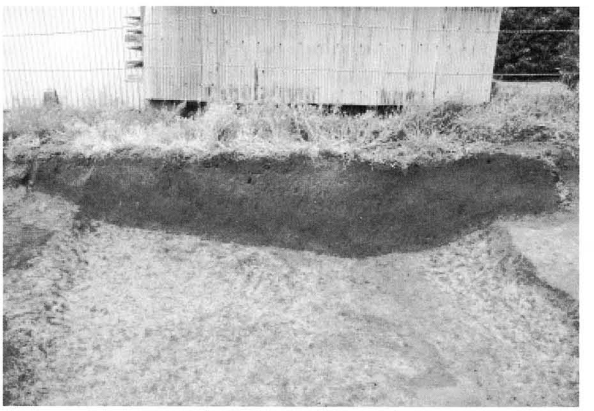

16 号土坑断面（南から）

写真図版４　土坑（３）

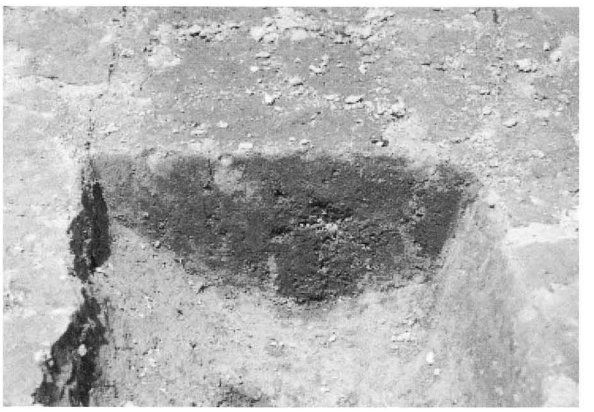

17号土坑平面（南から）

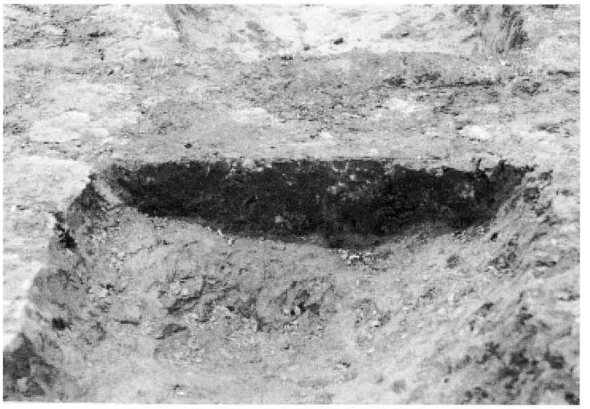

17号土坑断面（西から）

1号堀平面（西から）


1号堀断面（東から）

3・4号溝断面（南東から）

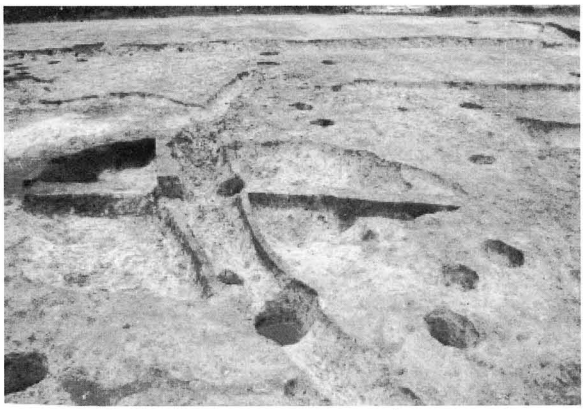

5号溝断面（南から）


6号溝断面（南から）

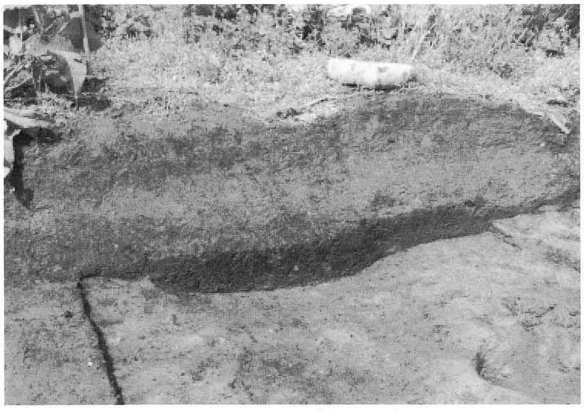
2号溝断面（東から）

写真図版5　土坑（4）、溝（2）

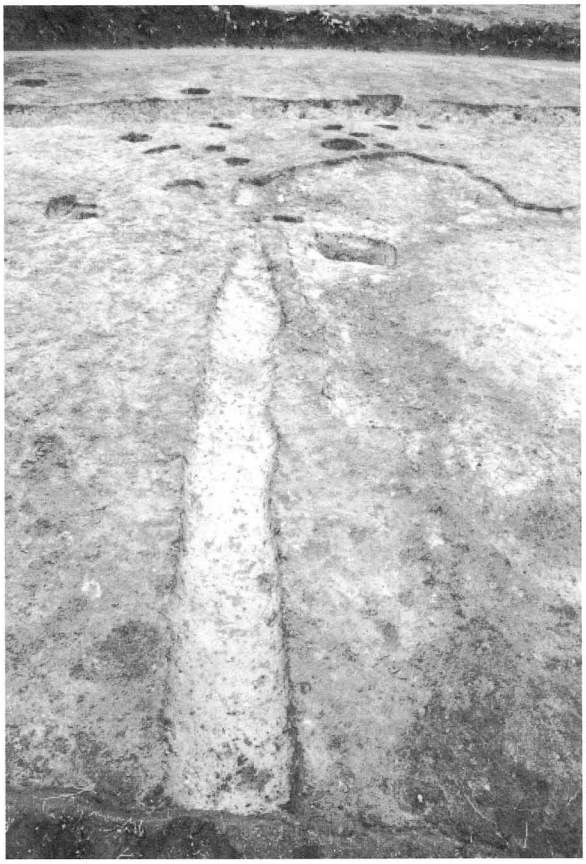
３・４号溝平面（北から）



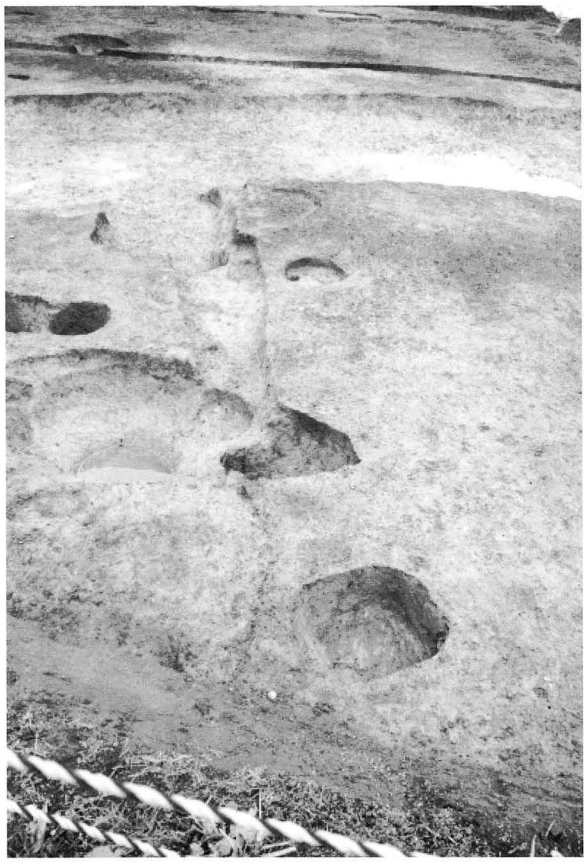
５号溝平面（北から）



７号溝断面（南から）



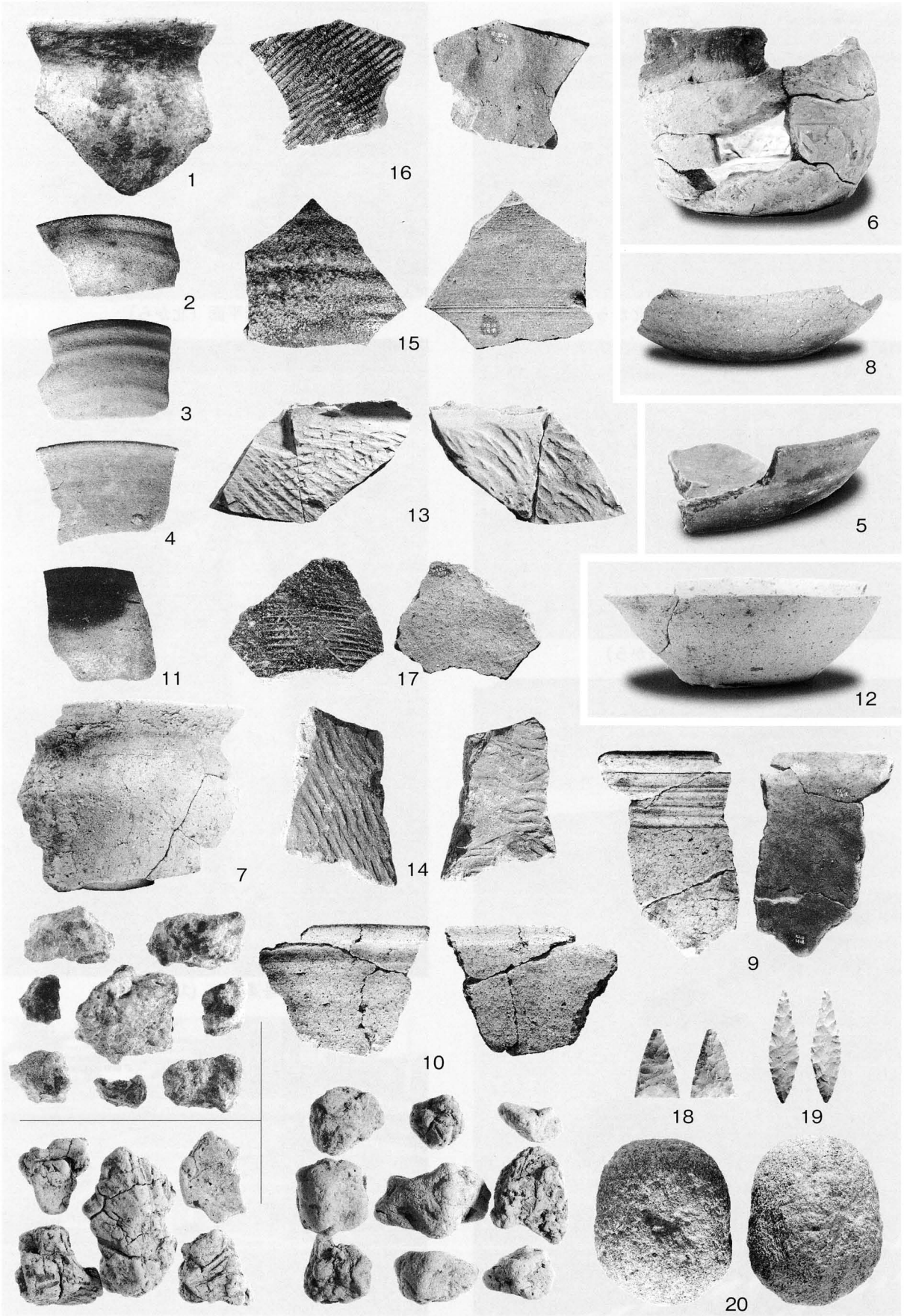
６号溝平面（北から）



７号溝平面（北から）

１号掘立柱建物跡（南から）

写真図版６　溝（３）、掘立柱建物跡



粘土塊　上：11 号土坑、下左：15 号土坑、下右：13 号土坑

写真図版７　出土遺物

Ⅱ　発掘調査概報

凡例

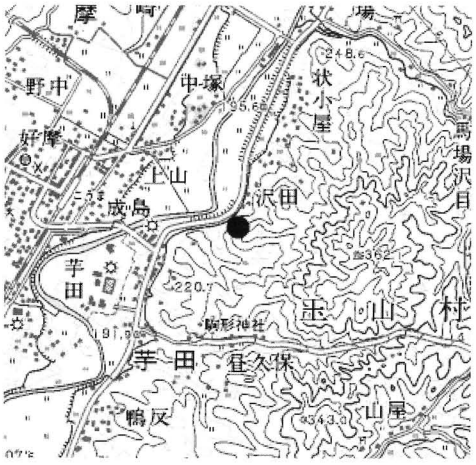
本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42 × 32 × 30cm

中コンテナ：42 × 32 × 20cm

小コンテナ：42 × 32 × 10cm

（5）芋田沢田Ⅳ遺跡（いもださわだ）　第２次調査



1:50,000　沼宮内

所　在　地：盛岡市玉山区芋田字沢田４－10ほか
委　託　者：国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事　業　名：一般国道４号渋民バイパス
発掘調査期間：平成22年５月６日～８月31日
調査終了面積：1,280㎡
調査担当者　村上　拓・北村忠昭
主要な時代　縄文

遺跡の立地

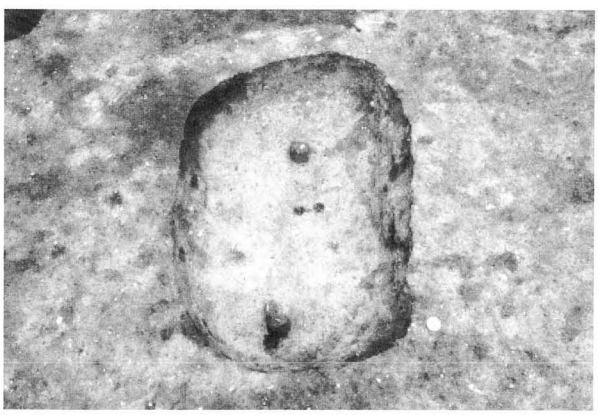
ＩＧＲいわて銀河鉄道好摩駅の東方約1.0km、北上川左岸の河岸段丘上に立地する。南北縁を段丘崖と沢に区切られた、西側に張り出す舌状の高台である。標高は214m前後。要調査範囲3,630㎡のうち昨年度未了分2,380㎡が対象で、今次1,280㎡を終了した。未了区は次年度以降継続調査の予定。

調査の概要

今次調査では縄文時代早期～前期初頭・中期末葉～後期前葉の竪穴住居跡31棟、住居状遺構18棟、炉跡26基、陥し穴状遺構３基、土坑66基、柱穴330個、立石１基、土器埋設遺構４基、遺物包含層600㎡等が検出された。これらのうちの一部は未精査であり次年度以降に再着手する。出土遺物は縄文土器大コンテナ11箱（早期中葉・後期初頭が中心）、石器大コンテナ13箱、土製品数点等である。

後期遺構面では、昨年度検出した環状配石遺構の下部を追加調査し、南側張り出し部の中心から楕円形墓壙を検出、石鏃の副葬が確認された。また環状配石の南北軸北端の礫の下位から埋設された小形鉢形土器が出土した。土器内部と掘り方には小礫及び砂が充填される。いずれも配石遺構本体との関係が濃厚とみられる。また、配石遺構と同時期と目される、黄色土敷き均しを伴う４本柱遺構が弧状に並んで検出された。昨年度来検出した黄色土集中地点や他の４本柱遺構を加えると、環状に分布する様子が看取される。同様の環状分布傾向は、フラスコ状土坑（墓壙に転用？）にも認められる。

早期の遺構面では、楕円形と略方形の住居跡が密に重複した状態で検出された。出土土器から早期中葉が中心とみられるが、個別の時期についてはさらに検討を要する。このうち楕円形の住居の一部では、壁の外周（或いは壁上端付近）に椀形（擂鉢形）の柱穴、床面壁際にも小ピットが巡る２重の柱穴配置が確認された。断面観察から壁柱は住居中心に向け内傾していた可能性が高いとみられる。



環状配石遺構下の墓壙

縄文時代早期の住居群

（6）芋田沢田Ⅵ遺跡（いもださわだ）

所　在　地：盛岡市玉山区芋田字沢田63－6ほか
委　託　者：国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事　業　名：一般国道4号渋民バイパス
発掘調査期間：平成22年4月5日～5月11日
調査終了面積：553㎡
調査担当者　北村忠昭・村上　拓
主要な時代　縄文・古代・中世・近世

1:50,000　沼宮内

遺跡の立地

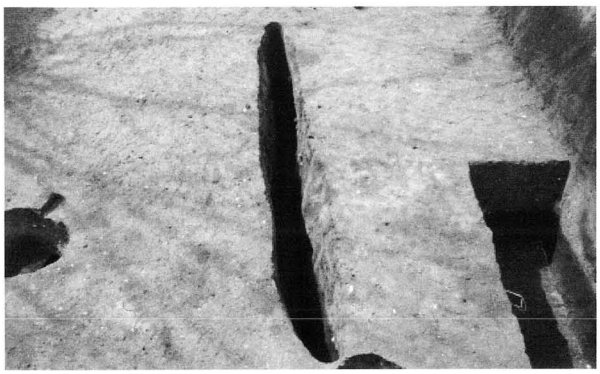
ＩＧＲいわて銀河鉄道好摩駅の東約1.2kmに位置し、姫神山から延びる小起伏山地の縁辺部、西向き斜面上に立地する。標高は203m前後で、調査前の現況は原野である。

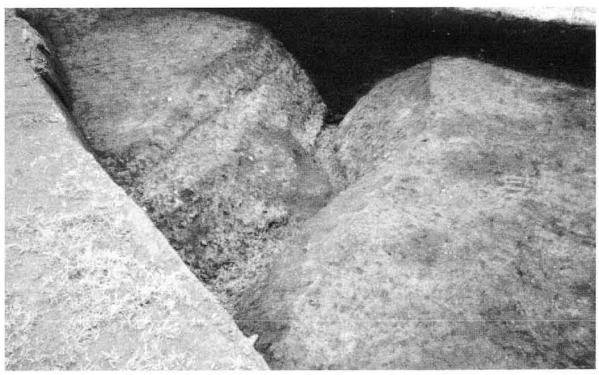
調査の概要

今回の調査では縄文時代の陥し穴状遺構１基、土坑１基、柱穴状土坑43個、平安時代の畠跡１ヶ所（約20㎡）、中世の堀跡１条、中世～近世のカマド状遺構３基、柱穴状土坑23個、時期不明の溝跡２条が検出された。出土遺物は縄文土器小コンテナ0.5箱、石器３点、須恵器１点、近世磁器１点である。遺跡の南西端に位置する今回の調査区は、縄文時代から近世まで断続的に利用されており、その中心となるのは狩猟場と利用された縄文時代と城館もしくは屋敷として利用された中世～近世の２時期である。

北側調査区全景（上が北）

南側調査区全景（上が東）


縄文時代の陥し穴状遺構


中世の堀跡

（7）向（むかい）Ⅲ遺跡　第２次調査

1:50,000　人首

所　在　地：遠野市綾織町下綾織第 31 地割 102 ほか
委　託　者：国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事　業　名：東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業
発掘調査期間：平成 22 年４月８日～７月２日
調査終了面積：7,213㎡
調査担当者　福島正和・羽柴直人
主要な時代　縄文・古代・中世

遺跡の立地

向Ⅲ遺跡は、JR釜石線二日町駅の南1.5kmに位置し、東から西へと流れる猿ヶ石川南岸の河岸段丘に位置する。遺跡は南から北へ緩やかに下る地形で、同時に調査区東端は沢地形となっている。昨年度の１次調査では遺跡西半を対象とし、今年度は遺跡東半を対象とした。調査前の状況は、調査区全面が水田として利用されており、周囲も水田に囲まれている。この水田の造成によって、微高地部分は削平され、微低地部分は盛土がなされる地形改変がなされていた。

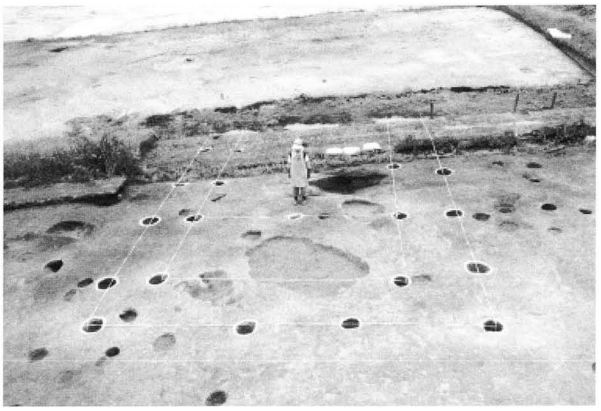
調査の概要

今回の調査で検出した遺構は、縄文時代と考えられる陥し穴状遺構17基・土坑４基、平安時代の竪穴住居跡３棟、中世と考えられる竪穴建物跡１棟・掘立柱建物跡14棟、時期不明の土坑15基である。出土した主な遺物は、縄文土器大コンテナ1.5箱、古代の土器0.5箱、中コンテナ0.5箱である。その他、砥石とみられる石製品３点、近世以降の陶磁器片が若干量出土している。

時代を追って遺跡を概観すると、縄文時代は狩猟活動域として利用されていたと考えられる。詳細な時期は、陥し穴より出土する遺物が皆無であるため不明である。陥し穴以外の土坑から出土した縄文土器は、早期末～前期初頭のものがみられ、調査区周辺にこの時期の居住域が存在することを示唆している。

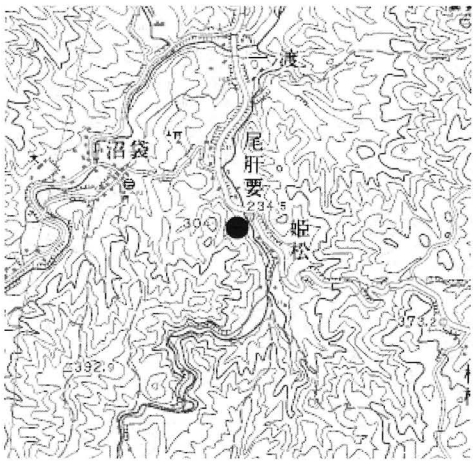
平安時代および中世には、居住域の一端として利用されたようである。平安時代の竪穴住居跡は、３棟とも方形の平面形態を呈し、１棟は焼失した状況が看取できた。出土した古代の土器は、大半が土師器である。中世の掘立柱建物跡は、時期を特定する遺物を欠いているものの、中世と考えられる竪穴建物跡が近在することや遺構の特徴から中世の所産であると推測される。

竪穴住居跡炭化材検出作業（南から）



掘立柱建物跡全景（西から）

（8）尾肝要（おかんよう）Ⅰ遺跡



1:50,000　岩泉

所　在　地：下閉伊郡田野畑村沼袋65番地ほか
委　託　者：国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名：三陸北縦貫道路尾肝要道路
発掘調査期間：平成22年4月8日～7月15日
調査終了面積：5,300㎡
調査担当者　丸山直美・北田　勲・溜浩二郎・西澤正晴
主要な時代　縄文・近世

遺跡の立地

本遺跡は田野畑村役場の西北西4.1kmに位置し、北流する姫松川左岸の北東向き緩斜面上に立地する。遺跡の標高は232～237m、調査前の現況は宅地および畑地である。

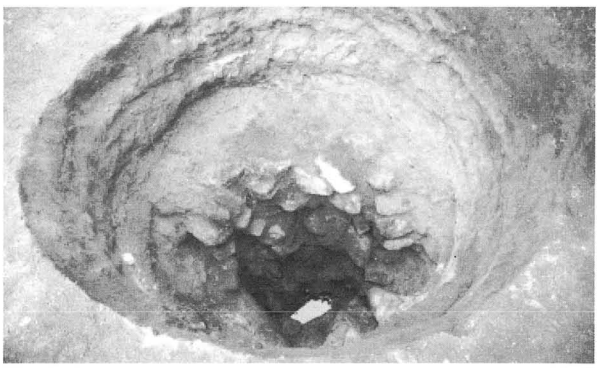
調査の概要

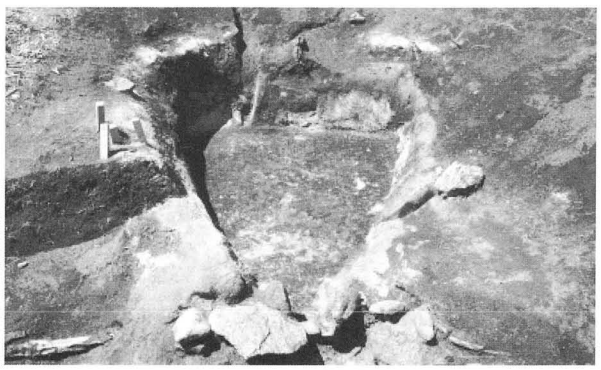
検出された遺構は、中世から近世にかけての工房跡１棟、近世の掘立柱建物跡５棟、礎石建物跡１棟、平場２箇所、井戸跡２基、土坑４基、墓壙１基、小柱穴154個、近代の炭窯跡１基である。遺物は大コンテナで１箱分出土しており、内訳は、縄文土器、石器、陶磁器、鉄製品、古銭、鉄滓、羽口等が各少量である。

調査の結果、北端部からは鉄生産に関連する工房跡が検出されており、当時の生業を知りうる資料が得られた。北側からは寛永通寶を伴う掘立柱建物や井戸等が検出され、居住域としての利用がなされていた事が判明した。

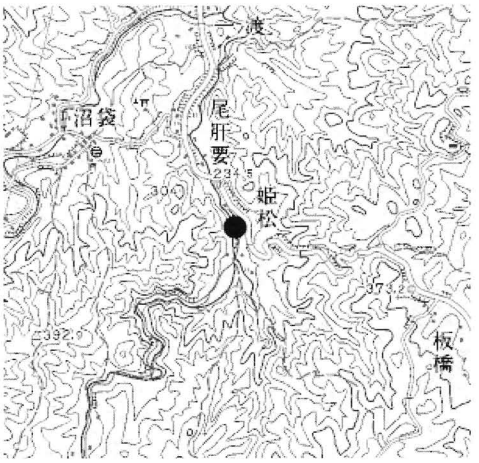
近世の掘立柱建物跡（北から）

近世の礎石建物跡（東から）


近世の井戸跡（西から）


近代の炭窯跡（北東から）

（9）姫松（ひめまつ）Ⅰ・Ⅱ遺跡



1:50,000　岩泉

所　在　地：下閉伊郡田野畑村沼袋72・69番地ほか
委　託　者：国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名：三陸北縦貫道路尾肝要道路
発掘調査期間：平成22年4月8日～7月15日
調査終了面積：姫松Ⅰ 3,000㎡・姫松Ⅱ 2,400㎡
調査担当者　濱田　宏・北田　勲・菅野　梢
主要な時代　縄文

遺跡の立地

姫松Ⅰ・Ⅱ遺跡は田野畑村役場の西北西約4kmの姫松川沿いに位置し、高森山から延びる小起伏山地の縁辺部、南東向き緩斜面に立地する。標高は237～241m、調査前の状況は山林・荒地である。これと併行して調査した尾肝要Ⅰ遺跡とは後者の北西側で隣接する。

調査の概要

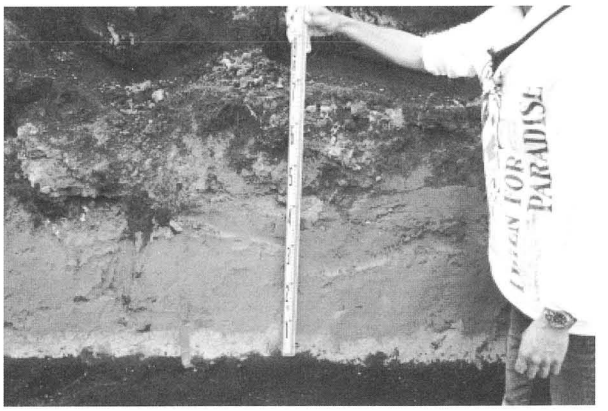
二つの遺跡の境界は調査区中央部の埋没沢付近にあるが、あまり明瞭でない。ともに表土下深さ1m前後に、縄文時代前期中ごろの降下と言われる十和田中掫テフラの二次堆積層が観察され、その厚さは最大で50cmに及んだ。姫松Ⅱ遺跡では、このテフラ下の黒色土層から表裏に縄目をもつ土器片が1点出土している。

姫松Ⅰ遺跡の検出遺構は、縄文時代の土坑7基、近世に属する掘立柱建物跡1棟、柱穴列2列、柱穴状土坑73個である。土坑の遺構確認面は、すべて先のテフラよりも下層であることから、縄文時代前期を含むそれ以前の土坑群と考えられる。なお、姫松Ⅱ遺跡からは遺構は検出されなかった。

姫松Ⅰ遺跡の出土遺物は、柱穴から出土した寛永通寶16枚のほか、縄文土器5点、石鏃1点、石器剥片1点、クルミと思われる炭化種子4点である。姫松Ⅱ遺跡では、既述した縄文条痕文系土器のほかもう1点の縄文土器片と石器剥片が2点出土した。

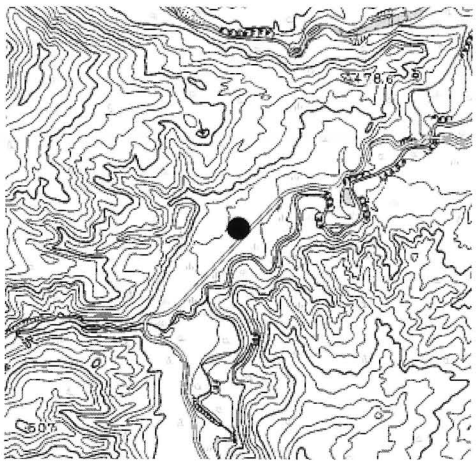
遺跡周辺では、予てから近世・近代の鉄山跡の存在が言われており、今回検出した建物跡や柱列、柱穴状土坑の一部がそれに関連する遺構の可能性がある。

縄文時代前期以前の土坑



テフラの堆積状況

(10) 大平野（おおだいらの）Ⅱ遺跡



1:50,000　焼石岳

所　在　地：奥州市胆沢区若柳字大平野１－１ほか
委　託　者：国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所
事　業　名：胆沢ダム建設事業（大平野地区）
発掘調査期間：平成22年４月12日～９月30日
調査終了面積：7,300㎡
調査担当者　川又　晋・小林弘卓
主要な時代　縄文

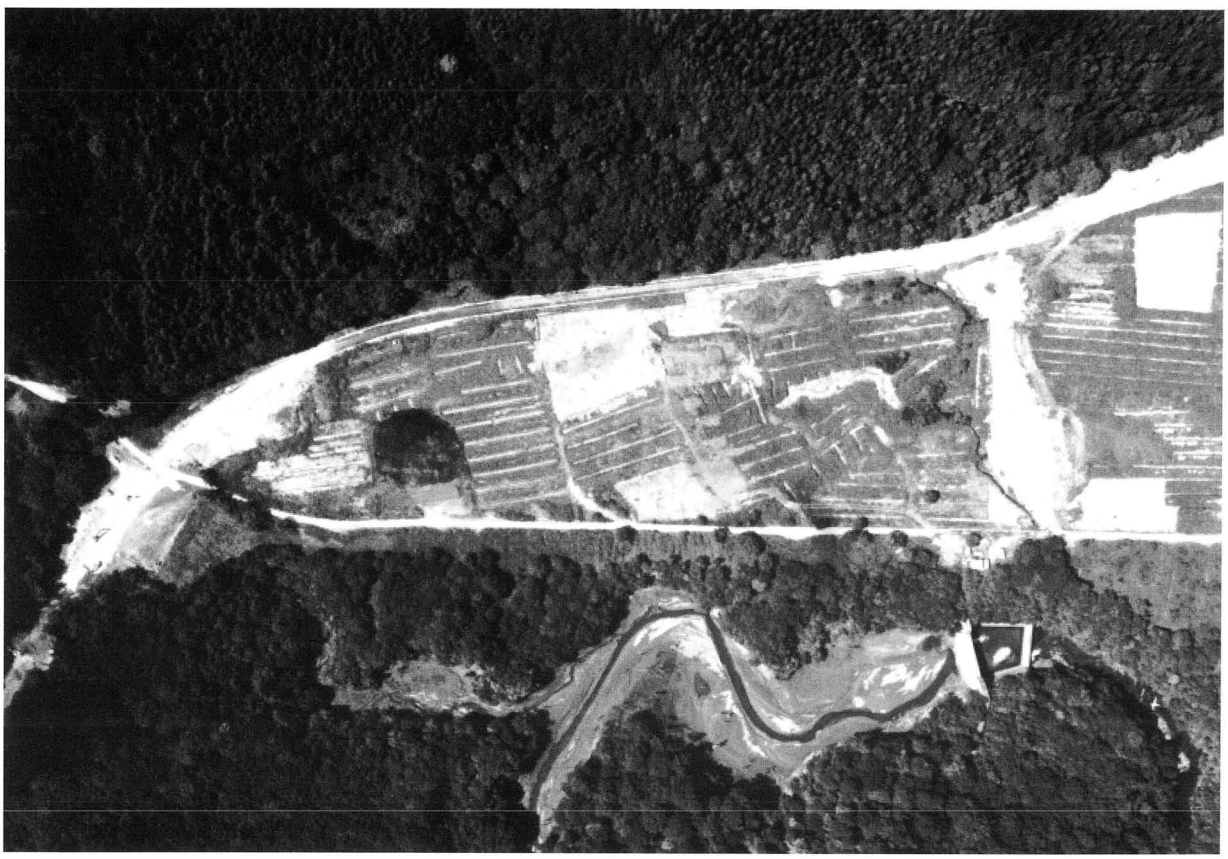
遺跡の立地

大平野Ⅱ遺跡は、奥州市役所胆沢総合支所の南西約18kmに位置する。胆沢川の支流、前川左岸の段丘上に立地し、標高は360m前後である。今年度は５年目の調査で、遺跡範囲の西側部分を調査した。

調査の概要

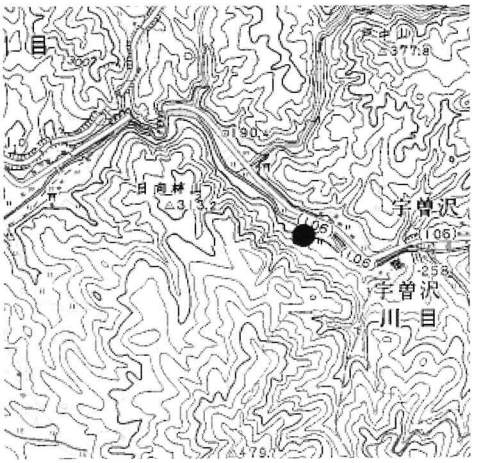
検出した遺構は、縄文時代の竪穴住居跡１棟、土坑33基、柱穴状土坑21個、焼土３基、土器埋設遺構１基である。竪穴住居跡は、複式炉を持つ。

出土した遺物は、縄文土器（早期・中期・後期・晩期）大コンテナ４箱、石鏃27点、石匙26点、石錐７点、削・掻器49点、打製石斧１点、台石４点、石皿３点、磨石１点、凹石９点である。遺物は、遺構外出土の割合が多い。



平成22年度調査区全景（直上から）

(11) 小屋野（こやの）遺跡　第２次調査



1:50,000　盛岡・日詰

所　在　地：盛岡市川目第５地割 122－82 ほか
委　託　者：盛岡広域振興局土木部簗川ダム建設事務所
事　業　名：簗川ダム建設事業
発掘調査期間：平成 22 年７月 20 日～ 11 月 17 日
調査終了面積：6,030㎡
調査担当者　濱田　宏・丸山直美・菅野　梢
主要な時代　縄文

遺跡の立地

本遺跡は盛岡市の東方、JR 盛岡駅の南東約9.2kmに位置し、簗川左岸の河岸段丘上および丘陵から延びる小規模な扇状地内に立地する。標高は190～215m、調査前の状況は山林である。今年度は、昨年未了となった2,920㎡を含む6,030㎡の第二次調査を実施した。

調査の概要

昨年度の調査成果から、遺構は調査区北東部の緩斜面に存在するものと予想されたが、その比較的狭い範囲に縄文時代後期中葉から後葉を主体とする集落跡が確認された。

検出遺構は、縄文時代後期の竪穴住居跡７棟、晩期１棟、土器埋設遺構１基、炉跡２基、土坑45基、陥し穴状遺構３基、焼土遺構22基、柱穴状土坑82個、集石５箇所である。遺構検出面はほとんどが最終面の褐色土層で、晩期の竪穴住居跡だけはそれよりも上位の黒褐色土層中で検出している。土坑には、貯蔵用と思われるフラスコ形土坑や、内部に礫を伴う墓壙の可能性があるものなども含まれる。集石に関しては、いずれも扇状地の扇央部で検出されたものであるが、そのほとんどが角礫であることから人為的に配されたものではない可能性がある。

出土遺物は、遺構の時期と同じ縄文時代後期中葉から後葉を主体とし、中期後半から晩期中葉までの土器がみられる。出土量は土器大コンテナ24箱、石器同４箱、土偶1点、円盤状土製品1点、土玉２点、ミニチュア土器10点などで、土器に比べ全体的に石器が少ない傾向が認められた。

今後は、同じ川目地区にある川目Ａ・川目Ｃ遺跡、戸仲遺跡などとの関連について、遺構・遺物の両面から考察していきたい。

拡張された縄文時代後期の竪穴住居跡

土坑内の出土土器

(12) 高畑（たかばた）遺跡

1:50,000　矢幅

所　在　地：紫波郡矢巾町大字下矢次第４地割151番地ほか
委　託　者：盛岡広域振興局農政部農村整備室
事　業　名：経営体育成基盤事業下矢次地区
発掘調査期間：平成22年５月６日～７月２日
調査終了面積：2,980㎡（本調査2,460㎡、確認調査520㎡）
調査担当者　溜　浩二郎・西澤正晴
主要な時代　縄文・古代・近世

遺跡の立地

高畑遺跡は矢巾町役場の北約2.1kmに位置し、岩崎川によって開析された砂礫段丘上の微高地に立地する。標高は114～116m、調査前の状況は農道・水田・畑地等である。

調査の概要

調査区は南北４箇所に分かれる。北端の調査区では遺構・遺物は確認されなかったが、それ以外の調査区では縄文時代～近世までの遺構・遺物が確認されている。

検出遺構は、古代が土坑12基、溝１条、近世が掘立柱建物跡３棟、墓壙12基、溝３条、柱穴状土坑15個である。その他に時期不明の溝１条、土坑２基が見つかっている。

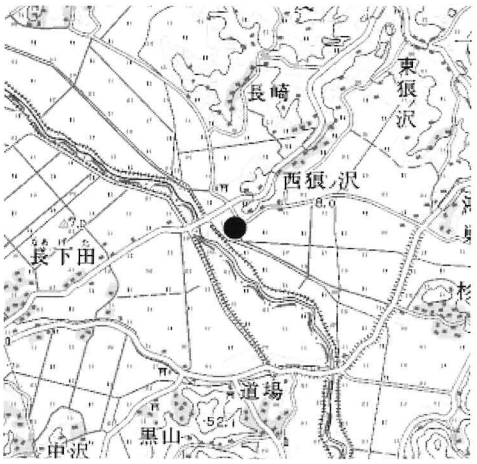
出土遺物は、縄文土器、土師器・須恵器が大コンテナで２箱、近世以降の陶磁器が小コンテナで１箱、墓壙からは古銭41点、煙管の吸口１点、鉄製品１点、他に釘等が出土している。今回の調査で、縄文・古代・近世以降の遺構・遺物が確認され、古来より、断続的に生活の場として利用されていたことが判明した。古代の土器は９世紀前半代を中心とするもので、本遺跡から南東の位置にある徳丹城との関連が考えられる。近世末～近代は溝・掘立柱建物跡・墓壙があり、居住に利用された場所であったことが判明した。

調査区全景

９世紀前半代の溝

近世の掘立柱建物跡

(13) 石崎貝塚（いしざきかいづか）（基幹農道整備事業関連）



1:50,000　若柳

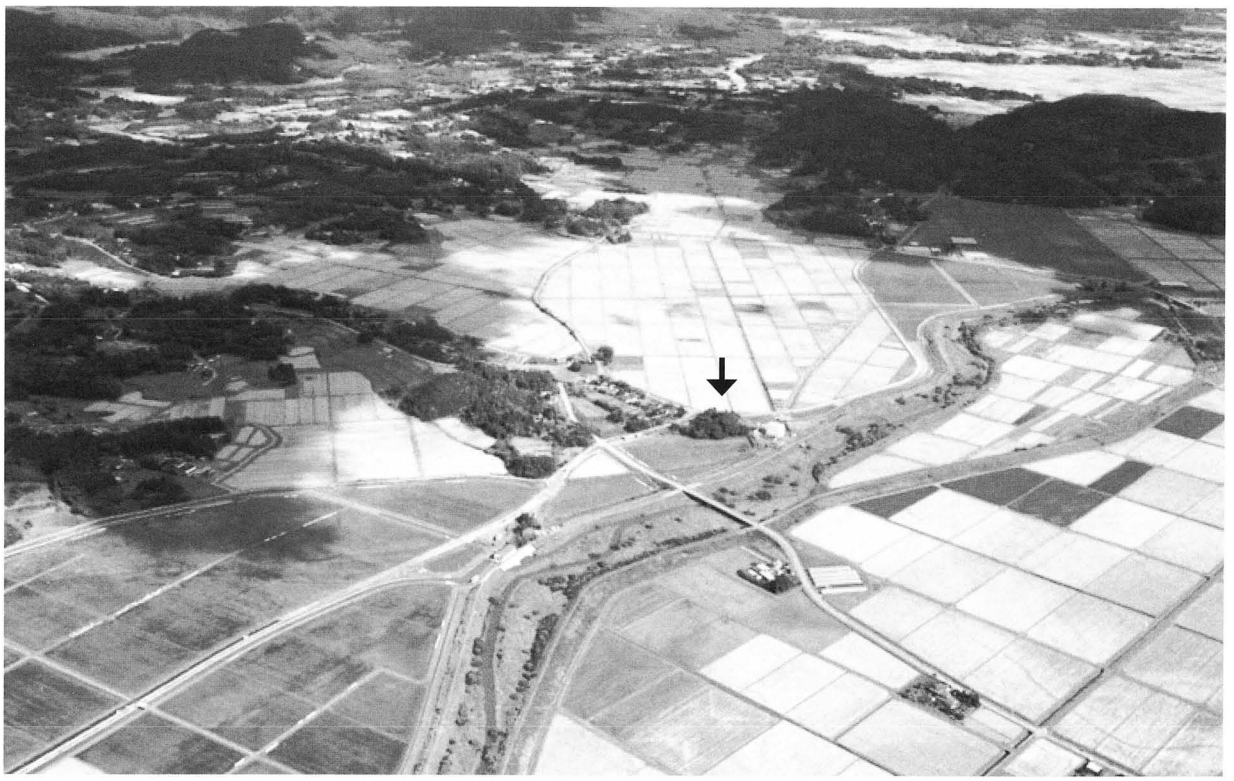
所　在　地：一関市花泉町永井字西狼ノ沢17－1ほか
委　託　者：県南広域振興局農政部一関農林整備センター
事　業　名：基幹農道整備事業夏川第３期地区
発掘調査期間：平成22年７月５日～９月21日
調査終了面積：1,620㎡
調査担当者　西澤正晴・溜　浩二郎
主要な時代　縄文・平安

遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線油島駅より南東約3.3kmに位置し、仙北低地帯の北縁に形成された樹枝状に張り出す丘陵先端に立地する。調査地の標高は頂部で10m前後、調査前の現況は水田・畑地である。

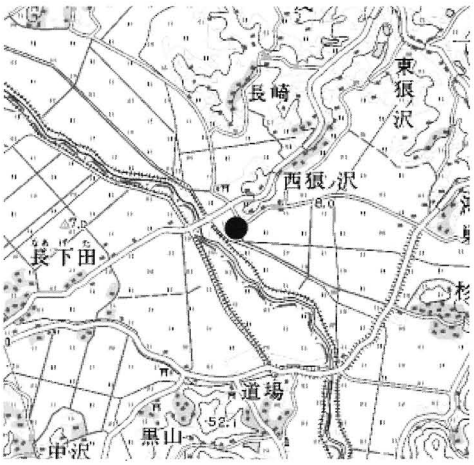
調査の概要

調査区は、丘陵を南北に横断しているため、地形上斜面部２箇所、頂部１箇所に分けられる。北側斜面から低地にかけて遺物包含層を確認している。丘陵頂部は、開田時にかなり大規模に削平されており、土坑１基、柱穴14個などわずかな遺構のみ残存していた。南側斜面からは、焼土４基、土坑３基が確認され、このうち２基からは古代の遺物が出土した。また、斜面下の低地からは灰白色火山灰が層状に広がっていることを確認している。遺物は包含層から出土した縄文土器が中心で、一部古代の土器が出土している。また、貝片や獣骨・魚骨などの動物遺存体等も採取している。遺物の総量は大コンテナ20箱である。



石崎貝塚遠景写真（南西から）

(14) 石崎貝塚（いしざきかいづか）（経営体育成基盤事業関連）



1:50,000　若柳

所　在　地：一関市花泉町永井字西狼ノ沢17－1ほか
委　託　者：県南広域振興局農政部一関農村整備センター
事　業　名：経営体育成基盤整備事業（夏川第3期地区）
発掘調査期間：平成22年9月1日～9月21日
調査終了面積：293㎡
調査担当者　西澤正晴・溜　浩二郎
主要な時代　縄文

遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線油島駅より南東約3.3㎞に位置し、仙北低地帯の北縁に形成された樹枝状に張り出す丘陵上の先端部に立地する。調査区の標高は丘陵頂部で10m前後である。調査前の現況は水田・畑地等である。

調査の概要

調査は、基幹農道事業分と並行して行われた。丘陵頂部を中心に調査区が設定されている。この頂部は調査前の現況は水田であったため、開田時に数m単位で削平されていることが聞き取りで判明した。本事業関連の範囲からは、大型の土坑7基を確認している。遺物は遺構内からは出土せず、時期は明確ではない。そのほかわずかに石器や縄文土器片が遺構周辺から出土している。

調査区全景（上が南）

(15) 国分（こくぶん）遺跡

1:50,000　水沢

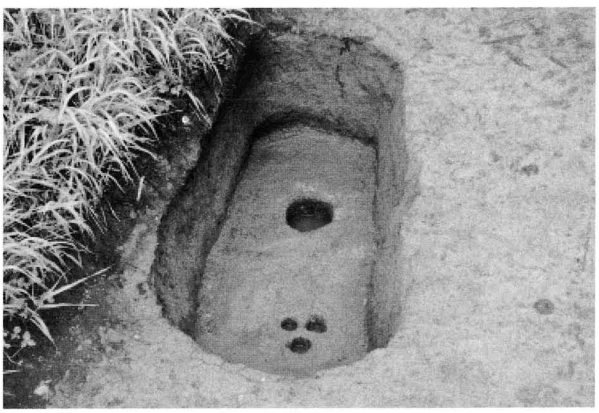
所　在　地：奥州市胆沢区南都田字上広岡 445 番地ほか
委　託　者：県南広域振興局農政部農村整備室
事　業　名：経営体育成基盤整備事業 都鳥２期地区
発掘調査期間：平成 22 年６月 18 日～８月 31 日
調査終了面積：1,814㎡
調査担当者　米田　寛・杉沢昭太郎
主要な時代　中世末～近世初頭

遺跡の立地

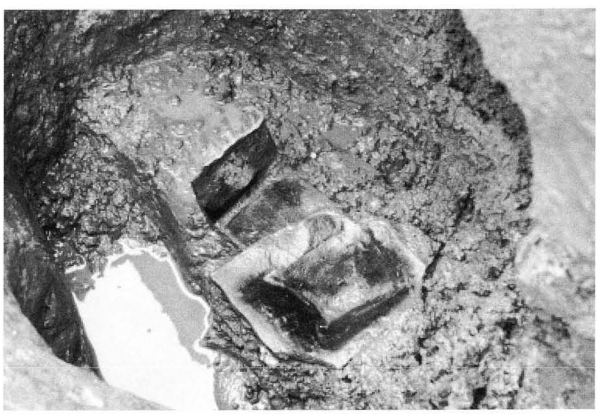
奥州市立南都田小学校の南約1.2kmに位置する。調査前の遺跡登録範囲の現況は、宅地、水田であり、今回の調査区は遺跡登録範囲の北東部の水田範囲に設定された。本遺跡は、標高83～87mの胆沢扇状地の福原段丘面上に位置する。国分遺跡の北端にあたる段丘崖上からは、北側の南都田小学校をはじめとする水沢高位段丘面上の遺跡を一望できる。また、本遺跡の南には16世紀後半の開基とされる宝寿寺が隣接する。

調査の概要

検出遺構は縄文時代以降が陥し穴状土坑13基、フラスコ状土坑１基、中世末以降が掘立柱建物跡５棟、溝跡20条、井戸状土坑６基、土坑13基、柱穴状土坑161個である。建物は近世初頭の三面庇建物と付属する小屋が検出された。出土遺物は須恵器・土師器数点、中世末～近世の陶磁器小コンテナ1.5箱、陶器製灯篭１点、礫石器中コンテナ１箱、鉄製品数点、木製品数点のほか、炭化種実、昆虫の羽根である。調査区中央の大溝や隣接する井戸状土坑からは、天目茶碗、瀬戸大窯産陶器皿、近世初頭の唐津産陶器皿、炭化種実、昆虫の羽根などが出土している。


陥し穴状土坑全景

中世末～近世初頭の溝（内容確認調査区）


井戸状土坑から出土した陶器製灯篭

(16) 川端遺跡（かわばた）

所　　在　　地：奥州市胆沢区南都田字大道219番地ほか
委　　託　　者：県南広域振興局農政部農村整備室
事　　業　　名：経営体育成基盤整備事業都鳥２期地区
発掘調査期間：平成22年６月14日～６月24日
調査終了面積：300㎡
調査担当者　米田　寛・杉沢昭太郎
主要な時代　縄文・古代

1:50,000　水沢

遺跡の立地

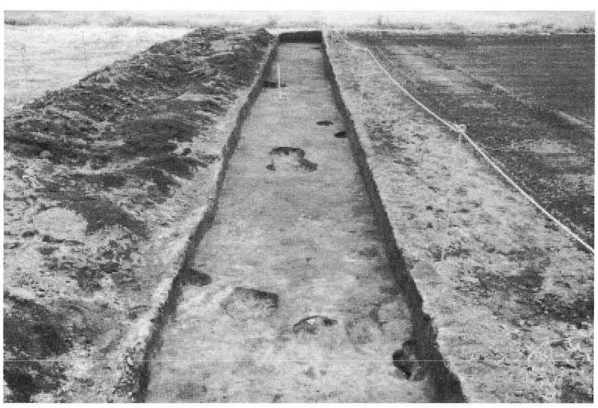
奥州市立南都田小学校の南南西約400mに位置する。遺跡範囲には伊勢神社、南都田第13部落コミュニティーセンターがある。調査前の遺跡登録範囲の現況は、宅地と水田であり、今回の調査区は水田範囲に設定された。本遺跡は、標高82～85mの胆沢扇状地の水沢高位段丘面上に位置する。

調査の概要

調査区は３ヵ所に分かれる。検出遺構は溝跡３条、土坑１基である。いずれも時期不明である。出土遺物は縄文土器２点、土師器１点、石匙１点、剥片１点である。いずれも遺構検出時に出土し、遺構内出土遺物はない。調査区内は、耕作土の下位に黄褐色土層が位置することから、遺物の包含が認められる層は、水田造成時に削平されたと考えられる。

A区西側全景

A区東側全景


B区全景

C区北側全景

(17) 堤（つつみ）遺跡

1:50,000　水沢

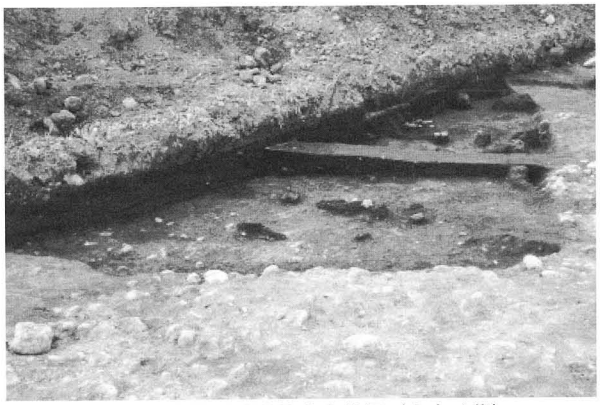
所　在　地：奥州市胆沢区南都田字四ッ柱109番地ほか
委　託　者：県南広域振興局農政部農村整備室
事　業　名：経営体育成基盤整備事業都鳥２期地区
発掘調査期間：平成22年６月１日～６月24日
調査終了面積：340㎡
調査担当者　米田　寛・杉沢昭太郎
主要な時代　奈良～平安

遺跡の立地

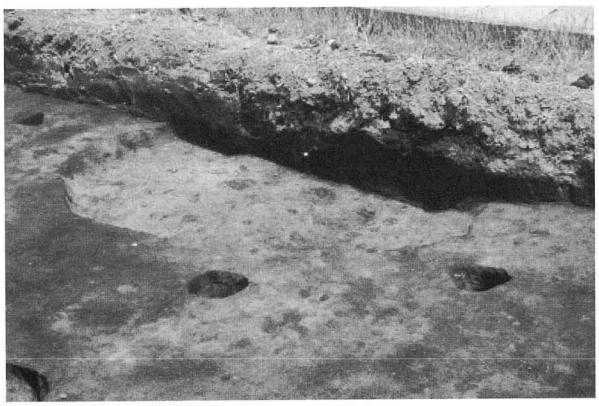
奥州市立南都田小学校の南南東約300mに位置する。調査前の遺跡登録範囲の現況は、宅地、水田、畑地であり、今回の調査区は遺跡登録範囲西端の水田範囲に設定された。本遺跡は、標高80～81mの胆沢扇状地の水沢高位段丘面上に位置する。

調査の概要

検出遺構は古代の竪穴住居跡２棟、竪穴住居状遺構１基、土坑１基のほか、時期不明の掘立柱建物跡１棟、土坑２基、溝４条、柱穴状土坑33個である。また、調査区南側には河川跡が確認された。出土遺物は須恵器・土師器中コンテナ１箱、陶器片１点、スクレイパー１点、鉄製品２点、粘土塊２点、炭化材数点である。遺物の大半が古代の竪穴住居跡から出土している。


１号竪穴住居跡遺物出土状況（奈良時代）

２号竪穴住居跡遺物出土状況（平安時代）


竪穴住居状遺構全景

調査区北側全景

(18) 八反町（はったんちょう）遺跡

1:50,000　水沢

所　　在　　地：奥州市前沢区古城字南八反町47番地１ほか
委　　託　　者：県南広域振興局農政部農村整備室
事　　業　　名：経営体育成基盤整備事業古城２期地区
発掘調査期間：平成22年９月１日～12月10日
調査終了面積：3,210㎡
調 査 担 当 者　杉沢昭太郎・米田　寛
主 要 な 時 代　中世初頭

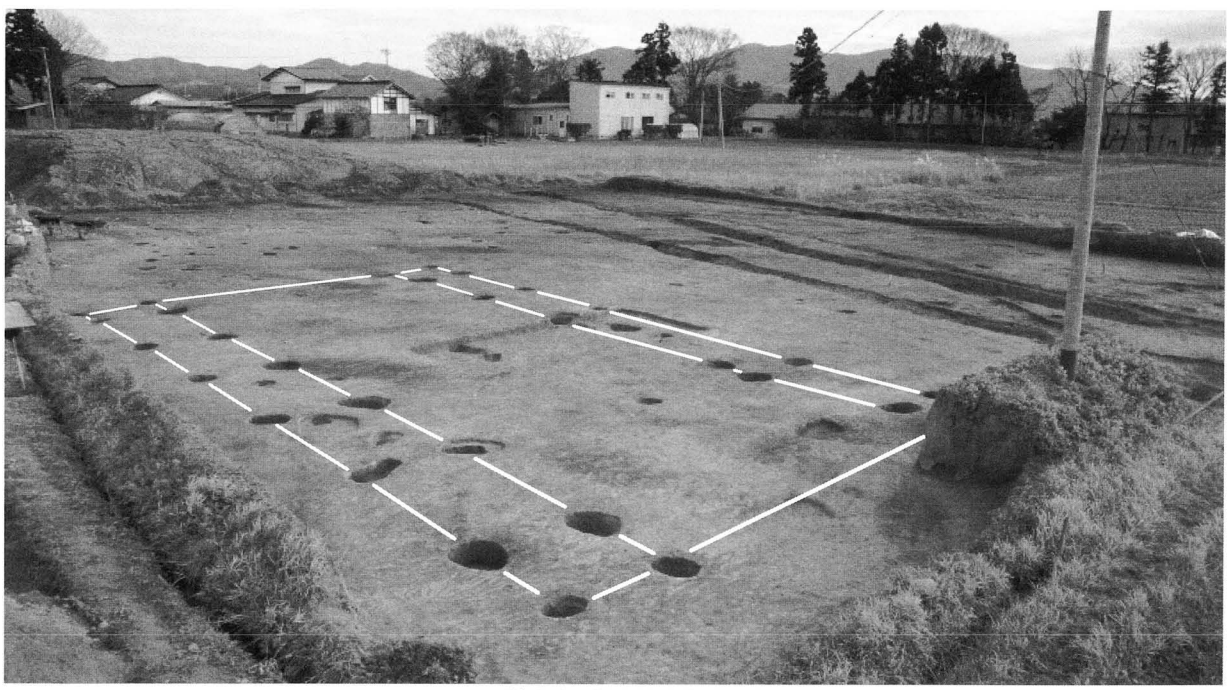
遺跡の立地

八反町遺跡はＪＲ東北本線前沢駅の北北東約４kmにあり、北上川右岸の標高33～34mの河岸段丘上に立地している。平坦な地形の中にも微高地が点在し、現況は畑地と水田になっていた。

調査の概要

調査区は遺跡の南端、中央部、北端部、西部に分かれている。遺構は12世紀後半の道路跡１条、掘立柱建物跡５棟、竪穴住居状遺構１棟、井戸状遺構２基、性格不明遺構３基、平安時代の竪穴住居跡１棟、竪穴住居状遺構１棟、河川跡１箇所、その他の時期不明の遺構としては掘立柱建物跡４棟、柱穴列３基、溝跡27条、土坑18基、井戸状遺構１基が検出された。幅約4.5mある12世紀後半の道路跡が北西－南東方向に延びており、これに沿うように掘立柱建物跡が４棟見つかっている。さらに北へ400m程離れたところからは井戸状遺構や性格不明遺構（粘土を採取した跡か）が検出された。11世紀や13世紀の遺構や遺物はなく、12世紀の期間だけ存続した集落と考えられる。

出土遺物は平安時代の土師器・須恵器、中世陶磁器、かわらけ、鉄製品などが中コンテナ1.5箱。下駄、柱材、杭等の木製品が大コンテナ１箱である。


道路跡と掘立柱建物跡

(19) 中畑城遺跡（なかはたじょう）

1:50,000　水沢

所　在　地：奥州市前沢区古城字水上西88番地ほか
委　託　者：県南広域振興局農政部農村整備室
事　業　名：経営体育成基盤整備事業古城２期地区
発掘調査期間：平成22年９月１日～12月10日
調査終了面積：2,564㎡
調査担当者　杉沢昭太郎・米田　寛・中村絵美・北田　勲
主要な時代　中世後半

遺跡の立地

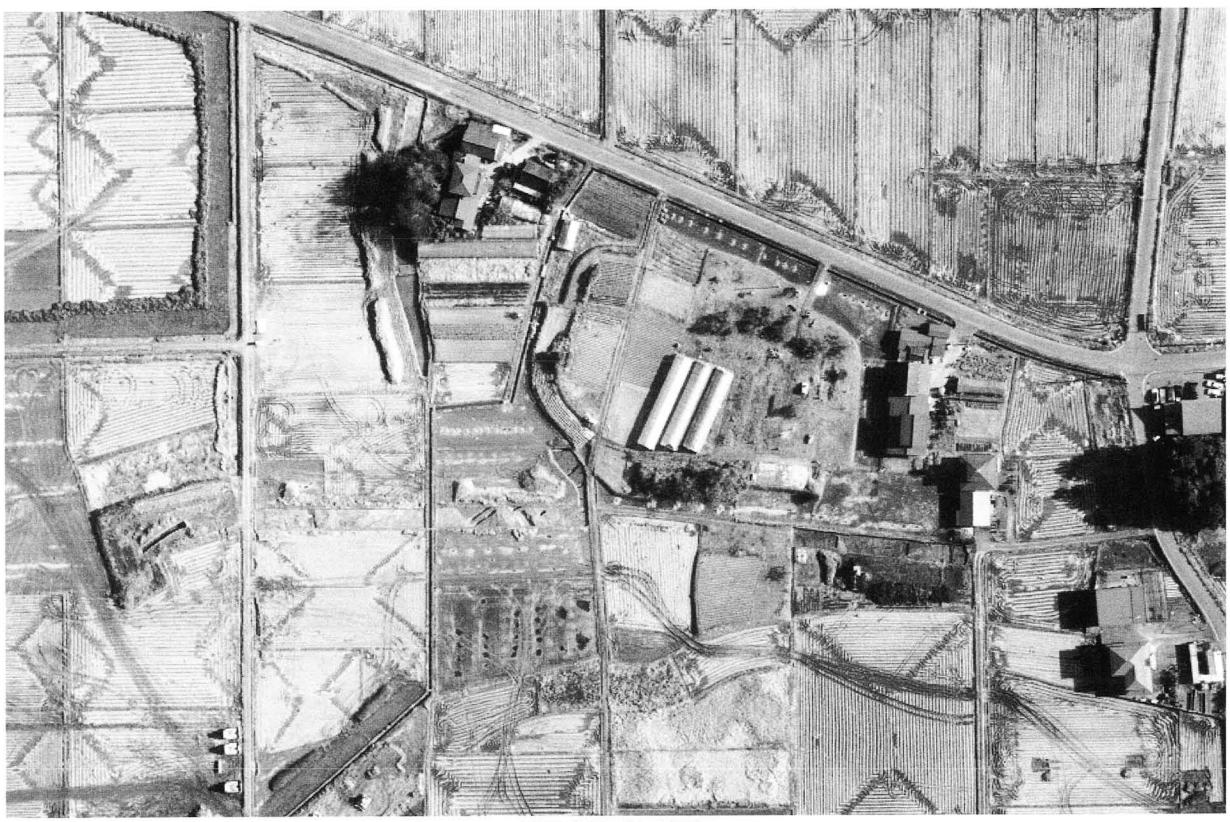
中畑城遺跡はJR東北本線前沢駅の北北東約3.5kmに位置している。水沢段丘高位面にある小規模な微高地を堀で囲んで城域としており、調査区の現況は標高32～34mの水田であった。

調査の概要

「安永風土記」によると本遺跡は、樫山館（御城主樫山平次郎）と記載される城館である。調査区は主に城館を取り囲む堀の西側と北側にあたる。

検出された遺構には中世の堀跡５条、カマド状遺構１基、柱穴300個、縄文時代の陥し穴１基、旧石器集中区１箇所、時期不明の溝跡10条がある。複数ある堀跡は造りかえによるものと考えられる。

遺物では中世の陶磁器が中コンテナ0.5箱、木製品が大コンテナ４箱、鉄器が数点、石器類小コンテナ0.5箱他が出土している。


遺跡全景（上が東）

(20) 堰田（せきた）遺跡

1:50,000　水沢

所　在　地：奥州市胆沢区南都田字二丁目40－2ほか
委　託　者：県南広域振興局農政部農村整備室
事　業　名：経営体育成基盤整備事業（南下幅北部地区）
発掘調査期間：平成22年10月1日～12月2日
調査終了面積：2,123㎡
調査担当者　川又　晋・小林弘卓
主要な時代　平安

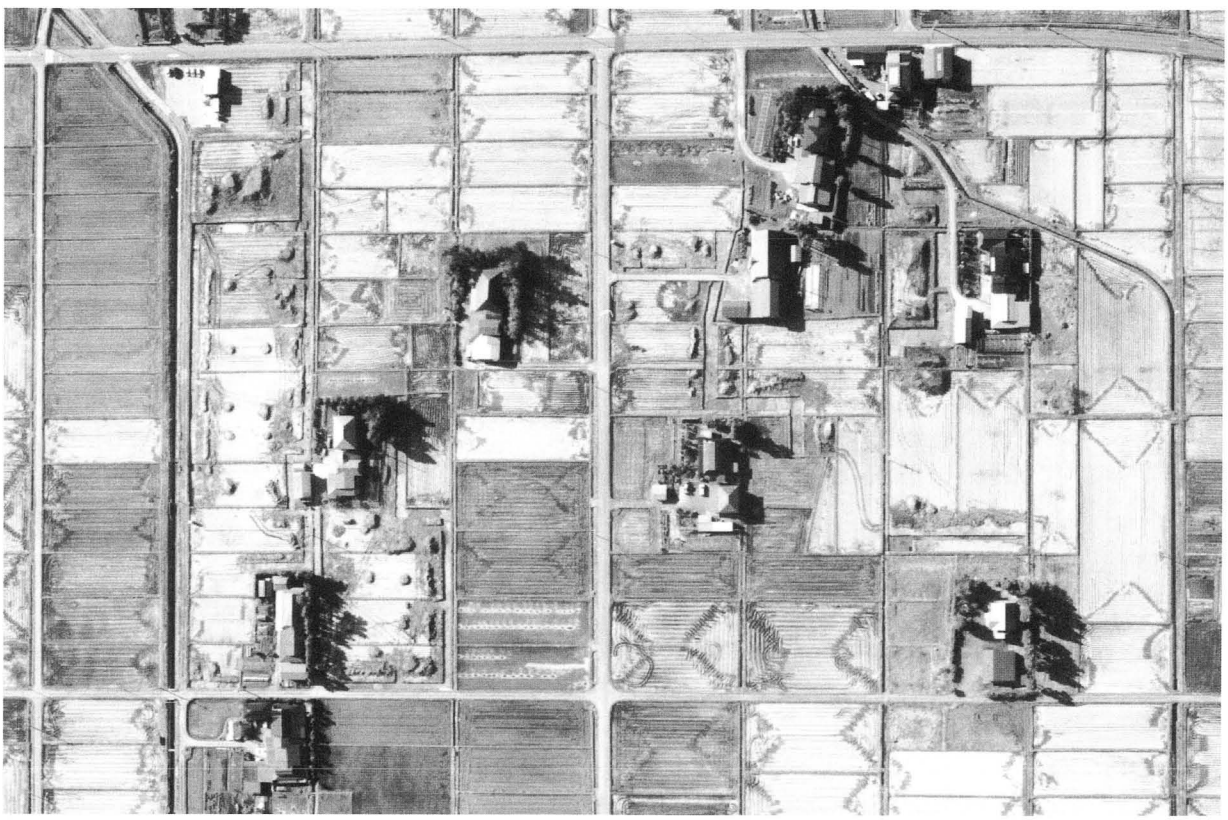
遺跡の立地

堰田遺跡は、JR東日本東北本線水沢駅から西約3.5kmに位置する。胆沢扇状地内の水沢低位段丘に立地し、標高は71m前後で、現況は水田・畑地などである。すぐ南側に机地遺跡が隣接する。

調査区および周辺部は、過去の圃場整備事業により、盛土・削平など大規模な造成が行われている。調査区の大半は旧河道や低地部分にあたるとみられ、盛土層の下はグライ化した粘土層であり、湧水が著しい。

調査の概要

堰田遺跡で検出した遺構は、土坑1基のみである。遺物は、平安時代の土師器・須恵器小コンテナ0.5箱、近世の陶磁器小コンテナ0.5箱が出土しているが、すべて遺構外出土である。



堰田遺跡と机地遺跡（直上から、右側が北）

(21) 机地遺跡（つくえじ）

所　在　地：奥州市胆沢区南都田字机地81－1ほか
委　託　者：県南広域振興局農政部農村整備室
事　業　名：経営体育成基盤整備事業（南下幅北部地区）
発掘調査期間：平成22年10月1日～12月2日
調査終了面積：2,419㎡
調査担当者　川又　晋・小林弘卓
主要な時代　平安

1:50,000　水沢

遺跡の立地

机地遺跡は、JR東日本東北本線水沢駅から西約3.5kmに位置する。胆沢扇状地内の水沢低位段丘に立地し、標高は71m前後で、現況は水田・畑地などである。すぐ北側に堰田遺跡が隣接する。

調査区および周辺部は、過去の圃場整備事業により、盛土・削平など大規模な造成が行われている。調査区の大半は旧河道や低地部分にあたるとみられ、盛土層の下はグライ化した粘土層であり、湧水が著しい。遺構を確認したのはごく一部の範囲で、微高地であったとみられるが、削平を受けている。

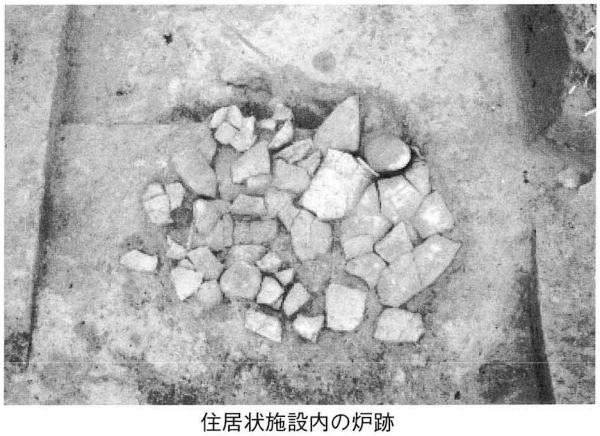
調査の概要

検出遺構は、平安時代の竪穴住居跡５棟、住居状施設１棟、溝跡２条である。竪穴住居跡のうちの１棟を除き、他の遺構はすべて１箇所で集中的に検出した。いずれの遺構も、床面近くまで削平され、遺構の残りは悪いが、遺物は比較的多く出土している。カマドを検出した１棟では、燃焼部付近から土師器がまとまって出土した。隣接する住居状施設では、炉跡の内部から大量の土師器片が出土している。

主な出土遺物は平安時代の土師器・須恵器で、竪穴住居跡を中心に大コンテナ３箱分出土している。調査区周辺には、ある程度の範囲で集落が広がることが予想される。

作業風景

平安時代の竪穴住居跡


住居状施設内の炉跡

(22) 安久沢東遺跡（あくざわひがし）

所　在　地：奥州市前沢区古城字姥屋敷41番地ほか
委　託　者：県南広域振興局農政部農村整備室
事　業　名：経営体育成基盤整備事業白山地区
発掘調査期間：平成22年10月15日～12月7日
調査終了面積：4,380㎡
調査担当者　西澤正晴・溜浩二郎・菅野　梢
主要な時代　縄文・平安・近世

1:50,000　水沢

遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線前沢駅より北東約２㎞に位置し、胆沢扇状地の下位段丘上（水沢段丘）に立地する。遺跡の標高はおおむね30m前後であり、周囲の水田である低地よりも一段高い。調査前の現況は水田・畑地等である。

調査の概要

調査区は６箇所に分かれて点在する。検出遺構は、掘立柱建物跡２棟（平安時代か）、柱穴125個（古代～近世）、土坑５基（平安末１・古代２・不明２）、溝跡22条（古代～近世）、井戸跡２基（平安末１・近世１）、墓壙23基（近世）、焼土７基（古代４・不明３）である。

各調査区とも開田時の削平が多く及んでおり、遺構密度は低い。特筆すべき成果としては、12世紀代の遺構・遺物が発見されたことである。遺跡内には藤原秀衡の乳母を祀った姥神社があり12世紀の伝承が残る地域である。そこから当該期の遺構・遺物が出土した意義は大きいといえる。

遺物は総量が大コンテナ２箱である。大部分は近世墓壙から出土品で、そのほか古代の土器に加えて渥美産や常滑産陶器、手づくねかわらけがある。

調査区全景

(23) 田高（たこう）Ⅱ遺跡

1:50,000　水沢

所　在　地：奥州市前沢区白山字鍵取59番地ほか
委　託　者：県南広域振興局農政部農村整備室
事　業　名：経営体育成基盤整備事業白山地区
発掘調査期間：平成22年11月8日～12月17日
調査終了面積：1,480㎡
調査担当者　星　雅之・北村忠昭・中村絵美
主要な時代　縄文・古代・中世・近世

遺跡の立地

遺跡は奥州市前沢総合支所の北東約2.5㎞に位置し、北上川右岸の低位段丘上に立地する。現況は水田・畑地、標高は31～32m前後である。過去には平成８年・同14年の２回発掘調査が行われており、縄文時代、古代～中世の遺構・遺物が確認されている。今回の調査区は遺跡の北端に位置し、平成８年の調査区と一部接している。要調査範囲は3,480㎡で、このうち1,480㎡を終了した。未了の2,000㎡は次年度発掘調査を行う予定である。

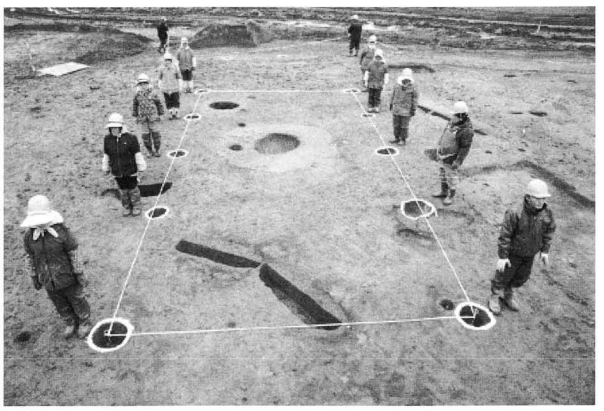
調査の概要

今回の調査では縄文時代の竪穴住居跡１棟、陥し穴状遺構１基、遺物包含層270㎡、平安時代のカマド状遺構２基、不明遺構２基、中世の堀跡３条、墓壙１基、中世～近世の溝跡29条、土坑13基、柱穴状土坑（掘立柱建物跡を構成するものも含む）630個、時期不明の溝跡13条、土坑25基、不明遺構６基が検出された。

出土遺物は縄文土器（前期後葉が中心）大コンテナ14箱、土師器、陶磁器（中世陶器が中心）合わせて小コンテナ0.5箱、かわらけ１点、石器大コンテナ16箱、小刀１点である。

今年度の調査区では、遺構や遺物からみると、縄文時代から中世までのものが連綿と重複していることがわかった。このなかでは遺物量からすると縄文時代が大半をしめるが、数が少ないものの11世紀から17世紀の遺物が出土したことは、県内でも少ない事例のため特記すべき成果といえる。遺構の大部分を占める柱穴（掘立柱建物跡）は、明確な時期を特定できていないが、この古代末から中世の間のいずれかに属すると想定される。このように、今回調査した遺跡北側については、主に中世期の遺構が中心に広がっていることが判明した。

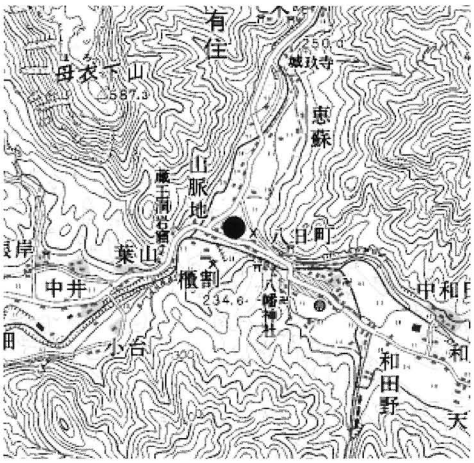
調査区全景（上が東）



中世～近世の掘立柱建物跡（上が北）

(24) 山脈地遺跡（さんみゃくち）

所　在　地：気仙郡住田町上有住字山脈地7－7ほか
委　託　者：沿岸広域振興局土木部大船渡土木センター
事　業　名：一般県道釜石住田線金ノ倉地区道路改良事業
発掘調査期間：平成22年7月1日～11月15日
調査終了面積：2,827㎡
調査担当者　羽柴直人・福島正和
主要な時代　縄文



1:50,000　遠野

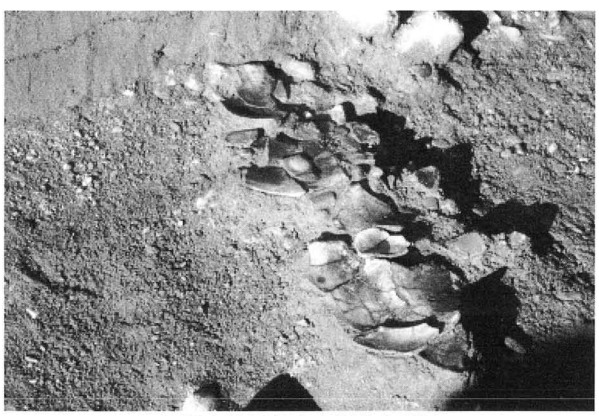
遺跡の立地

本遺跡は住田町役場の6.5km北に位置し、気仙川北岸の砂礫段丘に立地する。調査範囲は遺跡の中央部分に相当する。標高は171m前後で、調査前は水田として使用されていた。

調査の概要

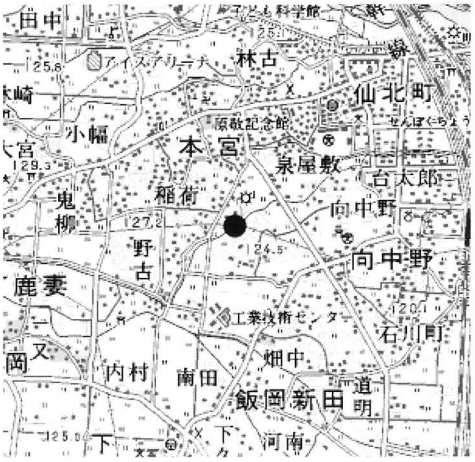
縄文時代晩期前葉、前期後葉、前期前葉、早期中葉の遺構・遺物が検出された。晩期前葉は遺物包含層１箇所、竪穴住居跡１棟、土坑２基、前期後葉は遺物包含層１箇所、竪穴住居跡３棟、土坑６基、前期前葉は遺物包含層１箇所、早期中葉は遺物包含層１箇所が検出された。各時期の遺物包含層は、早期中葉以前に流れていた河川が、埋没していく過程で形成されたものである。埋没層の中位に十和田中掫火山灰が堆積しており、出土遺物、検出遺構の時期区分の根拠となった。また、前期後葉の住居跡の一つ（SI01）は、長径14mを越える大型住居跡である。遺物は縄文土器が大コンテナ80箱、石器が中コンテナ10箱出土した。その他の遺物は、円盤状土製品、石剣類、石製垂飾品、玦状耳飾が出土した。出土遺物は量的には前期後葉のものが他の時期よりも卓越するが、早期中葉の遺物も量的にまとまっており、「貝殻文土器」の良好な資料が得られている。

前期後葉の大型住居跡


早期中葉貝殻文土器出土状況

河川跡完掘

(25) 野古（のっこ）A遺跡　第30次調査



1:50,000　盛岡

所　在　地：盛岡市下鹿妻字北36－3ほか
委　託　者：盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事　業　名：盛岡市新都市土地区画整理事業
発掘調査期間：平成22年4月9日～8月9日
調査終了面積：9,005㎡
調査担当者　小山内　透・中村絵美・杉沢昭太郎・米田　寛
主要な時代　古代

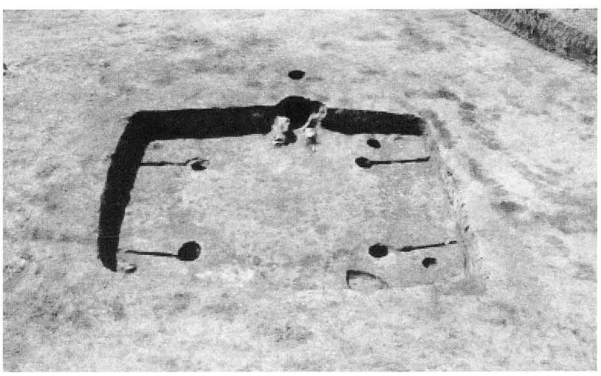
遺跡の立地

野古A遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約1.5kmに位置する。雫石川によって形成された河岸段丘上に立地し、標高は124m前後である。調査区内には旧河道状の低い部分と微高地部分が存在する。平成22年現在で30次にわたる調査が行われており、検出された竪穴住居跡は100棟に手が届くところである。調査区は遺跡範囲の南東部に位置している。

調査の概要

検出した遺構は、竪穴住居跡21棟・掘立柱建物跡１棟・土坑31基・住居状遺構２棟・焼土遺構11基・溝跡８条・陥し穴状遺構11基である。竪穴住居跡の時期は、平安時代が３棟、それ以外は奈良時代である。平安時代の住居跡は調査区内の北側に分布しており、これまでの調査結果も合わせると遺跡北側に平安時代、南側に奈良時代の住居跡が広がる傾向がある。奈良時代の住居跡は互いに近接はしても重複はせず、大小合わせて数棟ごとのまとまりがみられた。微高地から旧河道の落ち際には焼土遺構が並んでいる。焼土遺構は長軸１m前後の隅丸方形～楕円形の穴で、底面または側面が被熱しており遺構内で焼成が行われたものと考えられる。

遺物は、土師器中コンテナ20箱・須恵器数点・石器（砥石・磨石）・土製品（紡錘車・玉類）・石製品（勾玉・切子玉）等が出土している。



奈良時代の竪穴住居跡

竪穴住居跡内遺物出土状況

旧河道際に並ぶ焼土遺構

(26) 飯岡才川遺跡　第17次調査

1:50,000　盛岡

所　在　地：盛岡市飯岡新田２地割46－1ほか
委　託　者：盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事　業　名：盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間：平成22年10月４日～10月28日
調査終了面積：4,000㎡
調査担当者　金子佐知子
主要な時代　縄文・古代

遺跡の立地

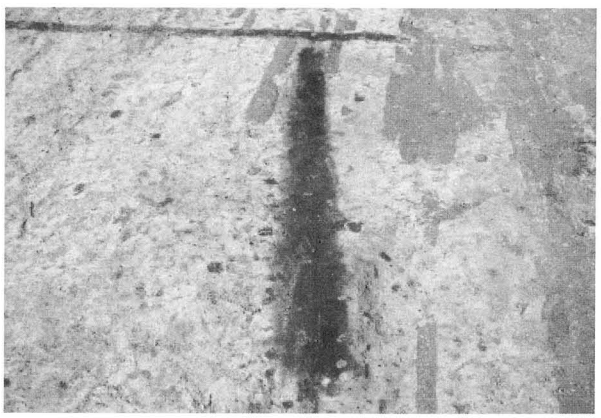
遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅の南西約1.2kmに位置し、雫石川が形成した低位段丘上に立地する。調査区は遺跡の東よりの部分で、標高は123m前後、北側の旧河道に向かって緩やかに傾斜している。現況は畑地、宅地である。

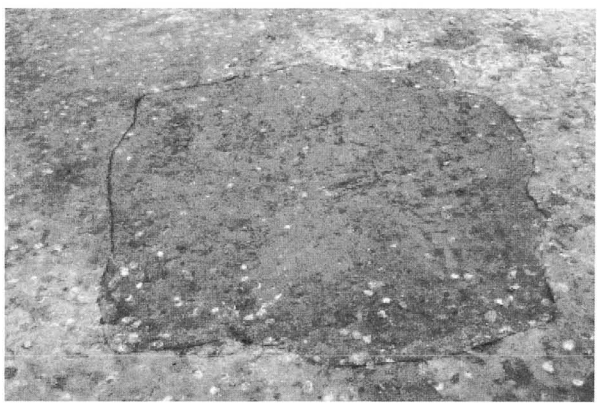
調査の概要

今回の調査は、表土を除去した後、遺構の検出までを行った。調査区は長芋の耕作により全体の約３割が深く撹乱を受けており、この部分の遺構の残存状況は悪い。

検出された遺構は、縄文時代の陥し穴と思われる土坑４基、古代の竪穴住居跡３棟、溝跡３条、土坑２基、近世と思われる土坑１基、時期不明の掘立柱建物跡１棟、土坑３基などである。従来の調査では本調査区西側隣接地の段丘縁辺部北端から古代の円形周溝が多く検出されたが、今回の調査区には及んでいない。また、遺跡南半の東流する旧河道付近では、縄文時代の陥し穴状土坑が多く分布しているが、今回検出された陥し穴状土坑は遺跡北辺の段丘縁辺部から検出されており、北側の旧河道も狩り場とされていた可能性が高い。

出土した遺物は、土師器・須恵器が小コンテナ0.5箱、近世以降の陶磁器が小コンテナ0.5箱で、表土もしくは遺構の検出面からの出土である。


陥し穴状土坑検出状況


竪穴住居跡検出状況

溝跡検出状況

(27) 細谷地遺跡（ほそやち）　第26次調査

所　在　地：盛岡市向中野字野原9－1ほか
委　託　者：盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事　業　名：盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間：平成22年4月9日～8月11日
調査終了面積：6,633㎡
調査担当者　金子佐知子・星　雅之
主要な時代　古代・中世

1:50,000　盛岡

遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅の南西1.5kmに位置し、雫石川が形成した低位段丘上に位置する。調査区は遺跡の中央付近で、２箇所に分かれている。北側調査区は向中野館遺跡に接しており、調査前は自動車整備工場である。南側調査区は約100m離れており、宅地であった。

調査の概要

今回の調査では、古代の集落跡と北側に接する向中野館遺跡の堀の一部、中近世以降の建物跡が検出されたが、面積の約３割が撹乱で、特に北側調査区の北東部分は遺構面が広く削平されている。

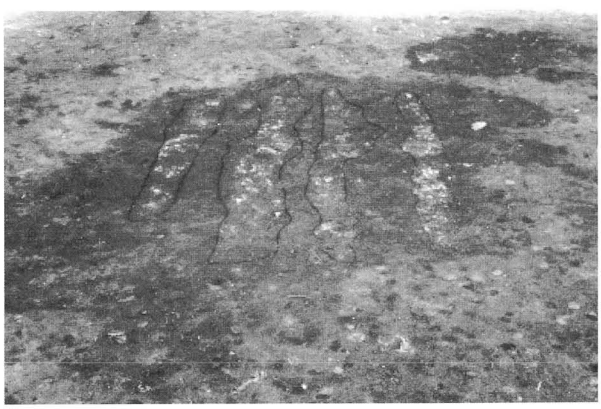
古代の集落は、奈良時代の竪穴住居跡２棟、平安時代の竪穴住居跡14棟、掘立柱建物跡４棟、土坑19基、竪穴状遺構１基、焼土１基、溝跡３条、畝間状遺構３箇所である。平安時代の集落には、倉庫と思われる２×２間程度の小型の掘立柱建物跡が伴う。溝跡２条は間隔約６mを保って、平行に南北に延びている。これらは、過去の調査においていずれも南側で約90度西方向に屈曲していることがわかっており、対になっていることが改めて確認された。畝間状遺構は過去の調査でも低地の埋没土上で検出されていたが、今回は竪穴住居跡の埋土中から２箇所見つかっている。

中世以降の遺構は、向中野館遺跡南辺を区画する堀の一部と２棟の掘立柱建物跡、柱穴列２条であるが、堀跡埋土から出土した近世以降の陶磁器以外には遺物がなく、時期の特定が難しい。

近世以降は掘立柱建物跡２棟、墓壙を含む土坑８基、柱穴列２条、道路状遺構２条がある。掘立柱建物跡は内部に土坑を伴っており、新旧２棟である。近世民家に伴う便所などの付属屋とみられるが、広い撹乱の境目にあり、主屋は削平されたものと思われる。

遺物は、土師器、須恵器が中コンテナ８箱、近世以降の陶磁器0.5箱、緑釉陶器破片１点である。

平行する溝跡



住居跡の埋土から検出された畝間状遺構

(28) 矢盛（やもり）遺跡　第27次調査

1:50,000　盛岡

所　在　地：盛岡市飯岡新田２地割19－2ほか
委　託　者：盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事　業　名：盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間：平成22年８月10日～11月10日
調査終了面積：9,845㎡
調査担当者　小山内　透・金子佐知子・中村絵美
主要な時代　縄文・近世

遺跡の立地

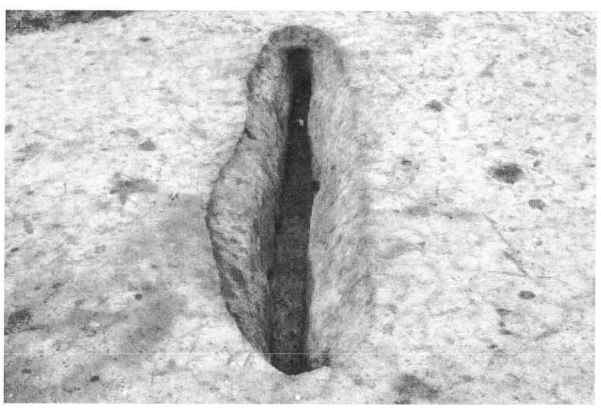
矢盛遺跡は、盛岡市の南西部、ＪＲ東北本線盛岡駅の南方約３km、仙北町駅からは南西に約1.8kmに位置し、雫石川によって形成された低位の沖積段丘上および旧河道に立地する。段丘微高地は主に宅地と畑地、やや低い旧河道部分は水田として利用されており、標高は123m前後である。

調査の概要

今回の調査はＡ～Ｃ区の３箇所について調査を行った。検出された遺構は、形態から縄文時代に帰属すると思われるフラスコ状土坑１基と溝状の陥し穴状遺構13基、過去の調査成果と出土遺物・火山灰・重複関係から古代～中世と推定される土坑１基と溝跡４条、中世から近世と推定される掘立柱建物跡３棟、時期不明の竪穴状遺構３棟、土坑３基、溝跡13条などがある。縄文時代の陥し穴は南北に長いＣ区調査区の中央部でまとまって検出され、長軸長は３m前後で規格性が認められたが、長軸方向や配置にはほとんど規則性は認められない。火山灰が出土した古代の溝跡１条は12次調査区から続くものがＢ区で検出された。古代～中世と推定される溝跡は11次調査区・９次調査区から続くものがＣ区で検出されたが、過去の調査では時期が特定できなかったものである。掘立柱建物跡はすべてＡ区に位置し、１棟は部分的に19次調査で確認されていたものである。

出土遺物は、土師器の小破片が十数点と近世～近代の陶磁器類が中コンテナ１箱弱、鉄釘１点、古銭（寛永通寶）２点などが出土した。このうち遺構内出土は、Ｃ区の溝跡と土坑から土師器破片数点、Ａ～Ｃ区の溝跡から陶磁器類数点、Ａ区の掘立柱建物跡の柱穴から陶磁器類数点と鉄釘１点が出土したのみで、大半が表土・耕作土・盛土中のものである。

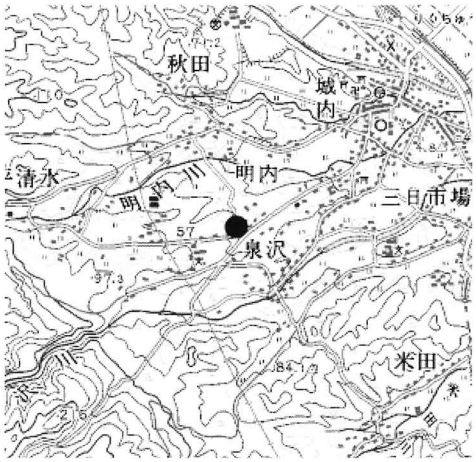
Ａ区掘立柱建物跡



Ｃ区陥し穴状遺構

(29) 中平遺跡（なかたい）

所　在　地：九戸郡野田村第13地割84番地121ほか
委　託　者：野田村
事　業　名：村道拡幅事業
発掘調査期間：平成22年9月1日～10月29日
調査終了面積：2,736㎡
調査担当者　北田　勲・北村忠昭
主要な時代　縄文・古代



1:50,000　野田

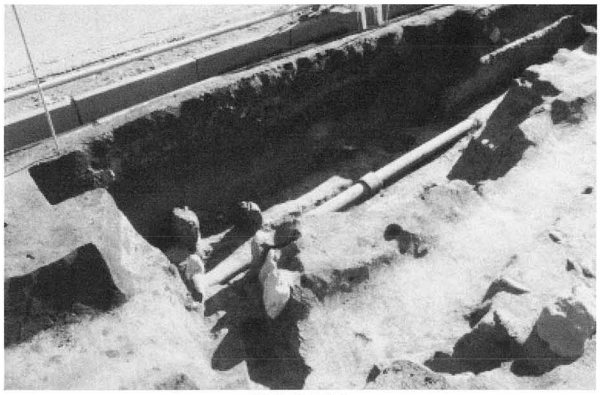
遺跡の立地

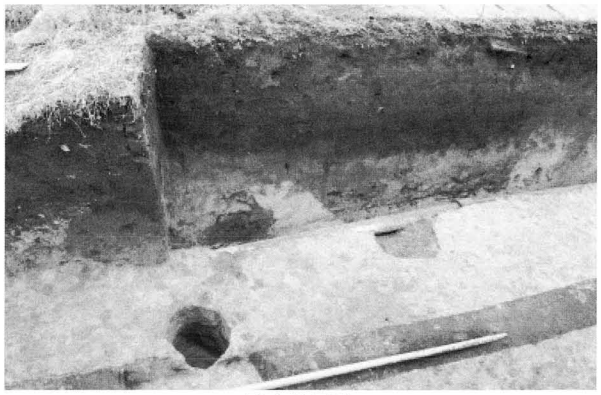
本遺跡は野田村役場の南西約1.8kmに位置する。調査区域は北上高地東端から半島状に延びる標高60～25mの台地上にあり、北側を平清水川、南側を泉沢川に挟まれる。現況は宅地及び畑地である。

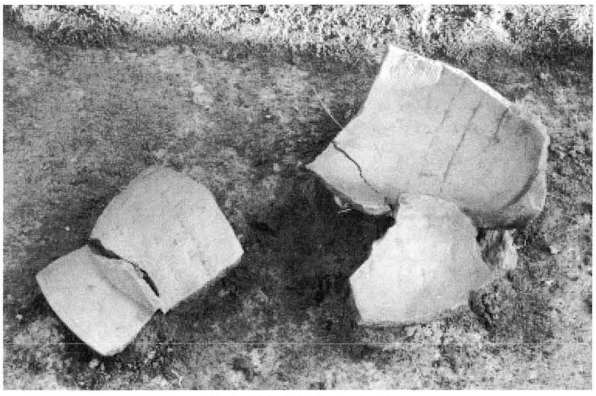
調査の概要

検出した遺構は、縄文時代の土坑１基・陥し穴状遺構14基、古代の竪穴住居跡８棟・土坑２基・不明遺構１基、時期不明の土坑１基・溝跡５条・柱穴状土坑33個である。出土した遺物は縄文土器少量・石鏃１点・土師器中コンテナ１箱・鉄製品４点・鉄塊１点・鉄滓少量・琥珀１点。

中平遺跡は昭和27年に発掘調査が行われ、平安時代の竪穴住居跡が相当数認められた。その後、県指定史跡として登録され、昭和40年には岩手大学草間俊一氏によって調査が行われている。今回の調査区は主に県指定範囲より段丘下段にあるが、古代集落が広範囲に拡がっていることが確認された。


竪穴住居跡


竪穴住居跡


竪穴住居跡出土土器

陥し穴状遺構

(30) 佐原（さばら）Ⅱ遺跡

1:50,000　宮古

所　在　地：宮古市佐原三丁目10番１ほか
委　託　者：宮古市
事　業　名：北部環状線道路改良事業
発掘調査期間：平成22年11月15日～11月25日
調査終了面積：329㎡
調査担当者　杉沢昭太郎・北田　勲・菅野　梢
主要な時代　縄文・弥生

遺跡の立地

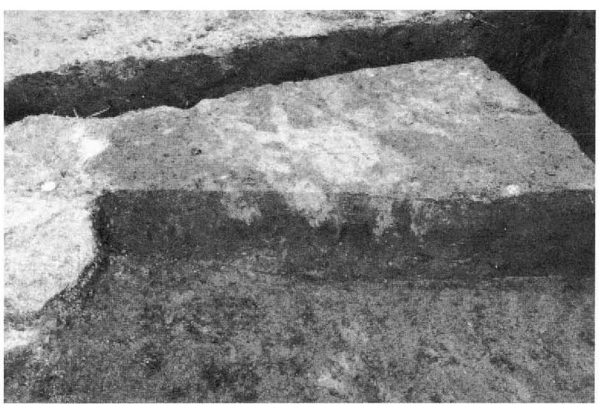
佐原Ⅱ遺跡はJR山田線宮古駅の北北東約２kmに位置している。西から東に延びる二つの尾根に挟まれた傾斜地と平坦面からなり、調査前の現況は杉林と雑種地であった。遺跡の標高100～110mを測る。

調査の概要

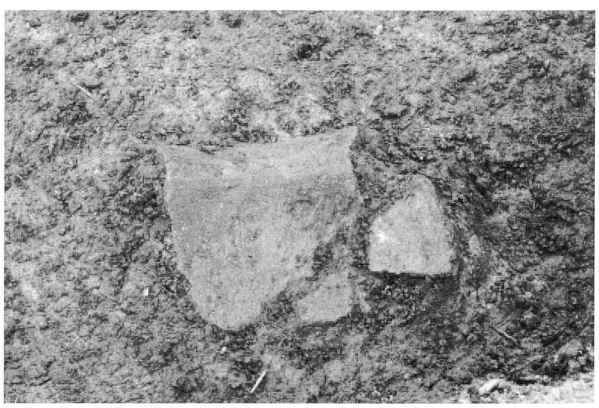
調査区は北側緩斜面と西側の緩斜面とが合流する場所にあたり、焼土が１基検出された。また、この焼土のすぐ近くからは弥生時代初頭とみられる甕が出土している。昨年度の調査ではこの時期の竪穴住居跡が西側の尾根から１棟検出されており、本遺構とは直線距離にして約20mと近い。調査区東側は小規模な沢となっており、ここからは縄文時代前期の土器が出土したが、遺構は確認されなかった。

出土遺物は縄文土器が小コンテナ0.5箱、弥生土器が小コンテナ１箱、石器類・鉄滓等が小コンテナ0.5箱である。

これまでの調査により遺跡西側にある尾根からの緩斜面部には弥生時代初頭頃の小規模な集落が広がっていることが分かった。縄文時代前期の遺物も出土しているが、調査区内からは遺構は見つかっておらず、西側尾根部の未調査区に遺構が存在する可能性がある。



焼土遺構



遺物出土状況

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうにねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成22年度発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第588集
編著者名	
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL（019）638－9001
発行年月日	西暦　2011年3月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
たちばなみなみいせき 立花南遺跡	いわてけんきたかみしたちばな 岩手県北上市立花 ちくだいちわり 地区第10地割ほか	03206	ME66-2128	39度 16分 36秒	141度 07分 54秒	2010.08.02 ～ 2010.11.02	4,900㎡	北上川中流域 治水対策事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
立花南遺跡	集落跡	縄文・ 弥生時代	焼土遺構1基、炭化物集中区1箇所	縄文・弥生土器、石器	赤彩土器出土
		古代	竪穴住居跡2棟、畠状遺構1箇所、溝跡2条、焼土遺構2基、炭化物集中区1箇所、旧河道跡3条	土師器、須恵器、焼成粘土塊、鉄製品	

要約	弥生時代の遺構・遺物が少量と、8世紀後半～9世紀前半を中心とする遺構・遺物が検出された。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
くまのさわ2いせき 熊の沢Ⅱ遺跡	いわてけんとおのしあやおりちょう 岩手県遠野市綾織町 にいさとちわり 新里27地割58-39 ちない 地内ほか	03201	MF54-0051	39度 19分 01秒	141度 29分 00秒	2010.10.05 ～ 2010.10.15	641㎡	東北横断自動車道 釜石秋田線関連 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
熊の沢Ⅱ遺跡	散布地	縄文時代	陥し穴状遺構2基	縄文土器1点	縄文時代の狩猟場

要約	今回調査を行った熊の沢Ⅱ遺跡は縄文時代の狩猟場であることが判明した。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
かみひかげいせき 上日影遺跡	いわてけんあやおりちょう 岩手県遠野市綾織町 にいさとちわり 新里22地割45-3 ちない 地内ほか	03201	MF30-0285	39度 19分 23秒	141度 29分 07秒	2010.09.17 ～ 2010.10.15	1,450㎡	東北横断自動車道 釜石秋田線関連 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上日影遺跡	散布地	縄文時代		縄文土器、石器	縄文・平安時代の遺物散布地
		平安時代	焼土遺構1基	土師器	
		時期不明	柱穴状土坑1個		

要約	今回調査を行った上日影遺跡は縄文・平安時代の遺物散布地であることが判明した。また、平安時代の焼土遺構が見つかったことから、周辺に集落が存在する可能性がある。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
こうでん2いせき 高殿Ⅱ遺跡	いわてけんおうしゅうしまえさわく 岩手県奥州市前沢区 こじょうあざこうでんばんち 古城字高殿60番地6 ほか	03382	NE46-1301	39度 04分 19秒	141度 08分 43秒	2010.05.06 ～ 2010.06.01	677㎡	経営体育成基盤整備 事業古城2期地区

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高殿Ⅱ遺跡	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡1棟、土坑11基、溝跡5条、	土師器、須恵器、須恵系土器、焼成粘土塊、石器	
		近世	堀跡1条、溝跡2条		

要約	今回の調査は、遺跡の南東端部を調査したことになる。検出された遺構や遺物などから、平安時代には集落の縁辺部にあたること、近世には環濠屋敷の一部となっていたことが明らかとなった。どちらの時期も調査区外の北側から西側へと遺構は延びている。

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第588集

平成22年度発掘調査報告書

印　刷　平成23年3月15日

発　行　平成23年3月18日

編　集　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話（019）638－9001

FAX（019）638－8563

発　行　(財)岩手県文化振興事業団

〒020－0023　岩手県盛岡市内丸13番1号

電話（019）654－2235

FAX（019）625－3595

印　刷　株式会社五六堂印刷

〒020－0021　岩手県盛岡市中央通3－16－15

電話（019）654－5610

ⓒ(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2011